

大仏空著作集(二)——II 障害者解放に向けて／III みみずからを語る

山崎 亮編

キーワード＝大仏空、「青い芝の会」、横塚晃一、障害者解放

はじめに

この「大仏空著作集(二)」では、大仏空おほぶつくう(一九三〇―八四、本名は晃、のちに尊教)の著作のなかから、七〇年代、横塚晃一ら「青い芝の会」の運動や思想に触発されて大仏が展開した障害者解放思想に関わる論考(後掲著述目録の9、12)を「II 障害者解放に向けて」と題して、また、この間一九七五年八月一日に行なわれたインタビュー記事(著述目録の13)を「III みみずからを語る」として収める。

すでに公表した「大仏空著作集(一)」——I 基底としての「宗教」^①と時的に重なる部分もあるが、この間の経過を、本稿を読み進める上で最低限必要となる事柄に絞って簡単に述べておきたい。

増田レアによれば大仏は、一九六〇年の安保闘争への参加を契機に、障害者運動に関わることを決意したのだという。^②『しののめ』や「青い芝の会」の活動に関与しながら、一九六三年二月の父大仏晃雄の死を一つの区切りとして、一九六四年一月、大仏は、みみずから住職を務める閑居山願成寺(茨城県新治郡千代田村)を開放して脳性マヒ者の生活共同体を立ち上げる。最初の参加者は、小山正義や折本昭子ら三人だった。本稿所収の「III みみずからを語る」のなかで大仏自身が触れているように、この共同体はのちに「マハラバ村」と称されるようになる。同じ一九六四年の四月には横田弘が、六月には横塚が参加する。「歎異抄の世界を地であった」^③その生活の内実は、横田や小山によってリアルに描き出されているが、横田はマハラバ村で誕生し

た四組の妻帯者の先頭を切って一九六七年一月に、また横塚は一九六九年二月に、それぞれマハラバ村を離れ、横浜市や川崎市に移り住む。

同じ一九六九年七月、マハラバ村では大仏が、脳性マヒ当事者の矢田龍司を殴打して負傷させる傷害事件を起こし、二ヶ月の収監を経て起訴され、東京高裁で執行猶予付懲役一年の判決が確定する。こののち、『しののめ』や「青い芝の会」と大仏との直接の関連は、少なくとも表立っては見出すことができない。その一方で、「著作集(一)」に収録した「最大の念仏者 キリスト」以降も、歎異抄研究会へは積極的に関与していたようで、今回新たに明らかになったところでは、一九七二年の『親鸞』一四に「唯円」について——「横曾根の平太郎だ」という説^④の論考を寄せ、またこの時点では歎異抄研究会の世話人も務めていた。^⑤

他方で、一九六五年に結成された「青い芝の会」神奈川県連合会では、一九七〇年五月に横浜市で起きた、母親による脳性マヒ児殺害事件に端を発した抗議活動——その過程で一〇月には横田の起草になる有名な四ヶ条の行動綱領が公表される——、さらには翌一九七一年の《さようならCP》(原一男監督)の撮影・上映活動など一連の障害者運動が、いずれもマハラバ村出身の横塚、横田、小山、矢田らを中心に展開され、世間の注目を集めている。^⑥そのような状況のなか、大仏も、おそらくはマハラバ村の主宰者と目されていたからであろう、たとえば『朝日ジャーナル』(一九七一年二月)への寄稿を求められたり(著述目録の9)、「青い芝の会」が発行したパンフレ

ット『CP解放運動のめざすもの』(一九七五年?)に「解説」(著述目録の10)を寄せたりしている。

次に、「青い芝の会」の全体的な動向を概観しておく。都立光明養護学校卒業生の山北厚、高山久子、金沢英児らによって一九五七年一月に結成された「青い芝の会」は当初、脳性マヒ当事者の会員の親睦を深める活動を中心としていたが、一九六一年、東京久留米園所属のメンバー(磯部真教、寺田純一、若林克彦ら)が「集団入会」したことも契機となつて、障害者施設の設定をめぐる厚生省への陳情など、障害者の権利擁護のための運動も手がけるようになる。一方、東京以外の各地で支部を設立する動きも出てくる。たとえば、折本が中心となつた茨城支部(一九六一年一〇月)、小山が中心となつた川崎支部(一九六二年七月)などもその一端である。川崎支部は神奈川県内の他の支部と統合して神奈川県連合会を構成し、前述したように、七〇年代「青い芝」のラディカルな運動の口火を切ることになる。

他方で一九六九年には、長年会計を担当していた事務局長石橋玲二による不正経理が発覚し、組織運営をめぐる混乱状態がしばらく続いたが、一九七二年一月の総会で横塚が会長に就任し、磯部が副会長、寺田が事務局長、若林が会計を務める新執行部が発足する。こうして「青い芝の会」は障害者運動の実践的主体として再出発するのである。

若林の総括によれば、行政に積極的に働きかけて制度改革をめざす「久留米園グループ」の現実路線と、障害者差別を告発・糾弾する神奈川県連合会のラディカルな流れとが両輪になって、きわめて均衡の取れた運動形態が実現した、とされる。一九七三年四月には、それまでの東京地区の各支部を統合した「青い芝の会」東京支部が設立され、また関西地区では「大阪青い芝の会」が創設される。組織的にも全国的な展開を見せる「青い芝の会」は同年九月、「全国青い芝の会総連合」を立ち上げる。そのもとで、優生保護法改定反対、養護学校義務化反対、障害等級制度の改革等の諸問題に取り組み、厚生省などともたびたび交渉の場で対峙した。

一九七四年と翌年には春闘にも参加するが、この頃から次第に路線対立が表面化し、一九七五年一月に磯部と寺田は執行部を辞することになる。そののち、二人は「東京青い芝の会」を拠点に独自の現実路線を歩み、これに

対して横塚は会長の座にとどまり、一九七六年には、障害者を支援する健常者の組織「全国健全者連絡協議会」(全健協)や、「青い芝の会」以外の障害者団体も糾合した「全国障害者解放運動連絡会議」(全障連)を立ち上げて、差別告発路線を強化していく。けれども横塚は、障害者解放という理想を実現していく途半ば、一九七八年七月に四二才の若さで他界するのである。

以上の経緯もふまえて本稿を通読することによって、障害者解放に向けて独自に展開する大仏の思想を読み取っていただければ幸いである。

註

- (1) 『島根大学社会福祉論集』八、二〇二二年。
- (2) 増田レア『無縁の地平に——大仏照子の生涯』(マハラバ文庫、二〇一五年)、七六頁。また本稿所収「Ⅲみずから語る」、五五頁以下も参照のこと。
- (3) 横塚晃一『母よ！殺すな』(生活書院、二〇〇七年)、一四頁(本稿、三九頁)。
- (4) 横田弘『ころび草——脳性麻痺者のある共同生活の生成と崩壊』(自立社、一九七五年)、小山正義『いきさま——ある脳性マヒ障害者の半生』(JCA出版、一九八一年)。また後年の回顧としては、増田レア前掲書、里内龍史他編『大いなる叫び——茨城青い芝の会の障害者解放運動』(発行者 里内龍史、二〇二一年)第二章「閑居山マハラバ村」を参照されたい。
- (5) 『親鸞』一三(一九七〇年一月)、六四頁、ならびに『親鸞』一四(一九七二年四月)、五八頁の〈歎異抄研究会世話人〉名簿による。
- (6) 一九七一年三月二日放映のNHK《現代の映像》「一つのCP集団」で「青い芝の会」神奈川県連合会や大仏のことが紹介されたのは、その典型例であろう。
- (7) 「青い芝の会」の歴史を総体として描き出した研究はまだないが、ここでは、脳性マヒ当事者で一時期「青い芝の会」の執行部にも加わっていた若林克彦による『脳性マヒ者の生活と労働』(その4) 軌跡 青い芝の会——ある脳性マヒ者運動のあゆみ(私家版、一九八六年)に準拠した。また、立命館大学生存学研究所のサイト [arsivi.com](http://www.arsivi.com/) 内の「青い芝の会」の項 (<http://www.arsivi.com/201hmn4/>) も参照しよう。
- (8) 一九六〇年、国立身体障害者センターの職員田中豊が立ち上げた脳性マヒ者の生活施設。当時の障害者施設としては珍しく、入所者の自主性を尊重する方針で知られていた。
- (9) 若林前掲書、一〇八頁。

* 昨年の「大仏空著作集(一)」のときと同様、今回も増田レアさんにはひとかたならずお世話になっている。お礼申し上げます。

大仏空著述目録（未定稿。○はすでに本著作集（一）に収録したものを、また◎は本稿に収録するものを、さらに各項目のアラビア数字は本著作集への収録順を示す）

- 1 大仏晃『聖道念仏義抄文』（一九五〇年代後半?）
- 2 折本昭子宛書簡（一九六一年八月二四日）
- 3 折本昭子・大仏空「安楽死賛成論（往復書簡）」（『しののめ』四七、一九六二年四月、三二―三六頁；立岩真也編『与えられる生死：1960年代』Kyoto Books, 2015に再録）
- 4 六角大仏盲眼「袋井 徳君」（『しののめ』五〇、一九六三年六月、「プロフィール」より、三五頁）
- ・『座談会』五〇号でんやわんや」（佐藤文寿・平田淑雄・大仏空（『しののめ』五〇、一九六三年六月、五二―五六頁）
- 5 大仏空「非自己」（『しののめ』五〇、一九六三年六月、九一―九四頁）
- 6 大仏空「寂（サビ）とは?——中曾根君への反論」（『しののめ』五四、一九六四年一〇月、六二―六四頁）
- ・編集部「前号合評」（二〇日市・飯島・山北・今井・横田・大仏・花田・鎌田「文責」（『しののめ』五四、一九六四年一〇月、九〇―九二頁）
- 7 大仏空「最大の念仏者 キリスト」（歎異抄研究会『親鸞』九、一九六六年四月、二九―三〇頁）
- 8 大仏空「ウン：そうだ、タンニ抄だ!」（歎異抄研究会『親鸞』一〇、一九六七年八月、四五頁）
- 14 大仏空「茨城の郷土史散歩から見た本願寺の成立」（日本仏教研究会『日本仏教』二九、一九六九年一月、四四―四七頁）
- ◎9 大仏空「社会福祉は治安維持の道具か」（『朝日ジャーナル』「二三一七」一九七二年二月一九日号、特集・手記「私にとつての国家」2 檻の中の差別、二一―二三頁）
- ・大仏空「唯円」について——横曾根の平太郎だ」という説」（歎異抄研究会『親鸞』一四、一九七二年四月、五四―五八頁）
- 15 大仏空「将門の一族を考察する」（『歴史読本』一九七二年六月号、二六七―二七一頁）
- ・大仏空「序文」（一九七五年四月）（横田弘『ころび草——脳性麻痺者のある共同生活の生成と崩壊』「自立社」、一九七五年八月、四―八頁）
- ・大仏空「異端の系譜」（同書所収、一二四―一六四頁）
- ・大仏空「覇権とはなんだ」（『朝日ジャーナル』「二七一三三」一九七五年八月一日号、「読者から」、一一六―一一七頁）
- ◎13 大仏空「インタビュー構成おのれの地獄を見きわめよ——CP（脳性マヒ）者とともに生きて」（一九七五年八月一日）（『月刊東風』四三、一九七五年一〇月号、八―二九頁；石川次郎『地方論への試み』「辺境社」、一九七六年、三四〇―三七五頁に再録）
- * 資料として、山形青い芝の会「宣言」（一九七五年八月）、横田弘「ころび草」序文の改訂版、横塚晃一「敗軍の兵」（整肢療護園同窓会『同窓会誌』三三、一九七〇年二月）を含む。（資料も含めて小山正義『いきさま——ある脳性マヒ障害者の半生』「JCA出版、一九八一年」に再録、一二一―一八八頁）
- ◎10 大仏空「解説」（青い芝の会全国常任委員会 会長横塚晃一「CP解放運動のめざすもの」青い芝の会、一九七五年?、二四―二八頁）
- ◎11 大仏空「解放理論研究会テキスト」（茨城青い芝の会、一九七九年四月、全一〇頁）
- ・大仏空「解放理論研究会テキストNo.2」（解放理論研究会、一九七九年二月、全二二頁、「風乱軒主人」の記名）
- ◎12 大仏空「序文（人は我々をアナキストだと云う）」、大仏空「解説（解放理論研究「会」テキスト）」（『CP解放運動のめざすもの（他二編）』解放理論研究会テキスト（三版）、解放理論研究会 横塚りゑ方、一九七九年一二月、所収、一―四頁、四一―六二頁。横塚晃一「CP解放運動のめざすもの」、横塚晃一「社会科学としての労働」とともに収録。大仏の「解説」の内容は『解放理論研究会テキストNo.2』に同じ）
- ・大仏空「大仏空講義録」（一九八二年一月一九日―二二日、ならびに一九八三年実施の講義テープを増田レア氏が文字起こしたものの）
- ・大仏空「平将門と鉄王伝承」（一）（『ときわ路』八、一九八二年春季号、六二―六八頁）、（二）（『ときわ路』九、一九八四年春季号、九二―一〇三頁）
- ・大仏空「茨城青い芝夏期キャンプ討議資料（恋愛・結婚・性）」（一九八三年八月一日、講義草稿、改訂版（一九八四年四月二二日）（里内龍史ほか編『大いなる叫び——茨城青い芝の会の障害者解放運動』「発行者 里内龍史、二〇〇二年」に収録、二二七―二三四頁）
- ・大仏空「先祖崇拜を見直す」（『朝日ジャーナル』「二五―五三」一九八三年二月二三―三〇日号、「読者から」、一一二―一一三頁）
- 16 竹本信弘宛書簡（一九八四年二―六月）
- 17 大仏空「最後の言葉」（一九八四年）

収録文題名一覧

II 障害者解放に向けて

9 「社会福祉は治安維持の道具か」(『朝日ジャーナル』一九七一年二月
一九日号、特集・手記「私にとつての国家」2 檻の中の差別) 大仏 空

10 『C P 解放運動のめざすもの』(青い芝の会、一九七五年?) 横塚晃一
〔解説〕

11 『解放理論研究会テキスト』(茨城青い芝の会、一九七九年四月)
〔大仏 空〕

12 『C P 解放運動のめざすもの(他二編)』(解放理論研究会テキスト(三
版)、解放理論研究会、一九七九年二月) より
〔大仏 空〕

〔序文(人是我々をアナーキストだと云う)〕
〔社会科学としての労働〕

〔解説(解放理論研究「会」テキスト)〕 風乱軒主人〔大仏 空〕

III みずからを語る

13 「インタビュ構成おのれの地獄を見きわめよ——C P (脳性マ
ヒ) 者とともに生きて」(一九七五年八月一日、『月刊東風』四三、
一九七五年一〇月号) 大仏 空

資料一「宣言」(山形青い芝の会、一九七五年八月) 〔大仏 空〕

資料二「序文」(横田弘『ころび草』自立社、一九七五年八月、序文の
改訂版) 大仏 空

資料三「敗軍の兵」(整肢療護園同窓会『同窓会誌』三三三、一九七〇年
二月) 横塚晃一

*なお、このうちの横塚の論考については、横塚信彦さんに掲載を快諾して
頂いた。お礼申し上げます。

凡例

・表記は新字・新仮名遣いに統一し、原文に見られる明らかな誤字・脱字・
誤植等は修正した。句読点も適宜補正している。通常の用法ではないが大仏
独自の表現と目される場合は、原文のまま、(ママ)のルビを付している。
・「」内は編者による補足である。

・固有名詞を中心に、文意を辿る上で最低限必要と思われる語句にアスタリ
スクを付し、各文章ごと(「III みずからを語る」では各節ごと)にナンバリ
ングして註記している。

・文中の引用文は原則としてそのまま掲載し、異同がある場合は必要に応じ
て註を付して原文を示した。

・9は、島根大学附属図書館所蔵の『朝日ジャーナル』を、10は、横田弘蔵
書(横浜市の障害者活動センター「きょうの会」に寄贈されている)中の原
本を、11、12は、増田レア氏所蔵原本を、13は、国立国会図書館所蔵の『月
刊東風』を、それぞれ底本としている。13については、インタビュが再録
された石川次郎『地方論への試み』(辺境社、一九七六年)、また心身障害児
総合医療療育センター内整肢療護園同窓会所蔵の『同窓会誌』も参照・確認
している。

・書誌情報等を中心にした簡単な解題を末尾に付す。

・大仏空の思想に関する詳細な解説は、著作集が完結した暁に公にする予定
である。

*本稿は、日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究(C)(一般)課題番号
19K00082「日本における障害者自立思想の覚醒と大仏空の宗教思想との関連の宗教
学的検討」による研究成果の一端である。

II 障害者解放に向けて

9 社会福祉は治安維持の道具か（『朝日ジャーナル』一九七一年二月一九日号、特集・手記「私にとつての国家」2 檻のなかの差別、二一〜二三頁）

大仏 空

私のこと

おとらぎ あきら

（茨城県石岡局区内）

昭和五年、坊主の子として、東京で生れる。僧籍にあるが、現在、無宗派。戦後、大学中退^{*1}、革命を夢見て、社会党書記となり、その後、カトリック修道院にはいる。さらに、養護施設職員。父の寺に帰り、身体障害者たちを同志としてコロンニー運動をはじめ、三年前、その同志の一人を怪我させて、懲役一年の刑^{*2}を受ける。

この人の世に、なにを望むべきだろう。でも、おれは欲情して今日も生きなければならぬ。

はかなしや かねにかけてはなにかせん

心にかけてよ弥陀の名号

ワンラ、クソしてねろ

なにかと引用される魏志倭人伝に、「持衰」という役が出てくる。これは航海する時に乗込み、髪も切らず、体も洗わず、婦人も近づけず、肉食もせず、喪人のように暮し、嵐に会えば海神への犠牲として、海に飛込む。

私はこの、国家のひとつの姿を見る。

元禄（といっても綱吉の時代）に生類憐れみの法なるものがあって、犬を殺しては死罪、なぐつては遠島になった記録が残っているという。やはり持衰の役だ。

つまり、危機の場合でも、平和の場合でも、少数者を犠牲にすることによって、国家は成立する。

今日、福祉国家論なるものが、のさばっていて、自民党から共産党まで、

お題目のようになるとなる。しかし、国家がおこなう福祉政策である以上、どのように美しい法衣を着たって、下からヨロイが見える。福祉政策は国家の手でおこなわれる以上、持衰を作り出すことより、他に効果はないのだ。

弱い者を踏んづけて

私は過去一〇年間を、身体障害者や知恵おくれの者と一緒に暮してきた。そして、そこで感じた矛盾を、ここで書きだしたらきりが無い。が、つづめていうなら、福祉政策なるものは、行政のための行政でしかないということだ。そのよい例は、保護基準に見られる。

生活保護法による保護基準は、「朝日訴訟」などでよく話題になるが、その本質はあまり理解されていない。その本質は、持衰を作ることにある。厚生省では一応カロリー計算などをして説明はするが、その指数を現実の物価・生活費に比べれば、いかにインチキであるか、すぐわかる。しかし問題は、なぜインチキをさもさもモットモらしく説明しなければならないかにある。

それは生活保護法が社会保障制度であるようなよそおいで実施されているが、その実、賃金政策の一環として、すなわち、最低賃金の下の失業対策手当の、そのまた下敷としての性質のものだということにある。

人間の幸福は、他人の不幸を見ることにある、といわれる。もし一般給与より生活保護基準の方が上になったと想像したまえ。それは労働行政の崩壊であり、経済原理の崩壊であろう。

給与体系は、「自分の給料より低い者がいる」ということで成立し、さらに、その下に社会保障制度があるから成立しているといえよう。

かくして福祉制度は、現代の持衰として位置づけられている。

おのれより給料の低い者がいることで安堵するのは人間の最もいやらしい業（カルマ）である。目の見えない人を見ては、自分が盲でないことを感謝し、歩けない人を見ては、自分が両足とも健全であることに感謝する。その心を貧しい人、弱い人への同情・援助・奉仕という形で表現し、そこにおのれを確認し、かくされた優越感を満足させる。

中流意識が差別の源

以前、『朝日新聞』に載った統計によれば、今日の社会に全面的に満足している人は5%以下で、また絶対に納得できない人も7%ぐらいだった。問題は他の約90%の人々の存在だ。

これらの人々の答えは「現在の社会に満足ではないが、努力して克服する」というものだった。なぜ克服できるのか。なぜ我慢できるのか。それは下を見ればきりがなく、自分はまだまだ良い方だ(ー!)と思うことにある。

それは中流意識を持つ人々の統計上の数字と現実の日本社会の貧しさとのズレに現れている。こういう中流意識、つまり、自分は下層階級ではないという意識を、どれだけの人々に持たせるかが、権力維持の秘密なのだ。ここに福祉政策の起点がある。

たとえ社会主義国であつても、働けない者が働いてる者より、多くの年金・手当を受取ることはないのだ。権力は人民に幸福を与えることができないので、政治的に、そして必然的に、一部の人々を社会制度による被保護者という賤民に創出することによって、他のマジョリティーに相対的優越感というニセの幸福を与え、その上にもみ成立する。

中流意識を持つことは、人間として最も恥ずべきことだ。最大の罪悪だ。なのに、国家はこれを効果的に演出することにのみ、その基盤がある。

真の福祉は、みずからの手で闘い取り、築きあげるより他にない。決して、権力から与えられることはない。このことは国家にとって、はなはだ好ましくないことだ。

国家の本質は、人の生命を左右するところにある。戦争にしろ、死刑にしろ、合法的に人命を抹殺し得る唯一の存在だ。この権利を他に渡すことは、国家の権威そのものの崩壊である。そして、国家が人を殺してもよい権利は、生命の安全を与える唯一の存在であるかのごとくよそおうところにある。

もし、生きることがなんら国家に関係なく、おのれ自身によるとするなら、国家はなんの存在価値もない。福祉が国家によっては与えられず、おのれ自身によるとするなら、国家は必要がないのである。福祉政策の矛盾は、このことをあばいてくれる。

ここで福祉政策は、治安維持法としての本性を現わす。

福祉がみずからの手で闘い取るものであることを自覚した人々が、コミュニケーション的なコロナー活動やセルフメント運動などをおこなうとき、権力のやっつけてくれることは何か。いやがらせ、妨害、中傷、圧迫。いわゆる未認可保育所に見られる役所側の態度を、拡大鏡で見るといふものだ。

赤い羽根の共同募金の配分が、どのようにおこなわれるか。右にあげたコロナーやセルフメントには行かない。すでに認可された法人にだけ配分されるのである。その結果、間接的には保守党の選挙資金を寄付している結果にしかならないのである。

非能率的な手作り

未来国家が世界国家になるのか、ヨーロッパのようなブロック連合になるのかはわからないが、現在の国家がそう長く続くとは思えない。しかし、未来国家がコンピュータピアと呼ばれる情報管理社会となり、しかも情報コントロールが強化される恐れは、日に日に増大してくるよう思える。

とくに近代的自我の確立されておらず、体制同調的な日本の精神風土によって生れてきた官僚政治・機構によって、福祉政策が立案され実行されるとするなら、まさに、それは魂のない群衆の(蟻の巣)となるだろう。この蟻の巣を、人々は福祉国家と呼ぶ。

私はこれを新しい古代と呼ぶ。

巨大なピラミッドを作った奴隷制古代帝国。このピラミッドは、合理主義という専制だ。いささかのゆるぎもなく築きあげられた、この人間理性の象徴は美しく立派でたのもしい。それは正義であり、勝利者だ。しかし、醜い敗北者で、卑怯な、そして、邪悪な存在にこそ基礎を置いて、初めて福祉はある。

この非合理的な存在みずからの手によってのみ、真の社会福祉は築きあげられるとするなら、初めから官僚システムなどとは縁がない。

国家的規模の、そして合理的な福祉のマスプロは、その規格からはずれた者を、徹底的に疎外する。

自信のないうちは、「白紙の心境」ではおわかりし、相手が弱い(規格外)

となれば、「蛮勇をふるって処理する」のが、官僚の本質だ。

勝利者が敗者を裁くべきでないのと同様、権力は本質的に賤民に眞の福祉を与えることに無力なのだ。

私たちは今、非合理的な存在に目を開かなくてはならない。それは本当は非合理でもなんでもなく、人間の生きていくことの宿業（本質）なのだ。

中流意識などは捨てて、だれもが持衰であることに気づくべきなのだ。

もう一度、繰返すけれど、中流意識は無意識にも下層階級を想定することによってのみ成立する。それは権力の情報コントロールによって創り出された意識なのだ。

持衰・賤民の立場に立つ限り、権力と妥協は許されない。が、権力はおのれ自身と決して他人ではなく、血縁の存在なのだ。

権力が合理的精神で支えられているのなら、私もまた合理的精神から逃げようとしても逃げ切れない。したがって社会福祉の論理は、自己解体の論理なのだ。

福祉は「合理的」マスプロ方式では作れない。非合理的非能率的な手作りでやるしかない。私はこれからも、西も東もわからず、用便すら自由でない者たちと、当分は一緒に生きて行こうと思う。この子らが、この世にあっては非合理的な存在だというのなら、私は「この世」に一切の期待はするまい。

その先に何があるかは知らないが、浄土のあるという西へ西へ進もう！あとはすべて仏におまかせ致します。

*1実際には大仏が大学に入学した事実はない。

*2実際には二ヶ月の収監のみで、東京高裁で執行猶予四年懲役一年の判決が確定した。

10 『CP解放運動のめざすもの』(青い芝の会、青い芝の会大阪支部、一九七五年?)
青い芝の会全国常任委員会 会長 横塚晃一

一 殺される立場から

『昭和四十五年五月二十九日横浜市金沢区富岡町でおきた重症児殺しについて、被害者の袴田秀子ちゃんと同じ脳性マヒ者の組織である日本脳性マヒ者協会神奈川県連合会より関係各位に対し意見書を提出することをお許し下さい。』

現在多くの障害者の中にあつて脳性マヒ者はその重いハンディキャップの故に採算ベースにのらないとされ、殆んどが生産活動にたづさわれない状態にあります。このことは生産第一主義の現社会においては、脳性マヒ者はともすれば社会の片隅におかれ人権を無視されひいては人命迄もおろそかにされることになりがちです。このような働かざる者人に非ずという社会風潮の中では私達脳性マヒ者は「本来あつてはならない存在」として位置づけられるのです。

本事件の被告袴田美保子においてもたとえ二人の障害児を抱え幾多の生活上の困難があつたにしろ、この「本来あるべき姿ではない」という一般通念が彼女に実際以上の精神的負担となつておおいかぶさり、子供の将来・自分の前途を悲観し絶望的になつてしまつたものと思われまます。

しかしながら真の社会福祉とは社会の一人一人が、自分とは異なつた姿の者、自分より弱い立場の者に対する思いやりをもち、その立場を尊重することではないでしょうか。たとえ寝たきりの重症児でもその生命は尊ばれなければなりません。本事件の原因を施設が足りないこと、福祉政策の貧困に帰してしまふことは簡単です。しかしそのことによつて被告の罪が消えるならば、即ち本裁判においてももしも無罪の判決が下されるならば、その判例によつて重症児(者)の人命軽視の風潮をますます助長し脳性マヒ者をいよいよこの世にあつてはならない存在に追い込むことになると思われまます。

私達は被告である母親を憎む気持ちはなく、ことさらに重罪に処せつたものではないと思われまます。それどころか彼女もまた、現代社会における被害者の一人であると思われまます。しかし犯した罪の深さからいつて何等かの裁

きを受けるのは当然でありましよう。

どうか法に照らして厳正なる判決を下されるようお願い申し上げます。

昭和四十五年七月十日』

右の一文は当時日本脳性マヒ者協会神奈川県青い芝の会が、横浜地方検察庁、横浜地方裁判所などに提出した意見書である。これは私が起草したものであるが、今、読み返してみると文書の拙さや思想的な未熟さが目立ち赤面の限りであるが、障害者運動の流れという観点からいえば大きな転換を画したものであることができよう。

この事件は、二人の障害児をもつ母親が下の女の子(当時二歳)をエプロンの紐でしめ殺した、というものである。この事件が発生するや、新聞をはじめとするマスコミは「またもや起きた悲劇、福祉政策の貧困が生んだ悲劇、施設さえあれば救える」などと書き立て、これに呼応して地元町内会や障害児をもつ親達の団体が減刑嘆願運動を始めた。

そして県心身障害者父母の会(宇井儀一代表)は「施設もなく家庭に対する療育指導もない、生存権を社会から否定されている障害児を殺すのは止むを得ざる成り行きである」という抗議文を横浜市長に提出した。このようなマスコミキャンペーン、それに追隨する障害者をもつ親兄弟の動き、そしてまたこれらに雷同する形で現われる無責任な同情論はこの種の事件が起きるたびに繰り返されるものであるが、これらは全て殺した親の側に立つものであり、「悲劇」という場合も殺した親、すなわち「健全者」にとつての悲劇なのであつて、この場合一番大切なはずの本人(障害者)の存在はすつぱり抜け落ちているのである。このような事件が繰り返されるたびに、我々障害者は言い知れぬ憤りと危機感を抱かざるを得ない。

この問題は神奈川県青い芝の例会にも提出された。或る仲間からは「殺した親の気持がよくわかり、母親がかわいそうだ」「施設がないから仕方がない」「あの子は重度だったらしいから生きていたよりも死んだ方がよかつた」などの意見が出され、これに対し「障害児は死んだ方が幸せと言うならば我々がここでこのように生きていないか」「我々は我々の立場に立つて主張してきたこと自体、矛盾するではないか」

ければならない。自分の立場を主張できない者にどうして他人の立場がわかり、気持を察することができようか」「それらはすべて殺した親（健全者）の論理であり、障害者を殺しても当然ということがまかり通るならば我々もいつ殺されるかもしれない。我々は殺される側であることを認識しなければならぬ」と反論し、時間をかけて話し合った結果、冒頭の意見書を作成する「とともにそれに基づく一連の活動をする」ことに決定した。

二 行動を通して

まず意見書を携えて、横浜地方検察庁へ意見陳述に行ったのであるが、地検のこの事件に対する、また我々に対する反応は冷たいものであった。我々が地検を訪れた時、担当検事は「今、全国の施設の状況を調べて、起訴するかどうかを検討している」と答えた。この事件が起こったのは四五年五月、横浜地検が起訴したのが四六年六月であるから、殺人という事実関係が明らかなものに対して起訴するという極めて初歩的な作業に一年以上の日時を費やしたのである。普通の「子殺し」の場合ほとんどが一カ月以内に起訴されていることからみても理解に苦しむところである。しかもその理由が「全国の施設の状況を調べ」ることにあつたというのである。「全国の施設の状況」などは弁護士側が情状酌量を主張するために行なうものと思っていたが、検察側がそれも起訴するか否かという事で調査するとは……。また、起訴した段階で再び我々が訪れた時、担当検事は「君達の言う通り裁判にかけるのだから、それでよいではないか」と言い放つ始末であつた。

それから、筋違いは承知の上で我々の立場をPRするために、意見書の複製を持って神奈川県庁へ行き、各党の県会議員などにもそれを手渡し我々の立場を述べて回つたが、それでも誰一人として殺された障害者がかわいそうだが、という者はいなかつたのである。そればかりか「あなた方に母親の苦しみがわかるか」「母親をこれ以上ムチ打つべきではない」とか「施設が足りないのは事実ではないか」などと逆に非難された。

なんと障害者は殺されて当然ということが社会の隅々まで行きわたり、それが「常識」として確立されていることか！この社会常識を踏まえたところで行なわれた裁判において、検察側と弁護士側がそれぞれの立場を主張し、激

しく切り結ぶという極く一般的な裁判をわずかでも期待した我々の願いは全くの幻想であつたことを思い知らされた。我々が裁判所に提出した意見書や、我々の生い立ち、生活経験を書き記した文書などの証拠物件は、弁護士側の一方的要求になんら抵抗することもなく削除されてしまつたのである。

裁判は起訴するか否かであれほど時間を費しながら、第一回公判が開かれるや約一カ月間で結審してしまい、その結果は母親に懲役二年、執行猶予三年という判決であつた。

刑法第一九九条に「人ヲ殺シタル者ハ死刑又ハ無期若シクハ三年以上ノ懲役ニ処ス」とある。つまり殺人の場合、最低限三年以上の刑に処せられるはずである。ところがこの裁判では検察側の求刑自体、懲役二年となつており、初めから元値を切つた大安売りだったのである。

我々はこの事件を通じて、我々障害者の存在を主張するために横浜、川崎駅頭などにおいて数度にわたる情宣活動を行なつた。その中のビラ一枚を次に掲げてみよう。

まず表には、CP者の男女が手をつないで歩いている写真を大きく載せ、その横に「我々の存在をいかに受けとめるのか！」と大書してあるだけという変つたビラであるが、裏には次の文書が印刷されている。

『我々に生存権はないのか！』

去る五月二十九日横浜において、まだ二歳の重症児が母親に殺されました。そして地元町内会などにより、減刑運動がおきています。事件発生以来三カ月、横浜地検はどういうわけか加害者を起訴するか否か決めかねております。今までのこの種の事件がおきるたびに施設の不備、福祉政策の貧困という言葉で事件の本質がすりかえられ、「加害者は無罪となるのが常でした。」加害者の無罪が当然とされるなら、殺される障害者の生存権は一体どうなるのでしょうか？

殺されるのが幸せか！

私達は本事件につき、例え動けない者でも、その生命は尊ばねばならず、重症児抹殺を阻止するためにも加害者を無罪にはするなという意見書を提出しました。「重症児は死んだ方が幸せだ」という意見も聞きますが、これは生産第一主義の政策を続ける権力者の意志が、世間一般ひいては重症児の親

にまでおおいかぶさり、働けない者は死んだ方がよいと考えるに至ったのです。この風潮は健全者といわれる人々にもふりかかっております。自然の小さな生命を無視した生産至上主義は、種々の公害を生み、人類全体を滅亡に導くかもしれません。

殺人を正当化して

何が障害者福祉か！

「重症児を殺した母親を罰するよりもまず収容施設を作ることだ」ともいわれます。しかしこのような発想から作られる施設が、障害者の幸せにつながるはずはありません。なぜならそれは重症児の生命を奪ったことを曖昧にし、障害者の生存権をも危くする思想から作られるものだからです。ここにこそ福祉に名を借りた親達や社会のエゴイズムと差別意識が潜んでいるのです。』

三 それでも施設が欲しいのか

裁判の傍聴、街頭での情宣活動、福祉事業関係者との懇談など、我々はたえず行動し続けた。その中の一つに「神奈川県重症心身障害児を守る会」との話し合いがある(守る会は先にあげた「県心身障害児父母の会連盟」の構成団体の一つである)。席上、我々は「この様な事件が起きるたびに減刑願運動が起こり福祉行政の貧困、施設の不足が事件の原因とされ、加害者はあまり罪を問われないばかりか却って同情的になる。それは生産第一主義の社会において、障害者は生産活動に参加できない故に『本来あつてはならない存在』とされるのであり、あなた方が減刑運動に参画し、施設の不足を叫べば叫ぶ程、そのことによって我々とあなた方の子供は首をしめられることになる」と主張した。これに対して守る会の人達は「障害児をもつ親は、必ず「一度は」一家心中を考える」「殺すことはよくないが、それが起こる現実の問題がある」「施設が足りないのは事実であり、施設をゴミ捨て場のように考えるのは極端だ」などと反論した。また我々は「施設を必要としているのは親達ではないのか、親達の要求で作られた施設が障害者福祉だとすりかえられている」「障害者あるいは障害者(児)をもつ家庭は、社会から村八分にされるのであるが、この村八分にする事、施設へ入れる事、締

め殺すことこの三つは全く同根の思想から出ている」と主張し、基本的には差別する側「とされる側」の相違からくる意識の対立となり、具体的には障害者収容施設(コロニー)というものの認識の違いが対立点となり、話し合いは平行線のまま終わった。

この重症児殺害事件に関する運動は社会的に大きな反響をよび、新聞、雑誌はもとよりNHKテレビ「現代の映像」にもとりあげられ多くの人達をこれ以後の障害者運動に巻き込んでいった。

この事件の初めからつまとい、また我々障害者の問題というときまといとて離れない「障害者収容施設」とはいかなるものであるか。我々は「生産第一主義の現体制下において、生産能力のない障害者を社会から隔離し、精神的に、物理的に現社会から抹殺するものである」と主張し続けてきた。これに対して「障害者収容施設は障害者福祉として善政の現われであり、君達の言い分は一方的な極端に片寄った考えではないか」などの反論があるが、私は決してそうは思わない。私の知る限りにおいて親がその障害児(者)を施設に預ける場合、最寄りの施設に入れるのではなく、なるべく遠い所へ入れようとする傾向が著しい。また私が街を歩いていると「どの施設から来たのか」と言う。ひどいものになると「どの施設から逃げて来たのか」と言う。

このような末梢的なことはとにかくとして所得倍増政策を打ち出したかの池田首相の肝入りで作られた社会開発懇談会は昭和四〇年、次のような答申をしている。

一 心身障害者は近時その数を増加しており、障害者の多くは貧困層に属しているのでリハビリテーションを早期に行なつて社会復帰を促進せよ。

二 社会で暮らす事の難しい精薄などについてはコロニーに隔離せよ。また四七年二月に経済審議会が新経済五カ年計画の中で「重度心身障害者全員の施設収容」を謳っている。

これらの答申を基として国立高崎コロニーが作られ、それをモデルとして全国各都道府県に大規模な収容施設が作られている。これがいわゆる全国コロニー網であり、それが完成しようとしているのである。この答申でも明らかなように政府行政機関は、障害者収容施設を「社会開発」「経済問題」と

して発想企画し、経済計画の一環として実行してきたのであり、高度経済成長政策を進める上での労働力確保の意図の下に位置づけてきたのである。そして〇〇センターと称する収容施設（コロニー）には必ずといっていい程「研究所」が併設、または付属されており、ここでは脳解剖、子宮摘出、断種手術などの生体実験が医学の進歩の名の下にひそかに行なわれている。このことに関して「は」我々はいくつかの実例を入手しているが、これらは氷山の一角にすぎないであろう。

これらのことから考えても障害者収容施設とは、また養護学校、職業訓練校、授産所など全ての障害者施設とは、高度経済成長を支え、現社会体制を維持していくために、また一般庶民にマイホームの幻想を貪らせるためにこそ「必要」なのであり、決して決して障害者自身の幸せを願って作られたものではない。従って障害者がそこで自己の存在を賭けて、その生命を燃焼させるというような生活などは望むべくもないのである。

四 あつてはならない存在？

我々は「重症児殺し」の事件と取り組む中から「障害者は、この世にあつてはならない存在」として位置づけられていることに気がついた。それはこの事件の裁判を通じて、また我々の運動に対する各方面からの反応に接して行く中から、我々が肌を感じてきたことであり、更にそれは有名人や政府行政官僚の発言などから実例をあげればきりがないことである。

重症児殺し事件の際、我々の仲間の一人がいみじくも言った「あの子は重度だから殺された方がよかつたのだ」というこの言葉はまさしく差別者の言葉であり、健全者（一般庶民）の障害者に対する感情をよく表わしたものだと思う。この庶民感情によつて、我々は日夜有形無形の差別を受け、中には現実に生命の危機にさらされている者さえいる。その法的根拠ともいふべきものは現在その改定が問題になっている優生保護法なのである。同法第一章第一条に「この法律は優生上の見地から不良な子孫の出生を防止すると共に……」とある。ここでいう優生上の見地とは、また不良な子孫とは一体何なのであるか。

第六八国会に提出されて以来、再三再四にわたつて政府提案という形で国

会に提出されている「優生保護法一部改定案」というものがある。この法案は現行優生保護法のうち、妊娠中絶を認める条項の中から「経済的理由」を削除してそれと入れかえる形で新たな一四条四項を設けることを骨子としている。

すなわち「その胎児が、重度の精神または身体の障害の原因となる疾病、または欠陥を有している恐れが著しいと認められるもの」これは先の第一条の「不良な子孫の出生を防止する」と相まって「障害者差別であり、」障害者抹殺の思想をむき出しにしたものである。しかもそれが国家の法律として定められようとしている点に問題がある。このような考え方に基つき、我々は種々の運動を行なつてきた。その運動の状況を「青い芝」機関誌より引用してみよう。

『障害児を胎内から抹殺することを主な目的として作られ、国会にも上程されたことのある「優生保護法改正案」が四八年五月一日再び厚生省より国会に提出されました。

これに対し青い芝代表は急きよ厚生大臣にあてた抗議文を作り、五月二日厚生省にこれを提出、翌々日五月一日には神奈川青い芝を主体に東京・茨城・栃木の会員約五〇名でかねてより集めていた署名をもつて国会に本法案反対の請願をしました。その後、代表八名は厚生省において精神衛生課長以下数名の当局者に詰問しました。詰問の第一点は改正案の中になぜ中絶できる条件として一四条四項を設けたのか？第二点は優生保護法第一条に「不良な子孫の出生を防止する」云々とあるが、この「不良な子孫」とは何を指すのか？ということでした。当局の答えはわざと的を外したように支離滅裂であったが再三にわたる詰問に「最近サリドマイド児をはじめとする胎児性障害児が激増の傾向にある。両親に遺伝的素質がなくても障害児が発生する場合があります、それを防ぐために今度の改正案を作った」と答え、精神衛生課長は更に重ねて「私は医者でつくづく思うのですが障害者が一人もいなくなればこの世の中がどんなに幸せになるでしょう」と言い放ちました。激怒した我々が机を叩き「だから我々障害者を全て抹殺しようというのか！」とつめよると「今のは失言でした。取り消します」という一幕もあり、更に我々が「公害などによつて障害者がでてくることを防ぐにはそのもとを止め

させなければならぬのに、それを障害児を殺す事によって解決を図るのは本末転倒ではないか」と反論すると、これには答えようとせず、詰問の第二点についてはさんざん堂々巡りをしたあげく「先天性〇〇症」というような病名を羅列し「要するに今の医学では治らないものをいう」との答えでした。これに対しても「ナ、オ、らないものは『不良な子孫』であり生まれる前から殺してしまった方がいいという訳だな!」と言ったのに対し「いやいやそんな事は毛頭考えておりません」「しかしこの改正案にはそのようにはつきり書いてあるではないか」「いや、そんなことは考えておりません」というような応酬の堂々巡りで時間切れとなりました。……(中略)

エピソード

ある女性団体が厚生省にこの改正案に対して抗議に行き「障害者はいわゆるあつてはならない存在か?」と質問したところ「全くそのとおりである」と言い、更に「あの改正案はあなたがた女性、また障害児をもつ親達には説明できる。しかし障害者の方達には説明することができない」と答えたそうです。これをみても「優生保護法改正案」は障害者として許すことができない訳です。』

この後第七〇国会において「靖国神社法案」などと共に自民党の強行採決によって「継続審議」となったため、我々はますます警戒の色を強めている。我々は各地で開かれる集会に出席し、また我々自身集会を開き、我々の立場を主張し続けてきた。弱者救済をうたった四九年春闘においても各障害者団体の統一要求項目の中に青い芝の提案した「優生保護法改定案を撤回せよ」という項目を入れると共に三月二二日から二三日にかけて、厚生省内に坐り込み例の精神衛生課長と渡りあった。四月六日には斉藤厚生大臣に同法案に対する我々の立場、意見を述べなどしてきたが、このような強烈な自己主張は今までの障害者運動にも生活態度にもみられなかったことである。このような運動のバックボーンをなすものに青い芝の行動綱領とも言うべき四原則がある。それを次に示そう。

『一 我らは自らがCP者であることを自覚する。』

我らは、現代社会にあつて「本来あつてはならない存在」とされつつある

自らの位置を認識し、そこに一切の運動の原点をおかなければならないと信じ、且つ行動する。

一 我らは強固な自己主張を行なう。

我らがCP者である事を自覚したとき、そこに起こるのは自らを守ろうとする意志である。我らは強固な自己主張こそそれをなし得る唯一の路であると信じ、且つ行動する。

一 我らは愛と正義を否定する。

我らは愛と正義の持つエゴイズムを鋭く告発し、それを否定する事によって生じる人間凝視に伴う相互理解こそ真の福祉であると信じ、且つ行動する。

一 我らは問題解決の路を選ばない。

我らは安易に問題の解決を図ろうとすることがいかに危険な妥協への出発であるか、身をもつて知ってきた。

我らは、次々と問題提起を行なうことのみ我らの行ない得る運動であると信じ、且つ行動する。』

この思想は突如として障害者運動の中に現われ、今やそれが運動の中核になろうとしているが、この考え方は一体どこから出てきたのであろうか。

五 崩壊からの出発

『善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この条、一旦そのいはれあるにたれども……』

これは鎌倉時代にかかれた歎異抄の一節である。歎異抄は浄土真宗の開祖である親鸞聖人の教えを弟子が書き記したものであるが、その真髓は悪人正機、つまり「悪人こそまず救われるべきである」というのである。親鸞のいう悪人——うみかにはあみをひき、つりをして世をわたるものも、野やまにし、をかり、とりをとりていのちをつぐともがら——は自分が悪人だということを知っており、なおかつ悪業をしなければ生きていけない悲しみを知っている。それに対して善人は「善行」(心身の修業を行ない勉強にいそしみ他人に施しなどをする)のできる、いわば恵まれた人達なのである。親鸞は当時修業勉強する機会に恵まれた人達だけが救われるとする旧宗派を捨て、

庶民——その時代の底辺をなす人々——の中で生きた人といえよう。

現代において、人は無意識のうちに善い行ないをすれば善いことがあり、幸せになれると思ひ、善い行ないとは究極のところよく働くことだと素直に信じこんでいる。「一生懸命働き、社会の役に立ち、金を残し、自分の家を建て、良い家庭を築く、「このようなことが善人の手本であり幸せの見本とされているけれど、」このようなことができない人達はどうなるのかね。それは『不幸な人』すなわち悪とされる。しかし、歎異抄の『悪人』という言葉葉を障害者という言葉に置き換えてごらん。」これはマハラバ村（サンスクリットで大きな叫びの意）のリーダーであった大仏空師の言葉であり、私と大仏師、歎異抄との出会いでもあった。父から常々働くことは人間としての資格なのだといひ聞かされ、現実の自分と比べ肩身の狭い思いをしなから、それに反駁する論理的拠り所を知らなかった私にとつて、この言葉は衝撃であった。そもそもマハラバ村とは昭和三九年茨城県石岡市郊外、小高い山の中腹に建つ閑居山願成寺という古寺を中心に作られた脳性マヒ者の生活共同体であり、この寺の住職が大仏師であった。

「人は誰でも罪深いものである。知らず知らずのうちに人に迷惑をかけている。いや、迷惑をかけ罪を犯さなければ生きていけないのが人間である。それを償おうとすればまた一つ二つと悪いことをしてしまう。そんな罪深い自分に気がついた時に『助けてくれ』と叫ばなければならぬだろう。その叫びを親鸞は念仏といったのだ。そして念仏を叫ばなければならぬなくなつた時、必ず阿弥陀様が救つて下さるといふのだ。障害者は被差別者であり、すぐに被害者づらをするが、同時に自分が加害者でもあることには少しも気づかうとはしない。つまり、皆もつと自己を凝視し、そこから自己を主張する必要がある。そうでないと自分達を差別しているものが何であるかがわからずに過ぎてしまう。」「障害者は一般社会へ溶け込もうという気持ち強い。それは『健全者』への憧れということだが、君達が考える程この社会も、健全者といわれるものもそんなに素晴らしいものではない。それが証拠に現に障害者を差別し、弾き出しているではないか。健全者の社会へ入ろうという姿勢をとればとる程、差別され弾き出されるのだ。だから今の社会を問い返し、変えていく為に敢えて今の社会に背を向けていこうではないか。」このよ

うな話を数年間に亘つて大仏師より聞かされ、また、討論してきたのである。とはいつても有難い法話を聞き經典の勉強などに勤しんだというものではない。障害者特有の社会性のなさ、お互いのエゴのぶつけ合い、社会で差別され、こづき回されてきた故の人間不信と妙な甘え、家に閉じ込められていたが為の気のきかなさ、男女関係のもつれ等々が渦巻き、それは壮烈なまでの人間ドラマであった。だからこそ歎異抄の世界を地で行つたといえよう。

とにかく電燈すらない山の中の生活であり、次々と落伍者を排泄しながら、初め三、四人であったものが二十数名にもなつた。そして三年経つた頃、四組のカップルが生まれ、三人の子供も誕生した。また、ようやく麓の村から電気が引かれ、蛍光灯は勿論、テレビ、洗濯機等文明の利器がどつと入つてきた。しかしこの時から共同体は音を立てて崩壊していった。「私達は障害者だからこのような生活でも仕方ないが、この子達は健全者なのだから健全者の中で育てないと社会性が身につかない。子供達の将来のため一般社会の中で暮らした方が……」との言葉を残し次々に山を去つていった。私も四四年二月既婚者の最後として妻とともに山を下りた。

マハラバ村崩壊の原因をあげる場合、立場により人により様々であろうが、健全者社会への憧れ、思いがけず手に入ったマイホームを守ろうとする意識、それから長年持ち続けてきた健全者への憧れを自分が我が子に乗り移ることによつて満たそうとしたということであろう。しかしまた、角度を変えて言うならば、我々の僅かな抵抗（我々としては青春を賭けたつもりだが）も現代文明における価値観、社会常識に脆くも敗北を喫したのである。重症児殺し事件に対する我々の運動は、マハラバ村への挽歌であった。

マハラバ村で生まれた子供三人は今年それぞれに小学校へ入学した。私の子供はまだ二歳であるが、もう親より歩くのが速い。親が我が子に自分の生命の延長として希望をもち、自分のできなかつたことを子供に期待することは人として親として当然かもしれない。まして我々のように一人前の人間として扱われてこなかつた者にとつてはなおさらであろう。しかし保育園の運動会を見に行き「うちの子のお遊戯可愛いかったわ」と普通の親と同じく目を細めてもいいのであろうか。親が子供にむかつて「御飯はお箸できれいに食べなさい。こぼす子はおバカさんですよ。」という。この極くあたり

まえの言葉が我々の家庭ではあたりまえどころではない。親は匙をガチャガチャいわせながら、こぼしこぼし食っているのである。しかしこの子らは保育園、小中学校と進むにつれて健全者社会の教育をされ、常識をいや応なしに身につけていくであろう。そしてその常識をもって親を見、「先生が言ったよ」ということになるであろう。しかしながら我々はあくまで「それが何だ。常識の方がまちがっているのだ。」と開き直らなければならぬ。できれば我々の存在は抹殺されてしまう。我々は親としての自分と、障害者としての自分との相克の中に生き続けねばならないであろう。

最近「福祉の街づくり」「障害者に住みよい街づくり」等といわれ、車歩道「の段差を一部削ったり、歩道橋」のスロープ化などが行政によって行なわれているが、これらは車椅子に市民権を与える、言い換えれば、生産帯に組み込むことのできるポリオ、下肢切断、脊髄損傷などの人達を労働の場に引き出すことで終わってしまうのではあるまいか。今までのまちは生産の為のまちであり、横断歩道橋一つとってみても生産性を上げる為に他のものを犠牲にしてきたといえる。基本的にはこれまでのまちは生産の為に犠牲にしてきた人間性を取りもどすために、まちそのものを作り変えていく、つまり健全者側が障害者をまちの中へ入れてやるのだというのではなく、健全者の側が今まで行なってきた事を十分に反省し、障害者もまじえてまちそのものを作り変えていくという発想でない限り真の福祉のまちづくりとは言えないであろう。

障害者は教育の場、労働の場、地域社会から疎外された存在であると同時に、家制度、また現代の核家族化したマイホームからも疎外された存在である。逆に言えば、庶民の楽しいマイホームを守らんが為に、またこれを基盤に成り立っている社会体制をこそ守らんが為に、障害者収容施設、巨大コロニー網が必要なのである。我々が巨大コロニー網に反対し社会変革を目的にする限り、例えそれが夢にまでみたマイホームであったとしても、これに執着することは自己矛盾であろう。

我々は例え多くの人々がマイホームの夢を貪る地域社会にあっても、共に手を携えることができる人々と共に、心の共同体を足場に障害者解放すなわち自己解放を目指し、遠い地平線にむかって叫び続けなければならない。

解説

〔大仏 空〕

註1 「そして「念仏を」叫ばなければならなくなった時、必ず阿弥陀様が救って下さる」^{*2} — 本文 —

この文意は「念仏イコール救い」なのだ、と云うことではない。歎異抄に「念仏は、まことに浄土に生まるゝたねにてやはんべるらん、地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり」と云って居り、「念仏イコール救い」ではない。

あらゆる人間の情念を断切った上で決意する、つまり叫ばなければならなくなつた時、それは「いづれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」— 歎異抄 —。

おのれの地獄を見きわめた断念からの出発、絶望して絶望して絶望からつき抜けて出て来る斗い、これは不退転、決して退くことのない斗い(覚悟とも決死の信心とも)。

これを歎異抄では「念仏もうさんと思いたつ心の起るとき、すなわち撰取不捨(退転)の利益にあずけ(参加)しめたもうなり^{*3}」と云っている。

叫ばなければならなくなつた時とは念仏もうさんと思いたつ心の起る時なのだ。

◇

宗教は断乎として問題解決であつてはならない、宗教によつて救われるなどということがあつてはならない。それこそ「いそぎ浄土へも、まいりたく候らわんには、煩惱のなきやらんとあやしくそうらいなまし^{*4}」— 歎異抄 — である。

宗教はあくまでも問題の提起、たえざる訴え・いのり・提訴であつて、決して解決であつてはならない。

解決は絶対なる他者(あなた)のやること、われらは斗うだけ、勝つか敗けるか、それは問わない、それは「あなた」におまかせします。

こうやって歎異抄を読み、念仏の話をするとか青い芝の会は、宗教団体か念仏者の集りと思う人がいるといけないから、とくに書きそえれば、

青い芝の会はあらゆる宗教を否定する、すくなくも宗教によって問題が解決すると云うのなら、その様な宗教は否定する。

がわれらは、そこから知恵を学び人間を理解する武器を借りたのだ。

赤旗をかついだからと云ってマルクス主義者でもないし、賛美歌をうたつたからと云ってクリスチャンだとは思えない。

◇

註2 「障害者は被差別者であり、すぐ被害者づらをするが、同時に自分が加害者でもあることに、少しも気づこうとはしない。つまり、皆もつと自己を凝視し、そこから自己を主張する必要がある。そうでないと自分達を差別しているものが何であるか、わからずに過ぎてしまう」。―本文―

労働者は資本家によって搾取されているが労働者は障害者から労働を奪っている、それが本人の意識的行為でなくとも、労働者は障害者の労働の座を奪っている。

労働とはマルクス氏によれば、人の欲望をよりよくみだし得る様にする活動である（資本論I三二九―三三〇ページ）。

人間は欲望なしには生きて行けない、と云うより、欲望が人間を構成しているのだ。

しかし、それだけなら障害者は生きて行く権利を失う、障害者は欲望をみだし得る手足（生産労働力）をもたない。

労働とは労働力が現実化することだ（資本論I三一五―三二〇ページ）。

もし労働がすでに人間の頭脳のうちに存在していた目的の実現であり、意識的な合目的活動であり人間の労働はクモやハチが巣をつくるのとは異なる（資本論I三三〇ページ）のであるのなら。

そのすでに頭脳のうち存在しているという合目的な意識そのものが現実には虚偽にみちているのを糾弾しなければならぬ。

欲望とは本質的に非論理的非理性的なものであり、意識的な合目的な活動とは矛盾する質的差がある。

この矛盾を通俗観念とか社会常識と云うインチキで妥協し、ゴマかすことによって現実の労働はなり立って居る。

障害者は親の希望を奪った、親の期待を破壊した、がしかし親が期待した様な健全者となり労働しても、その労働はなにかを奪いゴマかすインチキによってなり立っている。

それは親の期待そのものが虚偽（通俗観念・社会常識）の上になり立っているからだ。

われらは自己を凝視し、差別と偏見を凝視し、社会のメカニズムを障害者の立場から、把らえなおし、おのれの地獄を見きわめ、そこに斗いの足場を築かねばならない。

本文中四つの「行動綱領」を中心に、われらは思想的共同体を構築し、この解放区（共同体）を逐次、拡大して権力（通俗観念）を包圍して行かねばならない。

*1本文章においては「」内の文言は存在せず、横塚晃一「ある障害者運動の目指すもの」（『ジュリスト』五七二、一九七四年・横塚『母よ！殺すな』初版「すずさわ書店、一九七五年」に再録）を参照して削除部分を補っている。このパンフレットは、生前の横塚が目を通したものと考えられるので、これらの削除部分が彼の意志に基づく可能性が残されているからである。

*2横塚没後に刊行された解放理論研究会テキスト（三版）『CP解放運動のめざすもの（他二編）』（一九七九年）では、この箇所は、「そして念仏を叫ぼうと思いたつ心のおこる時、仏はつかんで離さないというのだ」に変更されている。この変更は大仏によるものと思われる。

*3大仏の蔵書に含まれた金子大栄校注『歎異抄』（岩波文庫、一九五八年再版）では、「念仏まうさんとおもひたつこゝろのをこるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり」（同書、三六頁「現行版では四〇頁以下」とある。

*4金子大栄校注『歎異抄』（岩波文庫、一九五八年再版）では、「いそぎ浄土へもまいりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんと、あやしくさふらひなまし」（同書、四七頁「現行版では五五頁」とある。

*5カール・マルクス／長谷部文雄訳『資本論（2）第一部 第二分冊』（青木文庫、一九五二年）。以下の引証もすべて同書からのものである。

11 『解放理論研究会テキスト』(茨城青い芝の会、一九七九年四月二〇日、一〇頁) [大仏 空]

一 (ヘレニズムの中で)

はるか古代からあったらしいが、西暦前五、六世紀頃、インドで確立した思想に、^レ世界は意識によって成立する^レというテーマがある。意識をビズナーナ *vinana* と云うが、語根は *na* 分る・判るである。同系統語のギリシヤ語では *gnosis* と云う。これを *gnosis* としして位置づけたのは *マニケウス* またはその系統の人々だろう。

同じ時代にプロティノスが同じことを説いている。同門でないとしても同じ思想の流れの中にいた二人であることはまちがいない。プロティノスの先生は *サッカス* (釈迦氏つまり釈尊シツダールタと同族) と呼ばれた人だった。このサッカスのもう一人の弟子にオリゲネスがいて、三位一体説を中心とするキリスト教の神学がここに、つまり釈迦氏から始まる。

この思想(ビズナーナまたは *gnosis*) を新プラトン主義とも云う。この思想のテーマの一つに一切がある。これは近代数学の整数編にもあたるもので、一という数は一対一つまり、一に全く同じ一があることよってのみ一という数が成立する。ひとつだけで同じものが全然ないのなら一ではない。従って一という数はそれと同じ、二、三、四、……があることを意味する。だから一を認めることは無数を認めることになる。

しかも現実の世界に絶対と同じ！というものはあり得ない。従ってこれは約束ごと、観念上の、いふなれば意識によつてのみ成立する。

また、物質的存在(色)は *介尔* *パラマ* *ナーナ* の集合であるという。パラマは極限の意、アヌは粒・粒子の意、*パラマ* *ナーナ* (極限微粒子)の意味で介尔とも訳す。それは存在を細分化し、もうそれ以上こまかくすると無になる。つまり有と無の接点である微粒子のことだ。太陽の光も光の微粒子で、青、黄、赤、白、黒の五つの性質を持ち(現代では七色とするのが常識だが、それはあくまで常識の域を出ない)、これが後にアッバース朝時代になると、眼の角膜を通して入る光の屈折率の研究で、この光のパラマナーは同時に波動であることも発見されている。ヨーロッパでこのことが発見

されるのは、はるか遅れてニュートンによるのだ。

あらゆる物質存在も地^レ黒・冷、水^レ青・湿、火^レ赤・熱、風^レ白・乾の四の性質のパラマナーの集り方で、種々の物質になるとされる。そしてこの四つを四大元素と呼ぶ。さらに一つのパラマナー(素粒子)は宇宙全体に匹敵する。つまり一即一切・一切一即だとされ、それが集つては散り、散つては集るはてしない生成と消滅の流転が世界の真相だという。

それは陰と陽との斗い、人間にとっては善と悪との争克^マ、社会的には支配と被支配の斗いとなる。

この新プラトン主義と呼ばれる思想は、哲学というより科学的見解の集積といふべきものだろう。新プラトン主義は *gnosis* とも呼ばれ、*マニケウス* の *gnosis* はアサンガとその弟ヴァスバンドウによって唯識論として完成する。ヨーロッパ的な観念論と全然ちがう。カントもコペルニクスの転回といつて世界は認識で成立すると云ったが、仏教のそれは、意識とは覚悟であり、いかに生きるべきか処すべきかの問題であるから、単なる認識論とは一緒にならない。

二(中華では)

この唯識論(新プラトン主義・*gnosis*)が中国に入り智顛³ *T'ien-tsan* によつて、「まさに知るべし、若しくは識もしくは色(物質存在)皆これ唯色(唯物)なり、若しくは識もしくは色、皆これ唯識(唯心)なり」(四念処卷四)と逆転される。

すべての物質的存在(色・世界)が意識(心)で成立するのなら、識(心)は色(物質存在)であり、色は識である。つまり意識は物質存在ということなのだ。これを智顛の唯心論という。

智顛の哲学は唯識論を逆転したものではあるが、それを素材として取り入れ、十界互具という独特なテーマを作る。

十界とは、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天、声聞、縁覚、菩薩、如来で、人間は絶えずこの十界を経めぐるといふ。腹がへつては餓鬼、レストランを見つけて人心地、食べては天国、食つて飲んでそこに美人のウエイト

レスが来るとタチマチ畜生的感覚となり、料金を払う段階で地獄、割勘でもしようとするれば阿修羅、とても菩薩や仏にや縁がない。

しかし考えて見れば、腹がへった段階で食べることも金を払うこともすべて原因してる訳で、後になって気づくだけのことだ。一界の中に十界すべてはある、これを十界互具と云う。このことは、如来にも地獄もあれば畜生もあるということだ。シッダールタ（お釈迦様）だって人殺しもすれば盗みもする者なのだ。ただ彼は悟ることによって如来となっただけ、逆に極悪人も仏なのだ！これが悪人正機説の源流であり、十界互具の概略でその素材は新プラトンのものだと言えり。

しかし智顛の弁証法の中心はナーガルジュナの中観論、いわゆる空の思想である。空とは存在と非在のどちらでもあって、どちらでもないことで、存在と非在の同時にあることに近い、固定的実体はないが明確に生きている。生成と消滅の同時存在と云えばよいのだ、と云える。これは世界（自然）の実相でもある。これを智顛は空仮中の三つのカテゴリーで説明する、ヘーゲルの弁証法と似ているが反対の面もある。

ヘーゲルの弁証法では、テーゼ（定）、アンチテーゼ（反）、ジンテーゼ（綜）と進むが、智顛の弁証法にあってはジンテーゼがなく、断絶があつて、その断絶そのものが相即であり統一であり断絶すればするほど、断絶しつくすことにこそ綜合がある。

三（現代に生きる）

毛沢東は「常には分れて二と為る」と云っている。フランス共産党のアルチュセールは、これは毛沢東のマルクス主義に対する根本寄与として、その独自性を高く評価しているが、東洋思想にうとい者の言葉であつて、中国の哲学史を知ってる者ならこの言葉が智顛の哲学の後継者であることは一目瞭然なのだ。

綜合を求めず絶えず対立・矛盾になり切つて行く、絶えざる階級対立を指弾し継続革命を称えて止まなかつた毛沢東は、中国文化の深い伝統の中で理解されるべきなのだ。

この弁証法を今、田村教授の解説^{＊5}で見ると、

① 相対を相対として否定し絶対を立てること。

② 相対を相対そのままで絶対化する事。

③ 相対を相対として否定、しかも統合する絶対、ということになる。

①の場合には真理と現実を対立矛盾するものとする。現実はいくまでも真理たり得ない。従つて虚無となるか、超越的一神あるいは真理は認めるがそれは人間になんら関わりがないとする、これを相対妙と云う。

②は現実肯定で、真理とか理想を求めないというより、矛盾があるのが対立があるのが、そのままを理想とし真理とする現状埋没、これを絶対妙と云う。

③は矛盾は矛盾、対立は対立として、矛盾の中にこそ相即・相補があり、対立があることに出発の起点を置く、これは総絶対妙と呼ばれる。

この思想を最初に日本へもたらした人は、鑑真だった。

四（日本では）

第三のカテゴリー（総絶対妙）の立場を更に追求し、真の意味で智顛の哲学を發展させ完成させたのは日本の天台法華だと云われ、それを本覚思想^{＊6}と云う。

それは、対立を対立としてだけ把えるのではなく、対立してるものを対立してないとするのでもなく、あくまでも対立は対立として把え、対立してるからこそ相即・相補だと把え「生がなければ死もなく、死がなければ生もない、上がなければ下がなく、下がなければ上もない、不幸がなければ幸福はなく、幸福がなければ不幸もない……以下略」毛沢東の矛盾論^{＊7}岩波文庫。

つまり相即であるからこそ矛盾が起きるのだから、相即性を断ち切ることに解決のいとぐちがある。これはあくまでもいとぐちであつて、真の解決でないことは当然である。しかも相即性は断ち切れないからこそ相即と云われる由縁なのだ。これを断ち切るのだ。

第三のカテゴリー「中」（総絶対妙）とは幾何学的中心ではない。どんな「に」片寄つていても一隅であつても真中とする決断、それは決断であり選択である。一見非論理的なようだが、論理的に能力の限界まで研究、実践し

抜いた者には極めて論理的だと云えるもので、本当は論理とか非合理とかの、さらに先にある立場だと云ってよい。科学上の偉大な発見や人類の歴史はこうして発展してきた。

「多くの矛盾が存在しているが、そのうち、かならず一つが主要矛盾であって、その存在の発展によって、その他の矛盾の存在が規定され、または影響される」(『実践論・矛盾論』*8)。

これが日本では比叡山の学問として最澄から法然にいたる平安期に確立していった。断ち切ることを「寂」サビと云った。サビとはスサビの略で、スサビはスサムと同じ、スサムはススムと同じで、進行を意味する。あるいは断行と云ってもよい(宇宙・自然の生成と滅亡の同時進行とも関係する)。

そして断ち切ることの反動として、切り捨てることの自己告発(懺悔)が相即的になければならない。それを「詫」ワビと呼んだ。

つまり「さび」と「わび」とは表裏一体のものでなければならないのだ。

親鸞は多くの矛盾の中から自己を救いようのない極悪人(身分的にも)と規定していった。それは決断であり選択であり実践であり斗争であった。これは智顛の思想の発展から出て来る当然の結論だと云える。

一隅を照らす これタカラなり*9 最澄

*1 ササン朝ベルシア発祥のマニ教の創始者マー(216-277)のこと。ラテン語の Manichaens に由来する呼び名。マニ教は、キリスト教、ゾロアスター教、仏教が混濁した二元論的色彩の強い宗教である。

*2 Ammonios Sakkas (生没年不詳)のこと。アレクサンドリアで三世紀前半に活躍した哲学者。

*3 (538-597)、天台宗の開祖。天台大師とも称される。

*4 智顛の著と伝えられる『四念処』巻四からの引用であるが邦訳はなく、大仏がどの解説書に依拠したかは不明である。ちなみに『大正新脩大藏經』第四六巻 諸宗部三(大藏出版、一九二七年)所収の『四念処』巻四の該当箇所は「當知若色若識。皆是唯識。若色若識皆是唯色」(五七八頁)となっている。

*5 田村芳朗「天台本覚思想概説」(田村芳朗ほか編『日本思想大系9 天台本覚論』[岩波書店、一九七三年]、所収)、四八一頁以下。

*6 本稿「Ⅲみずからを語る」「六「法華一乗」と「悪人正機」」を参照のこと。

*7 松村一人／竹内実訳『実践論・矛盾論』(岩波文庫、一九五七年)、七一頁以下。ちなみに原文では「生がなければ死はなく、死がなければ生もない。……」となっている。

*8 同書、六一頁。原文では、「……その存在と発展によって、その他の諸矛盾の存在と発展が規定され……」となっている。

*9 周知のように、最澄の『山家学生式』冒頭にある言葉で、一般には「一隅を照らす、此れ即ち国の宝なり」として知られる。ただし、この言葉については、最澄によるものであるか否か、現在では疑義もある。

12 『CP解放運動のめざすもの(他二編)』解放理論研究会テキスト(三版)
(解放理論研究会 横塚りゑ方、一九七九年二月二四日)
序文(人は我々をアナキストだと云う)(一〜四頁) 「大仏 空」

人は我々をアナキストだと云う。云いたいものには云わせて置くしかない。たしかに我々は現代社会の理性なるものを認めはしない。

正確に云えば理性・愛・正義などというものが存在し、存在していると安直に結論して、道徳さらに法律を作り、その上に権力が成り立っていることを全面的に拒否する。

権力というものの本質は人殺しにある。合法的とは、多数の人が認める、あるいは勝った方の論理だ、という以外に理由はない。それは超越的絶対的真理などというものは有り得ないか掴み得ない、それなのに権力が生殺の権を持つということは、必然的に力に依らねばならない、武力(暴力)を持たない権力は、かつて人類史上存在しなかった。

権力というものが思想・文化・立法・行政などの総合体だとしても、それらをバラバラにしては権力が成り立たず、それらを纏めて組織化する力は、反対者・批判勢力を排除し息の根を止めるに足る力、具体的には武力であり、さらにそれを実行可能にする信念であり、とても平和な対話の精神などではない。

CPとして生きることが、これを日常的に実感として持ち続けることなのだ。

だが重度CP(食事・用便・着脱衣など一切に介護を必要とする者)と介護者との関係は、一方が権力者になるというのではなく、強制するものとされる者との区別が逆転してしまう。しかしそれが公務員の勤務する施設となると、嫌でも介護者は権力者に変身せざるを得なくなる。そこになががったのか、業務方針であり規則であり障害者の規格化なのだ。権力は我々を人間一般・類的存在としてみる。そこには平均化があり規格化があり、人間としての責任の放棄がある。

権力は、異常や規格外を一方的に切棄てることにその本質がある。もし権力にとっての反体制勢力とか批判勢力のひとつひとつの意志を尊重してい

ば、権力そのものの崩壊に連がる。だが反対意見とか批判は、権力者にとって権力がよりよくなるための必要条件であり、必然的に発生するものなのだ。人類の歴史の中で、絶対に正しいイデオロギーと称するものが何回か現われた。

いわくキリスト教、いわくマルクス主義(もつともマルクス主義はキリスト教の一変種だとの見解も有力ではあるが)。しかしそれらの結末はミジメなものだった。それは強弁することはできるだろう。がしかし、それすら率直に失敗した理由を反省することの方が人類としての知恵だと思うのだが、権力の座に居るとそれができない。

都合の悪いものを切り棄て「悪」だと烙印することが体制の確立であり、悪を排除することで正義を成立させて来たいいわゆる理性というものは、もはや人類史上の道化でしかない。

我々は、正義というものは一片の夢物語りでしかない、と考える。

青い芝は、今まで無駄とされ役立たずと呼ばれ邪魔だとされ、さらには悪とさえされる様な存在にこそ、正義があり理想がかくされているのではないか?……と主張する。

青い芝は斗う組織であり、社会の変革を目標としている。それは必ずしも政治だけを対象としてはいない。また我々は、我々が正義だと思っから斗うのではない。我々が悪だとされるから斗わざるを得ないだけなのだ。従って非暴力の斗いとなり、対手を抹殺しようと思っではなるまい。

青い芝の斗いは邪魔者・悪人とされる者の生存権斗争であり、正義や愛が規格化された体制として、我々、規格はずれを、抹殺する圧力としておそいかかって来ることに對して斗うのだ。現実には乱暴と思われることはあつたとしても、決して対手の存在を抹殺することがあつてはならない。それなら権力と同じ誤りを犯すことになる。そのために全CPは団結しなくてはならない。CP者は聖なるものなのだ。

「これに続いて、「青い芝の会全国常任委員会 会長 横塚晃一」名で『CP解放運動のめざすもの』が再録される(五〜三二頁)が、本稿の11と同内容(ただし大仏による「解説」は省かれている)なので、割愛する」

社会科学としての労働^{*}(三三〇―三四〇頁)

〔横塚晃二〕

いま私たちは労働という言葉を日常に使っています。この労働という言葉は、使わなければ日常生活に支障をきたします。しかし、労働という言葉の持っている意味・内容はいつたいなんなのか分からないままに、使っているに困ります。

多分、労働という言葉は、日本では明治以後成立したように思います。若し、それ以前に使われていたとしても、今日とは意味・内容が全然ちがっていた筈です。

近代(この言葉も曖昧に使われていますが)産業社会になって、近代的労働関係が生まれてから使われ出した言葉で、昔の武士が殿様に仕えているのは、労働とは言わないし、従って、当時の大工が家を建てるのも、百姓が農作業をやるのも労働ではなかったのです。

近代的な意味での労働は、工場生産の様式、それは大量生産によってコスト(経費)を下げ、商品を安く作ること、工場生産とは分業で労働というのが単純な作業で、未熟練労働者で済む、つまり低賃金で済むことに、最大のメリットがあるのです。それは人格を売りわたすことである訳です。つまり、人間が工場の部分品になることです。それは、いくらでも取り代えられる人間だということです。そこには、自分の意欲や意志に関係なく、職場全体の(それは経営者の意志)目的のために、人格を売りわたすのです。そしてその代償として賃金を受け取る訳です。これは金にさえなればよい!ということです。働かなくても金にさえなれば、働く必要を感じないのです。まさにマルクスの分析の通り人間疎外と云われる。隣人を蹴落とし、自分自身も人格を失う現象が、そこにはあるのです。

自分の腕(技術)を誇るため仕事をするのだ、金は目じゃないとか、世のため人のために犠牲をしているのだ、というのは労働ではありません。

これは主として、工場生産、つまり大量生産・大量消費を可能にする巨大な市場、それは近代国家と呼ばれるものですが、それが成立したことによって、人間が国家というローラーの下敷になって、人格を失なったことなのです。そして近代国家が人間相互の有機的な連帯を断ち切ったことによって

労働が成立したのです。若し、相互に有機的に繋がっていたとすれば、ひとりひとりの責任が明確でなく、利益の分配などでは違ったシステム(仕組み)が必要になり、近代的な労働関係というものはなくなり、この近代というもののあり方から、障害者差別は起るのです。

マルクスは、この矛盾をなくすために、計画経済を考え、連帯性の復活を夢みましたが、彼の時代にはまだ社会科学があまり進んでいなかったこともあって、計画経済で回復されると思った連帯性は、むしろ強制的な、画一化になってしまっています。それは工場生産システムを、その儘にした計画経済だからでしょう、それは官僚支配・思想統制にならざるを得ないので。

青い芝の立場から言えば障害者(CP)の労働は無意味だと言えます。健全者の何倍も苦勞して、何分の一かの効果しか上らない労働などは、現代社会では成り立ちません。福祉施設で、なにもしないで居ると時間が待ちきれないので、暇つぶしにやる作業などは、とても労働と呼べるものでなく、それは道楽とか趣味と言うべきものです。手なぐさみか!

労働というのは、通常の商品流通社会で勝ち残ったものだけに赦るされる苛酷な残虐でしかありません。

マルクス氏はこの労働を抽象的労働と名づけました。

彼は資本論の中で、「そして個々の労働力は、ただこういう個人差が度外視された、社会的平均的労働力としてのみ価値をつくるのである。だから商品の価値をつくる労働は、その商品を生産するために個人的に必要な労働の分量ではなくて、社会的に必要な(社会が必要とする)労働の分量である。」(CP者の労働は社会が必要とする労働ではあるまい)

つまり個人差を度外視された、ということとは、CPだろうと健全者だろうと区別なく、商品生産流通の苛酷な経済戦争に耐え得たものであり、そののみが労働力と呼ばれるものだと言っているのです。

福祉施設の中で趣味的に(道楽として)行う作業などは、どこを押ししてもローダーなどという音は出ません。しかし、近代社会が生産第一主義・労働中心主義で成り立ち、それが大量生産・大量消費の市場を形成するために近代国家というものを維持し続けなければならないとき、青い芝の論理を認めらるなら、近代国家は崩壊してしまします。

労働は尊いのだ！と。この論理が正しく、たとえ働けない重度者にまで押しつけることは、近代国家が国家として成り立つ至上命令です。現実には寝た切りの重度者であっても働くことは尊い！従って「私は働けないから、お国の御厄介になって生きるしかない」という論理にまで貫徹しなければ、近代国家は成り立たないのです。これが、社会福祉と呼ばれるものなのです。ましてや「たとえ障害者であっても、働かないものは生きる資格がない」などと言う者がいるに及んでは、健全者の論理の恐ろしさ、それは近代国家というもの（それは生産と労働とが形成する市場）の恐ろしさです。

本来、近代国家という生産中心のシステムは、具体的労働（それは健全者の労働と障害者の労働との違いを、違いのままに見ること）を切り棄てることによって成立してゐるのです。

CP者が労働中心主義を正しいと思うことは、自ら立っている土台を一生懸命破壊してることなのです。自ら墓穴を掘るといふことです。

青い芝はまず個人差を大事にする、というより、それを前面に押し立てること、ひとりひとりの人間はかけがえの無い人格なのだということ、それだけの人間に違いがあり、能力に差があることこそ、人類の最も大事なことなのだと思ふことなのです。

しかしマルクスさんも、労働の二重性格とか二者斗争的性格とか呼んで、この矛盾に気づいてはいましたが、彼はこの問題を深く追求しないで、結論を急ぎました。彼が価値を作り出し得ないと言った具体的労働、つまりCP者の立場からすれば必死に働らいても、社会的・平均的には、能率が悪いとか、怠けることにしかならない様な労働、これをこそ大事にされる様な社会を作ることこそ、青い芝の使命です。

今日は、自我というものがマルクスの時代ほど確固としたものと思われていません。フロイドやユングの精神分析や、ストローク達の構造分析^{*2}などに代表される、社会科学の成果は、労働というものが、昔考えられていたものほど単純でないことが、日を追って分つてきました。つまり、平均的・標準的人格というもの、簡単に決められなくなつてきたのです。それを抽象的（社会的・平均的）労働と言うことで、単純に割り切ろうとするところに無理があります。

労働というものはキワめて複雑な意味内容を持っているものだという反省が、今日の我々の考え方になりつつあります。たとえば、若しある職場で一〇〇名の人間を募集したとして、そこに二〇〇名の応募があれば、当然一〇〇名の人は不採用になります。従つて採用された人は、不採用の一〇〇名の犠牲の上にその労働は成り立っています。「おれは誰の世話にもならない、おれは独力で働らいているのだ」などとよく言う人がいますが、健全者の発想の恐ろしさとおぞましさです。これを労働の私有化と言います。CPは不採用どころか、絶えず社会そのものから抹殺されようとして居ります。

現実の社会は競争社会であり、絶えず隣人を蹴落とすことで成り立っています。マルクス氏の言う、労働の二者斗争的性格ということは、このことを意味します。若し、このところを徹底的に考えずに計画経済化すれば、それは、CPにとつて差別の固定化・絶対化以外のなにもありません。

なんの反省もなく「労働は尊い！」などと思つて居るのなら、労働は罪悪以外のなにもありません。

我々は、いつも青写真を持ちません。どうすればこの矛盾が解決されるのか？は申しません。ただ矛盾があることを自己批判せずに、自分だけは正しい！と考えることに断固反対するのです。

『脳性マヒ者（CP）解放運動のめざすもの』解放理論研究会テキスト第四版（茨城青い芝の会、二〇〇一年）では、このあとに「横塚晃一 昭和53年7月20日死去・享年42才」とある」

*1 里内龍史他編『大いなる叫び——茨城青い芝の会の障害者解放運動』（発行者里内龍史、二〇二二年）では、この論考を大仏空の作品として再録しているが、その文体や内容から見ても横塚晃一のものであろう。

*2 あるいはレヴィ・ストロースのことを指しているのかもしれない。

解説(解放理論研究「会」テキスト)^{*1}(四一〜六二頁) 風乱軒主人「大仏空」

一

ある政党が、その理論機関誌『前衛』^{*2}で青い芝(CP≡脳性マヒ者団体)のことを「アナキスト」だと評価して呉れた。まさに彼らは異端審問権を持つてゐるらしい。焚刑になったり強制収容所に入れられないだけ感謝しなければなるまい。

青い芝が綱領で「愛と正義を否定する」と記しているのは、愛と正義に代表される社会通念の否定なのだ。人が二本足で歩く時、歩けない人のことを考えない。これが社会通念なのだ。手足が満足だけで感謝して働きなさいーなどと平気で口にする。この様な社会通念を否定し、現代文明に自己批判を要求しているのだ。

「愛と正義」を「理性と福祉」という言葉にかえて説明しよう。^{*3}

福祉または厚生という言葉はキワめて即物的・物質的なものだけということを描きたい。

我々日本人が常識的に考える「しあわせ」という言葉は案外抽象的・精神的(正確に云えば情緒的と云うべきか)なのに、ソシアルウエルフェア≡社会福祉という言葉は、具体的恩恵・物質的援助を意味するのだ。厚生とは寒い時に厚いものを着せて暖かくしてやることを意味する。

この福祉なる言葉を最初に確立したのがジェレミー・ベンサム(1748-1832)であることは今さら云うまでもないが、ベンサムが最大多数の最大福祉と云うときの福祉とは、彼自身快樂であると説明しているし、その快樂が「財産」だともしている。

この財産重視の思想は、その思想的系譜の先輩たるジョン・ロック(1632-1704)に由来する。

ロックは父がクロムウエルと共に闘った清教徒の子として生まれ、急進的イデオロギー過剰な武力独裁政治の中で育ったし、国王が処刑されたのも見て育った。

そもそもイングランドの革命思想はウイクリフ(1320-1384)が、オックスフォードの先輩、オッカムのウィリアムの理論を広めたことに大きな原因

がある。

ウィリアムはウイクリフより二十歳位年長で、マルクスが唯物論の先達とした人物。かのフランシスコ会に入ってスピリチュアル派だった。スピリチュアル派とは、その祖師フランチェスコ聖人の生きたままを實踐しようと云う人々で、一切の財産を持たず、金銭を手にはせず(しかたがない時は口でクワえた人々)、それが異端だとするローマ法王と対立して弾圧されていた。この理論にはローマ法王に上納金を納めなくてよいとするのがある。

これはイングランドの国王にはまことに都合がよかったので、国王はこの理論を鼓吹したウイクリフを保護した。やがてウイクリフの死後その教説は異端だとされたが、その理論によつて農民一揆が続発した。そしてヘンリー八世のローマ離反から百年、エンゲルスやマルクスの指摘にもある、トマス・ミュンツァーの流れで起きた共産主義的暴動の影響も受けて、国王が断頭台に上るまでになった。

その間に育った思想は、特権階級の否定であり、世襲制・財産相続の否定の方向だった。

その思想を代表した思想家がロックであり、ロックの思想のフランスでのプロパガンダーがモンテスキューでありヴォルテールだ。

二

ロックが財産を重視したのは世襲・相続の否定にあつたからで、そこで労働価値説を称えた。もつとも当時の労働とは、農業を除くと、あとは手工業しかないのだから、今日の規準はあてはまらない。

とも角、働かないで所得を得る人々に反対し、不労所得は泥棒だとさえ云っている。だからロックが財産を尊重したのは、労働による所得が守られなければならぬ! 決して搾取されてはならない! と云つたのだ。

彼の思想はヒュームの極端な唯物論(ヒュームの唯物論は急進的で、その結論は唯識論≡仏教哲学にすら近い)などを経て、ベンサムは福祉を称えるに至った。だから当然ベンサムの福祉≡快樂は所得であり、労働価値説の上に成り立っている。ロックが世襲権力や財産相続に反対したことは評価したい。しかし、それに代る労働価値説を称えた時、何故CPのことを考えな

ったか……。否、必ずしもCPだけでなく、働けない重度障害者などの弱者（と世間は云う）のことを考えなかつたのか？

価値は労働によって作り出される。従って働かない者は価値がない。ロックの時代にはCPなどが、まだ目に入らなかつたのかも知れないし、彼がいつい見落としたのかも知れないが、青い芝は赦さない。

ベンサムが福祉と云うとき、それは労働価値説に立っていることはすでに説明したが、従って「福祉」という言葉をそれだけ訊いていると、非常によいことのように聞こえるが、青い芝の目から見れば、キレイな美人も背後にまわって見ると糞尿が付いているようなものでしかない。福祉を受ける資格のない、つまり労働できない者のことは、スッポリと抜け落としている。だから青い芝は福祉という言葉を認めない！

ベンサムの福祉の概念はジョン・ステュアート・ミル以後、経済学に入つて、アダム・スミスそしてリカードの経済学的労働価値説となり、カール・マルクスに受けつがれたことは説明するまでもない。

共産主義問答で、プロレタリアートとは賃金労働者だ、と規定しているが、歩けない（働けない）者に対しては言及されてない。資本論のハジからハジまで探しても、寝たきりの重度障害者のことなどは一行も書かれていない。これは主として、労働価値説の創始者たるロックの責任ではあるのだが、CPのことを欠落させたところの理論は、CP解放の理論としては失格である。

三

社会が生産・労働・資源（資本）などで構成され、理論化され、CPなどが一言も口の外ハサむ余地のない構造でガッチリ固められ、すべてが終つてしまつて後、ふり返つて見たら忘れ物としてCPや弱者がいて、あわててお情けをかけて下さる。これが福祉なのだ。

昔軍隊、今労組などと云われる程の労働者のような立場ではなく、無視されてそれでも、社会は無事平安と錯覚されるような（CPの立場はゴミ捨場のように社会の矛盾が集積する。反論も無視されるから、拒否できないま、矛盾が重なって、社会全体のためには安全弁の役に立っている）この立場か

ら、解放の理論は生まれなくてはならない。弱い者の権利が無視されるといふことは、最低の人権が守られないということ、ベンサムはフランス革命の人権宣言を「形而上学的作文」と云つて軽蔑し切つた。つまり彼の最大多数の最大福祉とは、生存と平等（物質的な条件だけ）が必要なのであって、個人の自由とか信教の自由などという形而上的妄想は、まったくのナンセンスだつた。青い芝の基本理念は、ベンサムと逆に、平等を否定する。違つていてどこが悪いのだ。

ベンサムは自我というものを全然認めない。これはヒュームの理論の継承で、ヒュームが自我とは経験の束にしか過ぎない！と云つたのを、ベンサムは条件反射的なものにまで押し進め、後代の実験心理学につながる、完全に唯物論的な理解をしていた。従つて個人の自由などナンセンスだと云いつたのだ。

このような唯物論を基底にした理論は、ロック、ヒューム、ベンサム、マルクスと連なり、目的とするところは世襲権力の否定、財産相続の否定、つまり人間の人間による搾取を撃ち砕くところにある。しかしマルクスは、これだけでは駄目だと観た。そのためには計画経済が必要だと考えた。ただ世襲権力を唯物論で粉砕しただけでは、それは唯物論が単なる拝金主義になつて、資本家の搾取を助けることにしかならない現実を見て、経済の仕組が企業家の恣意によるのではなく、人間の理性つまり具体的には国家による計画で行なわれるべきだと思ふに至り、その国家を構成する理論としてヘーゲルの弁証法を持つて来た。

四

そもそも弁証法とは、ゾロアスター教（前七世紀ガンダーラのある一寒村で神の意志を告げる星が光る晩、ドータル（聖処女）という名の乙女が聖霊によつて宿つた人類の救い主を産み、その児はゾロアスターと呼ばれ、彼の教えた宗教）の教えで、この世は善と悪の闘いで、善なる階級がどのようにに虐げられていても、終局的に悪は滅び善は勝利することによつて宇宙は終る、というもので、善の勝利の後、新しい世界が千年間つづく、と千年毎に一単位になつていくことから、至福千年説としてキリスト教に受け継がれ、

十二世紀末にフィオレのヨアキムという学殖ある修道院長が、歴史を、律法の時代・福音の時代・聖霊の時代と三区分する歴史観を提唱。これがスピリチュアル派によって流布され、トマス・ミュンツァーの思想となり、ドイツ観念論に深く影響し、ヘーゲルも若い頃は心酔していた、ついに哲学として完成させるようになったものなのだ。

ヘーゲルは至福千年王国を善の階級によるのではなく、プロイセン国家(ドイツ民族)をもってそれに代え、マルクスは労働階級をもって来た。

弁証法が一つの歴史観であることは、その当否は別にして成立するかも知れない。哲学として観る時、それはヘーゲルが定式化した三つの定是を持つ。つまり、定是・反定是・綜定是であり、綜定是(ジンテーゼ)によって結論が出ることになる。

ゾロアスター教では、善と悪の階級闘争、言葉を代えれば、「定是」(テーゼ)と「反定是」(アンチテーゼ)の闘いは何回もくり返されるが、キリスト教になると一回だけになってくり返さなくなった。つまりイエス Kristus だけだけを唯一のメシア(アラム語・ソグディア語で尺度・測るの意、規準・契約・友情も意味する。ヘブライ語に入って油を注ぐの意となり、王者・救世主とも理解できる。本来度量衡や暦の規準をつくるのは、権力者・王者だから同じことである。ちなみに余談だが五行干支の起源は、アレキサンドロス紀元に由来するという説は有力なのだ)としたから、その救済はイエスだけによる唯一絶対なものだとされた。

仏教などでは、各自一人一人が勝手に悟る(信じる)のだから、その点まことにダラシがない。そこで仏教は歴史観がないとか組織論がないとか批難される。仏誕会すらハッキリしない。

ヘーゲルの弁証法では、まさにキリスト教の伝統に忠実に、定是と反定是の闘争のあとはキチンと結着をつけて総合・止揚して結論を出す。ヘーゲルは、定是は神聖ローマ帝国、反定是は革命・ナポレオン、そして、綜定是はプロイセン国家と考えた。

マルクスは地主(封建主義)、資本家(資本主義)、労働者(社会主義)と見た。マルクスは社会主義に至福千年を見た。

ヘーゲルの死後百年、彼の理論はヒットラーを産んだ。それは、ヘーゲル弁証法が一つの結論を出して絶対化する！ というところから来る。

キリスト教では教会を絶対化し、ヘーゲルはドイツ民族を絶対化し、マルクスは労働者を絶対化した。労働者、または労働が価値の源泉だとする考えを思想として確立したのはロックに始まるが、それは世襲権力や財産相続の否定から来て居り、搾取と不労所得の否定だった。それは正しいと思うが、残念ながら働けない者の立場が、無自覚にスッポリ抜け落ちて居る。そしてヘーゲルの弁証法はそれを固定化し絶対化してしまった。

五

価値観の絶対化をひき起す、ヘーゲルの弁証法を毛沢東はつかわない。ヘーゲルのそれが定・反・綜と進むのに、彼のそれは定・反・把と進む。「把」とは把握・確把であり、選択的实践・闘争的实践である。中とも云う。

「諸矛盾の中で一つだけが主要矛盾であり、それによって他の矛盾は規定され、従属する」は矛盾論。つまり選択であり総合ではない。従って結論ではない。毛沢東に結論はない。中国の解放も彼にとっては結論ではなく、新しい出発でしかなかった。

結論(綜定是)も二分を二に分けて二と為して、分析的・批判的・相対的に観る。要するに固定化しない。固定化・絶対化しないというより、欧米的な意味での絶対化ではないと、云うべきなのだ。毛沢東の思想の中には、体質的に欧米のものとは違うものがある。

その中心は自我に対する態度である。欧米文化と東洋文化の違いの中で、自我(主体・主観)に対する理解の差は、最も基本的なものだろう。

我々が世界を認識するとき、自我を規準点(座標軸)として世界を画かく訳だが、この規準点(自我)がどれだけ客観性を持ち得るか?これが画がかれる世界像の当否を決める。規準点が正しくなければ、画がかれる世界は狂ってしまふ。規準点(自我)に客観性を求めて、厳密に自己規定(自己批判)をして行くと、行けば行くほど逆に、世界像が明確でないと規準点が定まら

ないという反転が起きる。つまり主客の転倒だ。言葉をかえると、他を識るためには自らが明確でなければならぬ。と厳密に自らを規定して行くと、他をよく識らなければ自らは明確にならないと分かる。これを相即性と云い「中」と表現するが、中心点ではなく自他両方に通じてる！ の意味である。我々は生まれて、もの心がついてから、手足目耳などの感覚を通して自己を確認し、自我という観念を形成して来たが、ここでその常識的自我を根こそぎ棄てて、徹底的な自我の再検討が要求され、批判的・相即的自我が自覚されなければならない。

右のような自我の観念の上に成り立つ弁証法は、当然欧米のそれとはまるきり様相が違う。この弁証法を確立したのは智顛だが、中国の歴史と共に古い。あの海のような長江（揚子江）、万丈の風塵を吹上げる黄土、それら中国の大地そのものの思想化だろう。

毛沢東の思想は、ローマ字からの反訳ではない。スマートとかハイカラというものではない。都会のサラリーマン労働者の理論ではなく、コヤシの匂いの滲み込んだ農民のそれである。そこに絶対的な悪などはない。悪は善の別名であるかも知れぬ。悪は容易に善となる。敵は条件次第で味方となる。蒋介石は敵だったが抗日戦中は味方であり、戦後また敵となったと説明する。矛盾は内在するもので、それが外部の条件によってひき出される。しばしばその外部の条件が矛盾だと錯覚されるが、それは誤りで、あくまでも矛盾は内在する。

あるところで「矛盾は内在する」と云ったら、若い男に「カンネンロンだ」とやられた。あるいはそうかも知れない。欧米流の哲学から見れば観念論になるかも知れない。毛沢東はさらに、部分は全体であり全体は部分に集約されることも云っている。私は宇宙であり、宇宙は私だとまで云っている。個の中にこそ普遍を見る。

これらの言葉は、欧米流に見ると、ネオ・プラトン主義ということになるだろうと思うのだが……。彼の場合、座標になる主体そのものが相即性なのだから一緒にならない。これはまさに智顛の論理なのである。カント的主観主義、ヒュームの客観主義の対立などは智顛の目から見れば幼児の喧嘩ではない。

毛沢東は特殊性の重視を強調する。普遍性は必ず特殊性として存在する。特殊を無視した普遍はあり得ないと云う。特殊を無視した教条主義、規格主義を口をキワめて排撃する。規格主義だったらCPなどは問題にならないのだから、これは大事な提議である。これらの理論の底流をなすものは、自我の非固定化・非絶対化、つまり絶えざる自己批判なのである。自己も一分為二としてつねに告発する。

毛沢東の生涯を一言で云えば「造反有理」へ反逆はそれなりの正しい理由があるの一語につきる。ついには自分自身にも反逆して一所不定。安住しては不可ない。

六

無自覚なうちは、自覚を促す反定是を出すことで是正できるが、それが綜定是であり絶対だというのでは助からない。批判を赦さない体制は恐ろしい。

政治や経済を計画的に行うことは必然的に思想の統制を必要とする。個人と国家が双方権利を主張して妥協がつかなければ、もはや権力は弾圧という形になって、個人の権利も思想の自由もヘッタクレになってしまう。まして無視しても社会的にはなんの損失もないとされる存在などは、なんのクソである。我が国の社会主義者と称する（本当はそんな者は主義者でもなんでもないが、少なくとも本人はそう思いこんでいる）者が、しばしば国家の責任！を云う時、自分自身の、そして大衆の創造力を信じないか、想像したことがないところから出ている。

それは運命と生活を国家にやってもらうつもりであり、この考えはまた、国家が個人の生活や運命を左右できるということだ。そうではなく、それぞれがそれぞれの権利を闘いとして、それらが総合化されて国家という調整機関が出来上がる。これを毛沢東は連合自治と云った。もつとも、権力確立が先になる必要があればそれでもよいが、それからそれぞれの闘いが必要なのであって、権力奪取・即・人民の楽園などというものではない。まして福祉（これはベンサムやマルクスのそれではなく、我々が考える福祉）というも

のは、国家などに原則として関与させてはならないものなのだ。どの様にミジメでも、自らの手で創り上げて行かねばならない。

本来計画経済をマルクスが考えたのは、不当な搾取の排除にあった筈だが、現実には後進国が政治・経済を中央集権的に統制・計画的に行い、急速に先進国に追いつき追い越そうと云うためのイデオロギーとして利用されている。それは疎外の強化にしかならない。

その場合、そのトップにいる独裁者の国際的発言力・歴史での名声など個人的野心がチラつく。そしてその時、必ず福祉が顔を出す。独裁者は例外なく、笑顔で子供達と一緒に写真を撮りたがる。老人の手を引きながら、車イスを押したがる。それは人気とりなどではなく、治安対策なのだ。つまりお気の毒な人を民衆の前にサラして「ああ気の毒な人がいるなあ」と優越感を与え不満を解消させる。

これが社会福祉と呼ばれるものなのだ。

七

幸福とは、優越感の別名だとしなければならぬ。人がシアワセを感じるのには、他の人よりすぐれている・より良いと感じることではない。だからシアワセになるのは簡単で他の人の不幸を見つけ出せばそれでよい。親が我が子を愛するというのは、隣りの子を憎む！ということではない。意識して憎んでいるのではなく、力学的必然である。

「正義」とは、反対者を不正だとすることによってのみ成立する。マジメに汗して働く労働者の給料が、働かないCPの年金と同じだったら、いやCPの年金の方が多かったら、その労働者は納得するだろうか。逆に云えば、障害者・弱者は絶対に労働者の下でなければならぬだろうか？労働者は絶対にエライのだろうか。労働はCPや弱者を排除することによって成立しているのだ。

労働については、また別のところで本格的に、それだけをテーマにして語られるべきだが、労働価値説が成立したあのイングラウンドの状況が、今日はたしてあてはまるのだろうか？

ロックからリカードそしてマルクスに至る労働価値説は、キリスト教文化

つまり欧米的自我を背景として成立し、一人一人の労働がそれぞれに価値の単位として、評価され計算される社会での論理である。しかし我が国などでは価値がお互いにもたれ合って、自他、主客の価値の区分が明確でない。それなのに労働というものが、自分だけの能力で成り立っていると錯覚している。これを労働の私有化と云う（ここに日本の資本主義のインチキがあるのだ）。

我々はさらにキビしく自己批判して、どこに真実が築かれるべきかを見定めよう。残念ながら我が国での労働は、弱者を排除することで職場（労働の座）は確保されている。日本の場合、労働というよりポストであり身分なのだ。そして労働者は全然そのことに気付かず、自己批判を持たない。

八

我々は現代文明に対する告発を開始した。

社会通念というものが、我々の存在を欠落させることによって成立し、自己批判を本能的に忌避する。青い芝はこのことを告発する。ペンサムだろうがマルクスだろうがこの社会通念の範囲を出てはいない。我々の同胞の中にも、自分がCPであることを忘れようと、努力して生きている者がいることも事実だ。しかしそれは結局成り立たないだけでなく、CP者として人類史の中に生まれた大きな価値を自ら否定してののだ。

人類は大脳皮質を異常に大きくすることによって、人類たり得た。その結果CPを作った。大脳皮質の小さい、あるいは無い動物にはCPは存在しない。脳があるから脳性マヒは起る。人間以外にCPはないのだ、大脳皮質を大きくなし得た秘密は二本足で歩くことにある。サーカスで犬が後足だけで立って歩くのを見たことがあると思うが、非常に不安定な、不安と決断の中に緊張して歩く。乳幼児の発育を憶えばよい。人類は絶えず曲芸をやっているようなもので、この不安定と決断を四六時中やって来たことが大脳皮質を発達させた。そして手は自由になり、上を向いたので喉が楽になって、言葉が発達した。

その結果人類はお産を重くした。難産は人類以外には殆どない。これは二本足で立って生活することから来る。難産がなければCPの大半はない。つ

まり人類という生物は、非常に無理をして生きていて、生物としては異常な状況というか、アクロバットの様に生きているのだ。少なくとも大脳皮質はウスイ、ガラスで出来てるような存在なのだ。その無理が一部のところに、シワ寄せされた結果がCPなのだ。CPは皆の無理の分を背負って生きている。云うなれば人類の十字架を背負っちゃったんだよ。

人間が二本足で歩き言葉をしゃべって考え、手を使って働くことは、CPという犠牲の上に成り立っているのだ。しかも全然そのことに気付こうともしないというより、反射的に目をつむってしまう。見たくない、見られない。

九

ロックやマルクスの思想の流れの中で、弱い者を欠落させ顧みない発想のパターンを見た。勿論本人達は全然無自覚に善意の人なのだ。

この無自覚性は、人類が二本足で歩くことに由来する。二本足で歩くという事自体、すでに歩けない人を差別し、悲しませ踏みつけにしているのだ。勿論悪意でやっているのだとは云わない。背の高い者が低い者を見下す。これが悪いと云っているのではない！ 止めると云っているのではない。見下しているという自己告発を持って！ と要求しているのだ。二本足で歩いてはならないと云っているのではない。そのことが歩けない者に悲しみを与えているのだ！ と自覚すべきだと云っているのだ。

我々が現代社会で被害者であることも確かなのだが、同時に加害者であることも事実だ。

CPは加害者にならざるを得ないことよって、さらに被害者なのだ。肉親をはじめとして友人に迷惑をかけながら生きねばならぬ。悪人と云うなら云って呉れ。地獄は一定わが故郷。この世では悪人こそ人の生きる道だ。迷惑こそ相対的に生き甲斐をつくるのだ。

迷惑をかけてると云う自己告発が強ければ強いほど、それは社会を告発する力となり得る。社会を告発する我々が、自己を告発しないことは赦されない。「不確定性の自我」*4]

我々は一期一会に出発点(Point of Departure)に立っている。絶えず闘いはここから始まる。

風乱軒主人

*1 『解放理論研究会テキストNo.2』(解放理論研究会、一九七九年一月)と内容的にはほぼ同じだが、おそらく大仏自身の推敲により、若干、文言が変更されている。

*2 一九四六年に創刊された日本共産党の機関誌。

*3 この一文は、『解放理論研究会テキストNo.2』にしかなく、本文からは削除されているが、参考のために復元しておく。

*4 この文言は、『解放理論研究会テキストNo.2』にしかなく、本文からは削除されているが、参考のために復元しておく。

Ⅲみずから語る

13 インタビュー構成 おのれの地獄を見きわめよ——CP (脳性マヒ) 者と
ともに生きて (『月刊東風』No.43、一九七五年一〇月号、八―二九頁)

大仏空 聞き手・編集部「石川次郎」

大仏 空 (おさらぎ・あきら) 昭和五年東京に生まれる。戦後、社
会党茨城県連書記。カトリック修道院に入り、のちに社会福祉施設
職員。昭和三五年頃「青い芝の会」と関係。三九年同志と「マハラ
バ村」開設。四四年同志の一人を怪我させて懲役一年。閑居山願成
寺住職。

一「差別される者」の論理

——大仏さんが、障害者の問題にかかわるようになった経過から話して下
さい。

大仏 ぼくが「青い芝の会」とかわりをもつようになったのも、自然の流
れで、育った環境から、すでにそうだったわけです。多くの母方の父は木下
尚江なんかとつき合いがあつて、尚江のスポンサーで有名な新宿・中村屋の
相馬愛蔵^{*1}とか、海産物問屋をやっていた逸見斧吉^{*2}(山陽堂の創立者)さんな
んかがいました。そんな関係で、ぼくの父は逸見山陽堂へ勤めたわけだけ
ど、今でもおじさんが親子二代で勤めている。

ぼくのおやじがお寺の養子で、それが、お寺がいやでキリスト教の神学校
へ行って牧師さんになって、「救世軍」にはいり、山室軍平さんなんかの教
えを受けた。「救世軍」は組織的に谷中村へ入って応援していたから、小さ
い頃から谷中村の話聞いていた。それは、ぼくが最も嫌う「救済」かも知
れないけれど、時代背景が違うからね。そう言ってしまうと、田中正造だっ
て、そういうことになる。

それから、おやじは、戦争中、「治安維持法」で二度もぶちこまれるとい
う環境に育ったから、彼自身もマルクス主義者だと思つたことは一ぺんもな

かつたろうけど、終始一貫、おやじは、革命の先駆者であるレーニンなんか
を尊敬していたんじゃないかな。牧師さんだったのがつかまつて出てきたら
坊さんになっていた。そのところは、日本の仏教はだらしがなくて、籍は
そのまま残っていたわけよ。キリスト教なら、そのまま除名されちゃうんだ
ろうけど、籍が残っていたから、スンナリと戻っていったんだと思う。茨城
県の何カ所かのお寺の住職をしていて、石岡の常光院の住職をしている時
に、何かの縁でこの閑居山願成寺に入ってしまった。

——このお寺の歴史は。

大仏 この山のふもとに「くぐだら」という地名がある。五万分の一地図にも
のっていない一畝くらいの土地です。その「くぐだら」と、経津主命を祀って
いる香取神宮という明神様を結んで、ずっと行って四ツ角を越して、まっす
ぐ行った所に一つの鳥居があつて(今はないけど)、それをさらに延ばして
いくと舟付場に出る。そういう地理的条件を考えると、常陸の国司を何代に
もわたつてやっていた「百済王家」の屋敷跡じゃないかな、とぼくは思う。
その頃、石岡の国府はもつとこつちよりだったから、川を一つ越したむこう
に国府があつた。「百済王家」が氏寺として建てたんだと思う。その「百済
王家」とつながりのあつた藤原南家の出である徳一大師を呼んできた。筑波
の徳一とも、会津の徳一とも呼ばれた。徳一大師と呼ばれるけど、「義士」
は赤穂にとられ、「黄門」は水戸にとられ、「大師」は弘法にとられという言
葉があるんで、「大師」というと弘法大師のことになっている。弘法大師が
関東に来たなんてことはあり得ないんで、その「大師」というのは、ひよつ
としたら、徳一大師のことかも知れない。

この閑居山はそういういわれをもっているんですよ。『吾妻鏡』に志筑山
願成寺の名が出てくるんだから、昔は、相当に大きかつたでしょうね。おそ
らく南北朝の時、小田氏と運命をともにして燃え落ちて、それで一部が残つ
た。それがここの寺の話です。こんな所へ住みついて、反体制のような思想
傾向をもっていたからダメだ。

「原爆は正しかった」

——お父さんが「治安維持法」でひっかつたのは、昭和一〇年代ですね。

大仏 ぼくも、おやじがとつかまつたのは覚えているからね。

——どういう「嫌疑」で……

大仏 政府批判でしょう。とくに、ノモンハン事件の批判を、近くに特高がいるの知らないでやっていたこともあったらしい。今から思えば、いくらかソ連びいきだったのが、そういう発言になっててきたんじゃないのかね。実にくだらないと思うけど。

——茨城の特高ですか。

大仏 そうです。その前にも、おやじは、一回、品川署につかまつたこともあったな。

——お父さんのお名前は……

大仏 大仏晃雄、本名は宮本松男。養子にいつて大仏となった。ぼくのおじいさんは、肉食妻帯は全然しない人だったから、だから子どもも生まれなかった。おやじが檀家へ行って、イワシなんかごちそうになってくると、全然、魚っ気のない人だから小便の臭いでわかった。「また、喰らってきたな」なんて、おやじが言われているのは、ちよつと記憶にあるね。

——大仏さん、何年生まれですか。

大仏 昭和五年です。東京で生まれました。東京府荏原郡駒沢村大字上馬で、五年の午年生まれで、馬にはよほど縁がある。だから、ぼくは、人のことをよく乗せるんだね。乗せるといつても、身体障害者をよくおぶうということですよ。なぜ、こうおぶわなくちゃならないかと考えたら、午年だった。

おやじはそんな関係で安部磯雄先生とか、志賀義雄とかつき合いがあったんだね。

まあ、そういう環境だったから、反逆的な思想の系統に育つたんだろうね。戦後は、社会党に籍をおいて、オルグとして、あっちこちかけずりまわった。

——風見章^{※3}さんの頃ですか。

大仏 それよりも前の、菊地重作^{※4}さんとか細田綱吉^{※5}さんの頃です。

——農民運動をおやりになった。

大仏 そうです。

——どの辺ですか。

大仏 茨城の三区です。細田さんの関係で。死んじゃったけど、宮代さんとか、皆、一緒だったですよ。細田さんは、よくコソコソやつた人でした。それから沼田政次。ぼくは、おやじからの関係で、日労系^{※6}なんです。いわゆる「河上派」ですよ。今でも、社会党ではないけど、「河上派」だと思っている。人間関係があるわけです。浅沼稻次郎さんが日労系の代表者みたいになっていたら、彼に代表されるように、あつちの顔もたてればこつちの顔もたてる、今の綱領にもあると思うが。階級的大衆主義的発想がぼくの中にもあるんじゃないかな。一言で言えばロマンチストです。

だから、一番感激するのは、谷中村の時に、玉の井^{※7}の娼婦たちが、かんざしまで売って応援したということ、そんなのに涙する方なんです。理論的な正しさよりも、そつちの方で、情念的というか、エモーショナルというか、「河上派」は、どちらかといえば、そういう傾向があるんですよ。浅沼さんを見ればわかるんで、「なあなあ主義の浅沼」と言うくらいでね。

マルクス主義を基本に考えるところの「理論的」というのを、ぼくはナンセンスと思っているんだけど、なんとなく理論的に漠然と言うか、ひげ目みたいなものがあつて、それが構造改革論^{※8}によって整理されたみたいところがあるんですね。教条的マルクス主義を土台にして考えなければならぬというのはどういうことなのかと考えると、それから、正しいという価値を持つのか、なんかを考えていた。

そういうのが、直接、行動に出てきたのは、六〇年安保です。樺美智子さんが殺された時、ちようど、全日農^{※9}の中央委員として呼ばれていた。全日農の中央委員会を参議院会館でやって、そのままデモに参加するというので召集かけたわけです。本当は、中央委員会の議題なんてのはあまりたいしたことじゃなかった。いちおう、あることはあつたが、デモに動員するという方に重点があつたんでしょう。全国に動員がかけられた。あのワッショ、ワッショという騒ぎのなかで、どうも納得できないものがあつた。それは、まず「安保」というもの——あの時、一〇万ぐらいの人がいたろうが、「安保」というものをどう考えていたのか。自分の生活なり、運命なりにどうかかわっているのかというところが不十分なのに、とにかく集まつてのお祭り騒ぎ

という部分があるような気がしたわけですが、闘いというのは、そんなものかも知れないけれど、それで、人類の歴史は創られていくんだとも思うけど、それは納得するけれども、とらえ方が不十分でいいのかなと思つた。

ぼくは、昭和二十一年頃、学校に通うので、代々木に下宿したことがあるんです。その時のアパートの住人の半分くらいは共産党の書記たちで、そのアパートは「人民管理」になつてしまひ、大家が全然よりつけない。アップルト運営委員会、なんかできちゃつて、その時、本部の連中といろいろ話したんです。彼らの言うことでは、「アメリカの落とした原爆は絶対正しかつた」と言う。マッカーサーは「解放者」だと言う。「資本主義の矛盾から戦争がおきて、日本がそうなら、アメリカだつてそうなんじゃないか」と言つたら、「いや、あれは違うんだ」と答えた。どうして違うのかは、三〇年たつているので、あまり記憶にないけれど、とにかく、「日本の資本主義はまちがつていて、アメリカの資本主義は正しい。したがつて原爆も正しい。マッカーサーは解放者だ」という理論ですよ。今から思うと、共産党がそういうことを言つたなんて信じられないだろうけど、二一年の段階ではそうだった。「二・一ゼネスト」や「朝鮮動乱」からは変わつてきた。とくに、「二・一スト」では、決定的に変わったなと思うけど、昭和二十一年の段階ではそういうもんですよ。「広島・長崎の原爆は戦争を終わらせるためには正しかつた」と言う。確かに、あれで戦争は終わったんだらうけど、今、ソ連の原爆だけは正しいなんていうのは、全然、ナンセンスなんだな。

「差別する者」との闘い

そういうことが基礎にあつたからね。したがつて、六〇年安保の時にも心にひつかかつていた。ぼくは社会党の人間なわけで、六〇年安保の社会党は、江田「三郎」さんが組織局長、ヌマ「浅沼稲次郎」さんが委員長。その時、「河上派」からみれば、江田は「極左」だった。共産党とつき合つていたからです。共産党といつても、除名された「構造改革派」ですが、神奈川県知事の長洲一二、安東仁兵衛、佐藤昇などと今でも関係あるわけです。社会党で「右」「左」というのは、共産党にどれだけ近いのか、遠いかということなんです。あとは基準がない。今日の共産党は多極化してしまつて、「ブ

レジネフ的」共産党、「毛沢東的」共産党、「カストロ的」共産党などとなつてくると、どれを基準にしていにかわらないと思うけど、ぼくたちから言わせれば、今でも、江田さんなんかは「極左」ですよ。共産党に近い。ただし、この場合、共産党というのは代々木じゃないわね。「構造改革的」共産党だね。代々木・共産党からみれば、党内ではいちばん「右」になつちゃうけど。

そういうことがあるから、彼が組織局長として六〇年安保にどういふふうに取り組んでいったかについて、青年部の集まりで、だいたい彼はつるしあげられた。つるしあげられた時、ぼくたちは、「左」と「右」がケンカしているんだから、高見の見物、だという気持ちはあつたけれども、つるしあげられていくような状況を見て、つくづく思つただけけれども、六〇年安保を闘つた社会党は、共産党の理論に押しまくられている以外の何物でもない。押しまくられているというか、引きずられているというか、共産党の言うことが正しくて、そこから塩気を抜くと社会党になるということだろうな。

したがつて、六〇年安保に対する取り組み方も、「安保」を闘うことがいいのか悪いのかということよりも、とにかく共産党がやっているんだから、われわれも闘わなければならぬではないだろうかという姿勢で闘つたような気がするわけです。その共産党の姿勢も、最初は、ともかく、「アメリカは正しく、原爆は正しかつたんだ」という論理でしょう。

それが途中から変わつていった。なぜ変わつていったかと言うと、ぼくに言わせれば、戦後の共産党は国際情勢を分析する時に、資本主義対社会主義という図式からの分析だった。だから、社会主義陣営の味方をするものは、社会主義陣営のすることは何でもかんでも正しいとしなければならぬ。とにかく闘いなんだから、少しの誤差やロスをいぢいち気にしていたら、闘いに勝てないということだろうね。だから、「反ソ・反共のものはいつさい悪い」という論理です。したがつて、「安保」も悪い。「安保」がいいか悪いかわからないんだ。「反ソ」だから、「反共」だから悪いということですね。その論理は、今日でも代々木の中に尾をひいているんじゃないですか。たとえば、今度の原水禁の問題にしても、毛沢東の評価にしても、そういうことが全部出てくるんじゃないかな。

——最近は、「反ソ」じゃなくて、わが党に対する忠誠度がどの程度かによつて……

大仏 それはわかりますよ。基礎には、「反ソ」イコール「反代々木」と受けとる姿勢はありますよ。しかし、その下地は、国際状況を社会主義対資本主義と考えているということでしょう。そういう分析が、全面的にまちがっている、ぼくは思わない。今日だって、それは相当程度ありますよ。ありますけど、ぼくなんか言わせると、「差別する者」と「差別される者」の闘いだよな。終始一貫して、ぼくは、そういう考え方なんだよな。これはずーっとそうだ。だから、ソ連だって「差別する側」だという、そういう感覚はずっと持ってきた。だから、「安保」についても、六〇年安保に反対することが、絶対的に正しいことだとは思えなかった。

ぼくは、「青い芝の会」の連中なんかにもよく言うんですが、戦術は戦略からみて、全然逆のことやっていたっていいと思ってるわけです。逆のようでも、最終的に戦略になつていけば、敵をだますには、まず味方からという、ああいうことだつてあると思う。何か、やっていると云つていることがチグハグなような気がするけれど、そんなもんだと思うんだ。

六〇年安保の時だって、共産党が「安保条約」に反対したのは、「安保条約」が日本民族のためにならないものだという判断だけでやったものでないんです。「ソ連のためにならない、ソ連を中心とした社会主義陣営のためにならないものだ」という判断でやった。そういう判断は、今でも尾をひいているだろうと、ぼくは思ってます。共産主義・共産党が多極化してくると、それがぼやけてきてしまうが、それでも、その残滓が残っている、そういう感じだな。ぼくは、すでに六〇年安保の時、そういう感じをもつていたわけです。ぼくの本来の「差別する者」と「される者」の闘いという考え方からすれば、どつかそぐわないものがあつた。だから、「青い芝の会」でも、「差別される者」以外の何物でもないというのが運動の中心に据えられなければいけないという考えで、「青い芝」という素材にぶつかったのが六〇年安保の頃だ。その年あたりから、障害者の連中とつき合ひだした。もともと「青い芝の会」というのは、ぼくがつくつたんじゃない。

*1 (一八七〇—一九五四) 長野県出身の実業家、新宿中村屋の創業者。キリスト教信者。

*2 (一八七七一—一九四〇) 家業として、東京日本橋の缶詰販売業逸見山陽堂を継ぐ。キリスト教に入信し、平民社にも関与、田中正造を支援する。

*3 (一八八六一—一九六一) 茨城県出身の政治家。一九三〇年から一九四二年まで立憲民政党の衆議院議員を務める。戦後は旧茨城三区で、一九五五年から一九六一年まで社会党の衆議院議員を歴任。

*4 (一八九七一—一九八〇) 戦前は日本労働党の活動家。一九四七年の総選挙で旧茨城三区から社会党候補として出馬、当選。衆議院議員を二期務めた。

*5 (一九〇〇—一九五九) 弁護士。戦前は日本労働党等で農民運動、労働運動に関わる。戦後は日本社会党の結党に参画し、一九四六年(旧茨城全県区)、一九五五年(旧茨城三区)の総選挙で当選、社会党の衆議院議員を二期務めた。

*6 日労系とは、戦前の日本労働党の系統を指し、その出身者である浅沼稻次郎や河上丈太郎は、戦後結成された社会党では中間派ないしは右派の中心となる。

*7 戦前、東京市向島区寺島町(現墨田区東向島)近辺に所在した私娼街。

*8 一九五〇年代、共産党や社会党内で提唱された運動路線で、暴力革命によらず、長期的な展望のもとで社会構造の改革をめざしていくとする立場。

*9 一九五八年に結成された全日本農民組合連合会のこと。左派系の農民運動組織。
*10 すべての国の核実験禁止を求める部分的核実験禁止条約(一九六三年)の是非をめぐる、一九六五年、原水爆禁止日本協議会(一九五五年結成。原水協)から社会党系のグループが脱退して新たに原水爆禁止日本国民会議(原水禁)を立ち上げたことを指す。当時の原水協では共産党系のグループが中心となつて、ソ連や中国の核実験を容認する立場をとろうとしていた。

二「CPP解放区」II マハラバ村

——「青い芝」の会が始まったのは茨城ですか。

大仏 いやいや、東京です。今日では、だいたい、私たちの理論が「青い芝の会」の中心になつているから、何となく、「青い芝」の発祥地は茨城という誤解すら生じていると思うんだけど、本来は、東京の都立光明養護学校の同窓会から始まったものです。養護学校だから障害者が集まるんだが、そのなかで、どうしても脳性マヒ者は、同じ同窓生の中から疎外されていく。それで、脳性マヒだけの同窓会をつくらうとなつたのが始まりです。——いつ頃ですか。

大仏 六〇年安保か、その次の年くらいだろうな。^{*1}

——そうすると、大仏さんは、始まりと同時にくらいにかかわったんですね。

大仏 そうですね。ぼくが障害者ときき合いました時に、東京の「青い芝」の連中から、ぜひ茨城でも「青い芝」をつくってくれという話があった。その時、これはいけると思った。というのは、組織原則が極めて単純だということだ。「脳性マヒによる脳性マヒの組織」ということだ。組織原則は単純明快でなければいけないということです。しかも、全国的な階層をもつていて、全国的な組織になり得る。地方的な組織ではない。そのうえ、組織原則が単純で、社会に対し発言者たりうるものだと考えたから、ぜひつくらなければならぬと思った。そういうことを言ったら、そう簡単にはできないと言う。「じゃ、おれが手伝えばできるのか」と言ったら、できるといふ返事なので、手伝おうということ、それで、首をつっこんだんだ。その後、東京の本部が瓦解しちゃって、本部ではないけれど、茨城が発祥地みたいになった。今は二〇都道府県くらいに「青い芝」がありますが、まだ、全国にできたわけではありません。近いうちに、全国都道府県にできるでしょう。だから、最初は、CP(脳性マヒ)同士の「お茶のみ会」みたいなものだったんだが、私たちのグループが中心になってから、闘う組織になったわけですよ。

——始まった頃の組織原則のなかで、はつきり文章化されていたかどうかは別にして、その底には、「同情」や「差別」を拒否するというのが流れていましたか。

「青い芝の会」

——とすると、大仏さんの発想が、かなり強烈に投影したということですか。大仏 それは、ぼくの発想じゃなくて、ここ(横塚晃一著『母よ！殺すな』すずさわ書店)に書いてありますことを読みますと、

へこのような強烈な自己主張は今までの障害者運動にも生活態度にもみられなかったことである。このような運動のバックボーンをなすものに青い芝の行動綱領とも言うべき四原則がある。それを次に示そう。

『一 我らは自らがCP者であることを自覚する。』

我らは、現代社会にあつて「本来あつてはならない存在」とされつつある自らの位置を認識し、そこに一切の運動の原点をおかなければならないと信じ、且つ行動する。

一 我らは強烈な自己主張を行なう。

我らがCP者である事を自覚したとき、そこに起こるのは自らを守ろうとする意志である。我らは強烈な自己主張こそそれを成し得る唯一の路であると信じ、且つ行動する。

一 我らは愛と正義を否定する。

我らは愛と正義の持つエゴイズムを鋭く告発し、それを否定する事によって生じる人間凝視に伴う相互理解こそ真の福祉であると信じ、且つ行動する。

一 我らは問題解決の路を選ばない。

我らは安易に問題の解決を図ろうとすることがいかに危険な妥協への出発であるか、身をもって知ってきた。

我らは、次々と問題提起を行なうことのみ我らの行ない得る運動であると信じ、且つ行動する。』

この思想は突如として障害者運動の中に現われ、今やそれが運動の中核になろうとしているが、この考えは一体どこから出てきたのであろうか。

『善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにはく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この条、一旦そのいはれあるにたれども……』

これは鎌倉時代にかかれた歎異抄の一節である。歎異抄は浄土真宗の開祖である親鸞上人の教えを弟子が書き記したものであるが、その真髓は悪人正機、つまり「悪人こそまず救われるべきである」というのである。親鸞のいう悪人——うみかにはあみをひき、つりをして世をわたるものも、野やまにし、をかり、とりをとりていのちをつぐともがら——は自分が悪人だということを知っており、なおかつ悪業をしなければ生きていけない悲しみを知っている。それに対して善人は「善行」(心身の修業を行ない勉強にいそしみ他人に施しなどをする)のできる、いわば恵まれた人達なのである。親鸞は

当時修業勉強する機会に恵まれた人達だけが救われるとする旧宗派を捨て、庶民——その時代の底辺をなす人々——の中で生きた人といえよう。

現代において、人は無意識のうちに善い行ないをすれば善いことがあり、幸せになれると思いい、善い行ないとは究極のところよく働くことだと素直に信じこんでいる。「一生懸命働き、社会の役に立ち、金を残し、自分の家を建て、良い家庭を築く、このようなことが善人の手本であり幸せの見本とされているけれど、このようなことができない人達はどうかね。それは『不幸な人』すなわち悪とされる。しかし歎異抄の『悪人』という言葉を障害者という言葉に置き換えてごらん。」これはマハラバ村（サンスクリットで大きな叫びの意）のリーダーであった大仏空師おほぶつあからの言葉であり、私と大仏師、歎異抄との出会いでもあった。父から常々働くことは人間としての資格なのだとい聞かされ、現実の自分と比べ肩身の狭い思いをしながら、それに反駁する論理的拠り所を知らなかった私にとって、この言葉は衝撃であった。そもそもマハラバ村とは昭和三九年茨城県石岡市郊外、小高い山の中腹に建つ閑居山願成寺という古寺を中心に作られた脳性マヒ者の生活共同体であり、この寺の住職が大仏師であった。

「人は誰でも罪深いものである。知らず知らずのうちに人に迷惑をかけている。いや、迷惑をかけ罪を犯さなければ生きていけないのが人間である。それを償おうとすればまた一つ二つと悪いことをしてしまう。そんな罪深い自分に気がついた時に『助けてくれ』と叫ばなければならぬだろう。その叫びを親鸞は念仏といったのだ。そして念仏を叫ばなければならぬなくなった時、必ず阿弥陀様が救って下さるといふのだ。障害者は被差別者であり、すぐに被害者づらをするが、同時に自分が加害者でもあることには少しも気づこうとはしない。つまり、皆もつと自己を凝視し、そこから自己を主張する必要がある。そうでないと自分達を差別しているものが何であるかがわからずに過ぎてしまう。」

「障害者は被差別者であり……」からがポイントなんです。

「障害者は一般社会へ溶け込もうという気持ち強い。それは『健全者』への憧れということだが、君達が考える程この社会も、健全者といわれるものもそんなに素晴らしいものではない。それが証拠に現に障害者を差別し、弾

き出しているではないか。健全者の社会へ入ろうという姿勢をとればとる程、差別され弾き出されるのだ。だから今の社会を問い返し、変えていく為に敢えて今の社会に背を向けていこうではないか。」このような話を数年間に亘って大仏師より聞かされ、また、討論してきたのである。とはいっても有難い法話を聞き經典の勉強などに勤しんだというものではない。障害者特有の社会性のなさ、お互いのエゴのぶつけ合い、社会で差別され、こづき回されてきた故の人間不信と妙な甘え、家に閉じ込められていたが為の気のきかなさ、男女関係のもつれ等が渦巻き、それは壮烈なまでの人間ドラマであった。だからこそ歎異抄の世界を地で行ったといえよう。」

こういうことなんです。

だから、「差別」というものに対しても、そう単純でないといふかな、自分自身にも「差別」の原因がある。だけど自分自身が「差別」するだけで終わらないで、その「差別」を法律的に組織化し、社会化し文明とするところに問題があると、ぼくは考えているんです。だから、「差別」というものの原因は、そもそも、人間が「生きる」ということ自体にもついている。「生きる」ということが「差別」の原因だ。だから、ぼくは、「差別」は生きることの権利だと思っている。「差別」本来は、それが社会的に組織化されて、文明とされるところに問題がある。本来なら、文明は、人間のもっている矛盾を克服するためあるんでしよう。ところが、それをうまく利用して、差別的な構図の上のつかって、世の中が運営され、金儲けが行なわれているところに問題がある。人間がいくら努力しても、「差別」は本来的になくならないと思う。なくならないと思うが、それを克服するのが文明であると思うんだ。ところが、現実の文明は、「差別」を利用して、その上のつかったところにある。そういうふうにもっているわけです。だから、今日ある多くの論理、「安保」に対する論理もそうだけど、「差別」を助長させるための論理であるなら、全然ナンセンスであると思う。だから、「社会福祉」も、聞こえはいいけど、現実には「差別」を助長させているのではないか。「青い芝の会」はCP自身の会であって、決してぼくの私有物でも何でもありません。ただ、ぼくは、それにサジェスションを行なっただけです。「青い芝の会」は「CPによるCPのためのCPの組織」が原則だからね。山形県の「青い芝

の会」の会則の原案を書いてくれというので書いたけど(資料I参照)、「山形青い芝の会」には会長とか名誉顧問とかを置くことはできる。しかし、本会の最終決定はCP者自身によらなければならぬと一行書き加えた。だから、「健全者」とか、CP以外の障害者が顔を出すようなことがあっても、最後の決定はCPだけの役員会でやらなければいけないということ、これは厳密に行なわれていくんです。だから、ぼくなんかも、「青い芝」のいろんな会合に出ていくと、「お客さん」というか、大事なことになる。「部屋から出ていって下さい」と言われるくらいのものです。いたって厳しいんです。

「マハラバ村」の共同体

——茨城で積極的に始められた頃の話をお願いします。

大仏 横田君という、うちの会計をやっていた、今は神奈川の会長をやっています。彼が、『転草』という本を出しているんです。それに、「マハラバ村」の歴史が多少書いてあると思うけど、そもそも始まりは、今、神奈川県副会長をやっている小山正義が、「おれがそもそも火つけ役だ」なんて言っているが、発想としては、「障害者の解放区」ということです。それについて、TBSの来栖琴子さんというレポーターが「CPの解放区」「CPの千早城」と称して、書いてくれています。ぼくの考えでは、それは、今も会の中に立派に生きていると思うんだけど、一つには「現代文明になじまない」という考え方があって、現代文明そのものがまちがっている文明だと思っているわけだから、それになじんじやたら意味がないんで、だから厚生大臣賞をもらう障害者とか、障害者を使っている企業とかは、ぼくたちには言わせると、全然下らないわけだ。

——NHKの「明るい農村」に出てくる農民みたいなものですね。

大仏 それはそれで立派だから反対はしないけれども、それが現代文明を一所懸命支えちゃっているわけよ。支えちゃって「差別」を固定化するくらいなら、むしろ破廉恥の方がはるかにいいという考え方だ。うちの会の中にも、障害者なんだけど、「健全者」に混じってけなげにも生きていくというのが抜け切らないし、できればCPでなく「健全者」に生まれたかったとか

いうのは、思うなと言っても思う方があたり前で、全然歩けない奴に、「お前、歩けない方がいいんだ」なんて言ったら殴られちゃうくらいで、そりゃ歩きたいと思うだろうし、できれば「健全者」に生まれたかったと思うだろうし、したがって、思うなって言ったって「健全者文化」のなかに混じりたいと思いますよ。いかに現代文明を拒否していくかが、「CPの共同体」をつくった発想にあるわけです。

いろんなことがあった。そのなかには男女間のもつれもあったし、障害者が働くとはどういうことかという議論もさんざんしたわけです。結局、労働とは現代文明の中にあるものであって、われわれが働いて、いくらかでも稼ぐとはどうなんだということ。手の動かない奴がいて、全然手の動かないのと、自由に動く奴が働いたら、もらう金は違うんじゃないかとか。テメエが働いたんだから、その金はテメエのものにするのはあたり前じゃないかとか。じゃ、働けない奴はどうするんだとか、いろんなことを議論し、殴り合いまでやった。

——いつ頃から「村」づくりを始めたんですか。

大仏 村の名前は、後からついちゃったんで、本当は名前をつける気がなかった。ぼくは、最後まで、名前をつけたくなかったわけです。どうしてもつけたかったら、千代田村上志筑四六三でいいじゃないかと言った。そのうちに、「閑居山コロニー」なんて名の奴が出てきちゃって、それじゃ仕方ないから、統一しようということで「マハラバ」村という名前をつけるハメになったんですよ。

始まったのは三九年頃で、その時は三人だった。最初はこの部屋で共同生活を始めた。だから、ぼくの『私生活』は全然なかったわけです。それから、「それぞれ一戸建てのものにして、村にしていかなけりゃいけないんだ」ということになり、上下水道完備、押入れ・便所・台所付きのスタイルがいいとか、そのなかから出てきたわけです。ぼくの考えの中には、最初、そういうものはなかった。ここで長くくらすのは不便だから、外へ移すことは考えていた。そういう、やっていく過程から、そんな話になっていった。そういうことを提案した奴が一番最初に抜けちゃったり、反対していた奴が最後まで残っていたりして、これが面白いんだな。

開きなおって主張

——三人での「共同生活」というのは、具体的に……

大仏 ただ生きていくだけです。生きていけると言っても、「青い芝の会」はすでにやっているし、施設から来たのは一人だけで、そいつが「裏切者」第一号だけど、その三人は早い段階で消えちゃったかな。

——「重度」の方ですか。

大仏 今、うちの会で「障害者等級」の改定について厚生省に意見を出しているんだけど、それは、「脳性マヒにはこういう特徴があるから、改定に際しては考慮してくれ」というものなのだが、うちの会の正式決定ではないが、「等級全廃論」が出ている。「脳性マヒの手帳だけいい。一級、二級は必要ない」という意見があつて、これをうちの方でまとめ、本部に出して、全国的にこの意見にまとめ、厚生省に申入れたらいいんじゃないかと思つている。脳性マヒは「重度」とか、「軽度」とか言えないわけです。

ちよつと「軽度」のようにみえても、脳がやられているから、歩けそうでも何かひよろひよろして歩いて歩けない。手も使えないかというと思えるんだが本当には使えないとか、ことばも聞いていればわからないこともないけど、やつぱりしゃべっているうちにはいらなとか、目の障害は少ないんだけど、目に出てくる人もいるし、知能に出てくる人もいる。知能に出てこないとしても、やつぱり欠陥があるんですよ。

これはぼくの知っている埼玉県のあるエライ人で、全然歩けない。キリスト教の牧師さんをやっている学者で、翻訳もやるし、本も出している。この人が車を買ったというので、熊谷や深谷などをグルグルまわった。その時、四ツ角に入つて、どっちへ曲がつていいのかわからない。キリスト教会はとんがった屋根に十字架があつて、遠くからみてもわかるはずだったのに、わかんないんです。おそらく、その人は家の前まで連れて行つてもわからないんじゃないかな。その人にとって、「家」とは畳であり、天井であり、床の間であるわけです。ぼくたちが遠くから帰つてきて「家」というのは、子どもの声が聞こえるとか、灯りがついたとかいう感じでしょう。だから、外からみたことないというんです。自分の家の目の前に連れていつてもわからないんだな。

わかんとかわかんないとかいうのはどういふことかというのと、その人のところへ、ある出版社の人が原稿を取りにきて、「深谷の駅に着いたんですが、先生のお宅へはどう行つたらいいんでしょうか」という電話が入った。「あ、講談社の方ですか、講談社は小石川の音羽にあります」「いや、深谷まで来ているんです」「深谷ですか、深谷は上野から高崎線にのつてくるといふんです」とかやっている。つまり、方向とか距離感覚が全然ない。それでぼくが、駅まで行つて乗せてきたんです。自分で歩いたことがないでしょう。たとえば、ぼくたちだと、一キなら歩けるが、二キはしんどいとか、一〇〇歩走れば、汗が出たり、息が荒くなることは理屈でなく知つているが、彼は、それを知らない。それから、ぼくたちが知つている東西南北も、そういうことなんです。自分の行動・労働の集積を通して世界をとらえているんですよ。だから、歩いたことのない人間には、やはり、方向とか距離は出てこないわけです。決してバカな人ではないんですが、こと方向とか距離に関してはまったくバカみたいなんです。

ぼくたちが生きているのは人間的感觉が基礎でしょう。人間環境をつくるころなども、生まれてこの方訓練して育ててきたわけです。こういうものは、最初からあつたわけではないんですよ。わかるかわからないかというのはそういうことなんです。だから、家の中へ閉じ込められつきりで育つた人間にとって、知能とはいつたい何なのかということですよ。頭が悪いとは言えないけど、どこか欠けているところが出てくるのは当然でしょうね。うちの会の原則は、そのへんでこなまま開き直つて主張していこうじゃないかということなんです。「合理的な、誰が聞いても納得するようなことは注意しなくてけつこうだ。へんちくりんなのでけつこうだ」というのが会の立場なんです。「疎外された」というよりも、スポイルされているわけですからね。では、なぜ、スポイルされなければならなかったかを考えると、やつぱり、今の世の中が労働中心・生産中心で、労働ができないものは人間でない。そういう文明のなかで、親だつて、自分自身だつて、そう考えちゃう。親や社会がそう考えたと同じように、自分自身もそう考えちゃう。それが社会との軋轢をよりいっそう大きくしているわけだ。「思いきつて、へんでこなことを晒して生きていこうじゃないか」というのが会の中にある。

*1 実際には一九五七年一月。

*2 ここでの引用は、横塚晃一『母よ！殺すな』初版(すずさわ書店、一九七五年)による。復刊された生活書院版とは、表記に若干の相違がある。

三 権力の介入と「解体」

——幾軒か家を建ててからは、多少、仕事のできる人はやったんですか。

大仏 ぼくの友人で籐椅子屋がいて、そこから仕事をまわしてもらってやったこともある。

——人数にしていちばん多かったときは何人くらいですか。

大仏 夫婦者で五組ですよ。可能性があったのもいれば、あと一、二組ありましたけれども。子どもも三人生まれました。

——県内の人たちですか。

大仏 いや、県内はほとんどいない。一番遠いのは北海道か、福岡県もいたな。

——CP者の夫婦で日常処理しきれない問題は、どのようにカバーしていったんですか。

大仏 ぼくはそこにいましたけれども、あくまでも、「CP者自身の共同体」ということだから、ぼくは「相談役」ということで、理論的なことはちょっと言ったりするけれども、彼ら自身の自治体というのが目標だった。それは、「マハラバ村」の失敗の歴史なんだけれども。今話した埼玉県のエライ、CPの人のことから想像して欲しいんだけど、障害者、とくにCPは自分の力で生きた経験が少ないわけです。自分の力だけで自分の生活をつくってきたCP者は、ほとんどいないくらいですよ。いたとしても、誰かサポーターがいる。完全に自分だけといっても、それは世間が甘やかしている。松葉杖ついてバスに乗っても、まわりのお客さんが甘やかしてしまう。松葉杖ついている人間がいるから、わざと坐っちゃう人間はいなくて、まずは、ゆずっちゃう。世間も、親もそうだし、したがって自分自身もそうだといいことになるでしょう。そうすると、自分たち自身で生きていくということが下手なわけです。自分が人のために役に立つというのが下手なわけです。

ぼくの希望としては、「CP者自身の共同体」ということだったけど、やっぱり、ぼくに頼っちゃうわけです。ぼくに頼れば、ぼくは「独裁者」になっちゃう。そういう矛盾をなくそうとしても、にっちもさっちもいなくなってきたというあたりに、これはもうやめた方がいいんじゃないかとなってきた。やめるにしてもスパッと一度にやめたのではなく、現在でも、二、三人はいるわけです。

まあ、人間は、自分一人で純粹に生きていくなんて奴は一人もいない。皆、多かれ少なかれ、よりかかって生きていると思うけれども、それが、よりかかってよりかかれて、いわゆる「助けて助けられて」という「弁証法」的なことで世の中成り立っているんですが、その弁証法がうまくないわけです。だから、この会では「CP自らによる」というのをことさらにうたい文句にしたいと思うんだ。

——村で、何組かの人が生活する。生活するのに必要なものを獲得するためには、きれいごとだけではいかなかったんじゃないかと思いますが……大仏 経済的な問題ですか。ぼくはそういう心配は全然しない人間だからね。心配したってできるわけないけれども、とにかく、やってゆくんだけということ。現実には、皆、生活保護を受けて。生活保護というのは、ご存じのように生きていけるような金額じゃないけれど、皆でプールすれば、生命を維持することだけはできる。それは、一人ひとりよりも、プールした方がはるかに効率がいい。福祉事務所はそれを嫌うわけで、対福祉事務所工作をやりながら。結局、官僚機構というのはすべての害の根本じゃないかと思っただけど、無自覚に生きている代表だね。よく、遅刻しないで、働かないで、休まないでというけれど。

——お産はどんなふうになつた。

大仏 石岡の産院でやりました。石岡の親見さんは、全国でも珍しく、脳性マヒの赤ん坊を取り上げた例が多いでしょう。実際、生んだのは三人ですが、そのほか、四、五人はみていますから。あの人は非常に腕のいい人です。ここで生まれたのは、皆、帝王切開ですね。そういうことでは、うちの家に非常に負担をかけたわけです。終始一貫して、頭が上がらないですよ。生まれるでしょう。その後は、ぼくは自然主義者だから、母乳でなければ

いけないという考え方があるのだけれども、粉ミルクで、一般の人は育てているのに、CPであるが故に、それができないとなってくるわけです。ぼくは、「健全者」であろうが、CPであろうが、そんなことは抜きに考えるんだけれども。母乳でなければいけないと考えると、その辺にユガミができてくる。

これが、横田君という人がつけていた「会計簿」です。字が書けないのに会計をやるといふから、「大丈夫かい」と言ったら、「ちゃんと帳面つけられる」というから、何か手段があるのかなと思っただけ、あにはからんや、何書いたかわからんような字で書いてある。その会計係だった横田君が、ドキユメンタリーを書き、ぼくが「序文」(資料Ⅱ参照)を書いた。彼が、いつだったかテレビに出た時、「我ながらひどい字で書いたな」と言っていた。で、会計係がいて、それにみんなプールしたわけです。

——建物。

大仏 石岡にモリコー・ストアというデパートがある。そこのおやじを、ぼくは、本当のおやじが死んでから、代理者みたいに考えている人なんだが、その人が、ぼくの借金の後始末をしてくれたんです。今の金にして二〇〇万円くらいになるでしょうが、黙って払ってくれた。それも、ぼくが頼みに行っただけじゃない、カミさんが行ったんだ。業者が、「払えない時はどうしてくれる」なんて言うから、「払えないものは払えないんだ。どうにでもしてくれ」と言ったら、カミさんがモリコーへでかけて行って、そこのおやじが、「しよのない奴だな」なんて言いながら払ってくれたんです。モリコーのおやじは、だいぶ傑作な人物だね。何せ口が悪いから、でも、義侠心に富んだ人ですよ。だから、支持者も片寄っている。

ある「傷害事件」

——その後、事件」といふのか、マスコミが派手にさわいだことがありましたね。それは、警察とブルジョア・ジャーナリズムの大合唱で、スキャンダラスなものに仕立上げられてしまったという感じがするんですが。……大仏 あれは殴ったケガをしたというだけのことですよ。しかし、あれがふくんでいる内容は、決定的に大事なことなんじゃないかと思う。ぼくがケ

がさせた奴の赤ん坊を、ぼくがねかしつけたということが直接の原因だった。彼に言わせれば、自分の子どもは自分で寝かせるというか、自分の権限内にあるもんでしょ。ぼくは、その頃、八時一五分から「竜馬がゆく」というテレビドラマがあったので、うるさくないように赤ん坊を寝かしてしまっただけで、みようと申したんです。ぼくは、赤ん坊を寝かしているのは得意だった。その下には、権力の問題があるわけです。ぼくが寝かしつけると、「和尚の権力だけが強くなる」と言われるわけです。

今でも、それは尾をひいていると言いか、ぼくは、尾をひかせているわけだけれども、なぜかと言うと、子どもたちは二年生くらいになっていて、だんだん大人になっていくでしょう。そうすると、「ざまみろ、ガキメらを皆おれの子分にして、親に反逆させてやるから」とむりやり尾をひかせているし、今後、何年間でも尾をひかせてやろうと思っただけ。「これは、おれの孫だ。テメエらのガキじゃねえ」というのがぼくの考え方だからね。

——あれには、警察が介入したんですか。

大仏 そうですね。救急車が来たので、当然のことですが、それは警察に報告をしなければならぬ。それよりも、新聞屋が関係してますよ。新聞屋が関係するのは、この辺の民生委員などに吹きこまれてというのがありますね。この辺の民生委員なんて、ぼくは相手にしない。福祉事務所へ行くには、彼らを通してということになっただけです。

——つまり、体制側の心配り充分な網を破った悪い奴ということ。

大仏 そういうことでしょうか。役所の考え方では、それよりも、地元の民生委員というのは、村長体制を維持する一機構でしかないし、本当に福祉に関心があるというのではなく、アレを民生委員にしておけば、次の選挙のためになるとか、この前の選挙で骨折ってくれたから、教育委員にしようというふうなものでしょう。まあ、早くいえば、名士ですよ。そういうのが全然相手にされない、無理からぬことと思うけれど、民生委員としては面白くないんじゃないの。ぼくが、福祉事務所、あるいはそれを通りこして県を相手にする態度をとってきたことがあいうことになったんでしょう。それが新聞記者にあって、警察が動いたのは、実際には、記者に動かされたんだとは思わなくて、ぼくは、申し訳ないけど『朝日』志向で、ぼくのネタは『朝

日』にしかやらなかった。それがいちばんの原因でしよう。ぼくにいちばん反感をもっていたのは、早い話が記者としての渡り職人ですよ。

——「治安維持」の処理としては調書でもとられて。

大仏 いやいや、拘置所に二カ月くらい入れられて、この際いつきよにつぶそうという考えでしたね。

——「罪名」は……

大仏 「重傷害、懲役一年」ということ。一年半くらいの求刑があつて、一年の判決。東京高裁までもつていって執行猶予となった。

——そんなに大がかりだったんですか。

大仏 そう、ぼくの弁護をしてくれた宮代さん、彼は同志だから言っても仕方ないけど、彼には一六万円もとられた。それはともかく、明らかにぼくを二カ月間拘置所の中へ入れておいて解体させようという考えだったですね。やつぱり、そういう動きにはなりましたね。

——その「事件」に対して、ここにいた人たちの受けとめ方はどういふものだったんですか。

大仏 これは整肢療護園同窓会の機関誌なんです、ここに当時の受けとめ方の最大公約数が出ています（資料Ⅲ参照）。

——高裁段階で、いちおうケリがついたのですか。

大仏 裁判になったら早いですよ。だから、ぼくを懲罰にするのが問題ではなくてね。

——大仏さんは自分の思想みたいなのを、裁判で出されたんですか。

大仏 ぼくは、福祉に関して検事が出したことに対し、終始一貫、おれのとがわかるかという態度だった。

——「青い芝」の論理を法廷でどうしようという考え方は。

大仏 それは全然なかったですね。

——判決に対しては、「量刑不当」ということで押していったんですか。

大仏 裁判のなかでそういうことも言ったけど、後始末をするために高裁までもつていったんです。だから、ぼくは、「権力」というか、法律・裁判の必要性を認めているんですよ。どういうふうにも認めているかという「必要悪」として。ぼくは、全然、そんなのに従う気はないが、やる奴はやるだろ

う。向うは権力をもつて押しつけてくるだろうから、従う気はなくても、結局は従わされるだろう、と。最初から、従う気はない。裁判の結果については、従う気はさらさない。何かにつけてそう考えているんですが、「権力」についても、「必要悪」として、認める気はないけど存在するだろうと思つている。関係ないと言つても、いやでも関係させられちゃうんだから。このへんのところは、ぼくの思想のあいまいなところなんです。

——「善意の理解者」として大仏さんの周囲にいた人たちが、その事件で動揺はしましたか。

大仏 ほとんどなかったですね。一人くらいはいましたが、今から考えるとその人も「理解者」じゃなかったということでしょう。ただ「理解者」のよくな顔をしていないとまずいから、そういう顔をしていただけなんです。う。ぼくの間関係の考え方は、昔、『聖処女』というカトリック映画のタイトルに、「信じる者には説明の必要がない。信じない者には説明しても無駄である」とあつた。だから、人間関係でも、いくら説明しても、信じない奴にはわからないし、わかる奴は説明しなくてもわかるわけだよ。わかっているように言っていたんだけど、あとにして思えば、あの人もわかっていなかったんでしょう。

その時の関係者は、そっくり、今の「青い芝」の関係者になっているわけですから、その「事件」のために、ぼくから離れていったという人はいないんじゃないですか。

四「差別文明」と「反福祉」

——大仏さんの「人間観」というか、「文明論」をお伺いしたいんですが……

大仏 まず、私自身がムチ打たれるべきですが、現代文明には「懺悔」がありませんね。法華の根底は「懺悔」にあるんですよ。人間というものは、「業」（人間の持つ本質的矛盾）に気づいていませんね。「業」というのは、インドの言葉でカーマといい、それは「労働」の意味です。インドの場合、カーマというのは生まれつきというわけなんです。カーマ制度もありまして、床屋のカーマに生まれついたら、床屋はやらなくても床屋のカーマ

であることには、いっこうに変わりはないわけです。だから、生まれついで責任というか、負い目と「労働」は同じことなわけだ。日本の場合は、百姓のせがれが、皆まちへ出かけて行っちゃって、カースト制度じゃないからね、ちよつとのみこみにくいんだけど「労働」ということを職業の「業」という字にあてはめていたんだと思う。生まれた時から、何か負い目というか、背負っていかねばならないものがあるんだと思うんだ。それから逃げ出そうとしているのが、今の日本文明の行き方なのじゃないのかな。より強く、より大きく、より美しく、より早く、なんていう心が罪悪のもとなんだね。

——「差別文明」という言葉のうらにある大仏さんの想いみたいなものは……

大仏 「差別文明」という言葉は、「市民権」を得ている言葉ではないが、うちの会では、当然、出てくる言葉ですよ。うちの会で、そういう言葉をとれば「市民権」は出てきますね。全国の組織で「差別文明」という言葉を使うようになれば、それは「青い芝の言葉だな」というところで「市民権」を得てくると思う。「青い芝」が「市民権」を得てくれれば……。

——「差別文明」をもう少し平易に言くと、どうなりますか。つまり、何となくわかってしまうというところで「市民権」を得てしまうというのは、いやなものですか。

大仏 仕方がないな。そうなるより仕方がないんじゃないか。本当のことって、そう簡単に理解できないんじゃないの。そうなるのを覚悟して使うほかないね。理解してもらえなくても、テクニクを変え、言葉を変えて、くりかえしやっていくほかないんじゃないのかと思うんだけど。最も基本的に言えば、現在の日本文明は「業」ということに無自覚である。日本人というのは「歴史」をもたない民族だよ。だから、「民主主義」でも同じだよ。

一カ月くらい前、アメリカの上院で、南北戦争の時のリー將軍の名誉回復をする決議が為された報道があったが、その時、強固に反対した人が何人かいた。それは「奴隷主義者の名誉なんてあるものか」というものだ。一〇〇年もたった今日でも、リー將軍は悪者だと言う人、もう一〇〇年もたったいるのだからと理解を示す人、彼の時代にしてみれば無理もなかったと言う人

もいる。

それから、日仏会館へ、カピタン教授が館長としてきた時、仏文学者とか、フランス・ファンが集まってパーティを開き、歓迎の意味でラ・マルセイエーズを歌ったそう。そうしたら、カピタン教授が憤然と席をたつて、「おれのじいさんは、その歌を聞きながらギロチンに消えたんだぞ」と言ったそう。

日本人には、そういう頑固さがない。いたって「物わかり」がよくて、「お利口さん」がそろっている。ということとは「民主主義」ではないということだと思ふな。何か、日本で「民主主義」と言くと、誰ともケンカせず、円満につき合えることだと思っているけど、そうじゃなくて、誰とでも角つきあわせて、妥協できないバカみたいなのがそろっているのが「民主主義」だと思っているわけです。

その点、日本は「お利口さん」ばかりで、それは、どうしてかと言うと「歴史」がないからだと思う。日本には二〇〇〇年の「歴史」があるように教科書には書かれているけれども、その時その時、捨てちゃうわけでしょう。今までの文化は完全に捨てちゃって、新しいのをドサドサと受け入れて、全然変わってしまう。戦後になると、アメリカのものをドサドサと受け入れちゃって、今までのものは全部捨てちゃう。だから、歩留まりがない。ところが「おれのじいさんはラ・マルセイエーズで死んだんだ」とか、「リー將軍は奴隷主義者で、名誉回復する必要がない」とか、そういう「頑固さ」というのは「民主主義」には大事なんじゃないかと思う。

「CPⅡケツの穴」

——水俣の例なんです、善意に満ちみちて、カンパをしたり、闘うぞと拳をふりあげたりする一般の人たちが、「患者さん」という言い方をしてるんですが、「患者さん」という言葉からにじみ出すものに、原則的に同意できない。なぜ「患者」ではいけないのか。しかし、推測ですけれども、大仏さんは、「患者さん」とはおっしゃらないと思うんです。「患者さん」でなければいけないというのは、本人たちは「善意」でしょうが、私は頹廢ではないかと思うんです。

大仏 うちの会に関して言えば、ぼくは決してCPじゃなくて、「健全者」なわけですよ。ぼくには「CP＝ケツの穴」論というのがあつたんです。「差別用語」として受けとる人もいるんだけれども、CPは「ケツの穴」みたいなもんじゃないかと言っているんです。

「人間の体のなかで、ケツの穴はいちばん大切なんだ。手や足は一本くらいなくても生きていけるが、あまり人前にみせるものでなくて、恥かしくてかくしておくもんだけれども、どうしてかくさなければならぬのかもふくめて、かくさなければならぬのはいちばん大切なんじゃないか」なんて、ときどき冗談に言うんだけれど。

ほかの人が、CPに「同情」したり、「協力」したりしてくれるのに、ぼくは、CPに対しお説教するなんて言うてエライように聞こえちゃうんだけれど、実際エライと思っているんだけれども、どつちかって言うと、「しようがねえ奴らだ」という接し方をしている。だから、ぼくに関係していた彼らも「しようがねえ」と思われている態度でいる。だから、「CP解放」と言うけど、CPを解放するには、「マハラバ村」でもそうだけれども、「青い芝の会」でも、CP自身が闘わなければいけません。ぼくは、いくらやったって「協力者」でしかないんだから、闘う時の「スターター」の役割は、ぼくがやったかもしれないけれども、闘うのは彼ら自身であると思つてゐる。彼ら自身が本当に闘うものをもって、闘つてくれることを望んでいるわけですよ。

ところが、CP者自身が、いわゆる「健全者文明」というか、そういうものになんじやって、CP者自身がCPであることが嫌だという考え、これは抜け切れないです。抜け切れない間、ぼくは、はがゆく思っているわけだ。抜け切れるはずのものでもないし、だけれど、うちの会を中心を集まつてくれているCP者は、克服し切れないんだけれど、それを一所懸命、克服しようとして闘っているんだと思うんだ。ぼくと彼らとの関係は、あくまでも、「健全者」とCP者の関係でしかない。だけれど一般の人は、CPはCPで、一般の人とは違つて固定してゐると思うんだ。

——「水俣」を支援する人たちは、たとえば、しのぶちゃん^{*}をみ、その親をみ、そのまわりの人たちをみたときの彼らの考えを、いちばん端的に言えば、

しのぶちゃんは何歳で、本来ならば花嫁衣装だ、いかにチツソが悪いか——この域をついに出入れなかつたんじゃないかと思うわけです。

大仏 それは脳性マヒについてだって言える。ただ脳性マヒは、水俣チツソという目にみえる「敵」がいらないだけでね。この「敵」というのはよくに言わせれば、人間そのものなんだけれどもね。だから、運動としていちばんいいんじゃないかと思つて、CPにかかわつていたわけです。今、仙台の方で、CP者を中心に「社会福祉を考える会」なんてのができたようだけれど、あれも、うちの会の運動のなかに入つてくるでしょう。

——「開発反対」とか、「公害反対」とかいろいろありましたが、やれ、百姓は土地や人生を金に換算されて、土地を収奪されて気の毒だとか、追われ追われて難民になるとか、巨大企業がきてどうだとか、そういうこともさることながら、最終的には、「反福祉」以外にないと思つてゐる。ところが、たとえどうであれ、「反福祉」を言うと、それは人間的でないわけですね。

大仏 「青い芝の会」が「反福祉」と言えば安全なわけです。「健全者」が言うこととんでもないことになるけど。

現代文明を拒絶して

——たしかに、あの「事件」に問題が集約されていると思ひますね。

大仏 あの問題をとりあげれば、あそこに集約されているわけです。それに、福祉だけじゃなくて、「権力」の問題とか、福祉行政をすすめる役所とぼくたちとの関係とか、内部の権力という問題もあるし、いろんな問題がふくまれているわけです。

矢田龍司君の子どもを寝かしつけようとした時、「もう少し黙つていてくれれば寝ちゃうものを」と感じていた時に、「やめてくれよ」なんて言うもんだから、ぼくが腹をたてた。そしたら、「それは和尚の横暴だ」とか何とか、よく覚えていないが警察の調書によくのつてゐると思つた。そう言うんで、ぼくが腹をたててしまつて「事件」に結びついたら、皆も、抵抗しろと言つたことなんだよね。結局「おれがこれだけやつていてもこいつら、そういう受けとり方しかできないのか」と。

だけれど、それは、そう簡単にもいかないんでね。と言うのは、矢田君とい

うのは、小学生の時、両親をなくしちゃったんですよ。で、姉と二人兄弟、施設から施設へとまわって、都の職業訓練所で靴の訓練を受け、靴屋にちょっと勤めたこともあり、それから、製本屋になったりね。それで、うちへきたのは、自殺しそこなった後にきたわけですよ。そのことは、彼の姉さんが、『主婦の友』に書いたのが当選して出ているけれど、結局、身体障害者で両親がなく、施設から施設へ歩いてくれば、心がひねくれるわけですよ。ひねくれざるを得ないわけだ。そうして、自殺ということになってきて、自殺しそこなって閑居山へころげこむ。彼がころげこんできた時は敗北の身で、一時、山にもつたというのでしょね。だから、そういう奴をめぐめさせて「C Pの解放区」を確立していかなければならなかった。彼は、「差別文明」のなかで生きてきたわけだから。

C Pが現代文明を拒絶して、自分たちの文明を自分たちでつくって、C Pだけの独立人民共和国をつくるというのがぼくの発想なわけだ。ところが彼は、そういう気になんかともなっているわけないんだから、だから、自殺なんかはかかった。そういうふうな思想改造をしながらだから、やることはいくつもあつた。生活共同体として保つていかなければならないし、思想改造もしなければならぬ。共同体を成功させるためには、そういう思想をもつた人間がいなければならぬんだが、実際には、なかなかそうならなくてということですよ。それが、あの『事件』になるわけだけれども、ぼくも、その時には、その前からもあつたけど、「いくらやってもダメか」という感じをもつたね。

——文明を拒否して山の中へ行つて原始生活をするヒッピーみたいなのが、この数年来出てきていますが、どうもドロップ・アウトになっちゃうんじゃないかという気がするんです。「健全者」と文明の関係で言えばどうなんでしょう。

大仏 「健全者」とC Pの関係は、終始一貫して、うちの会のテーマであるわけですよ。現代文明、いや文明とかぎらず、人間そのものなんだろうな。何か「ロス」を、犠牲を排せしななければ、人間は生きていけないということに、そもその由来があると思う。だから、両者は排せした者と排せされた者の関係ですよ。文明は、ドロップ・アウトも反逆者もふくめて、ある

いはひねくれ者、現象的にはC Pとか、知恵遅れとか、犯罪者とかは人間がつくりだしたものでしょう。そういうものをつくりだすことよって文明は成り立っていくものだ。文明がそういうものをつくりだしたんでなく、逆に、そういうものが文明をつくっていると思う。だから、人間が文明社会を営む以上、絶対にそういった排泄物が消えてなくなることはないと思う。

*1坂本しのぶ（一九五六年）。胎児性水俣病患者として、水俣病被害の象徴的存在となる。

五「実態調査」と被差別者

——「農民のことを考えると、細胞がかきむしられる思いだ」などと語っている、尊大な農政評論家の書き物を読んで、これが体制を護持しているいちばん「左」の『役どころ』だと感じたことがあるんです。つまり、その先生がおっしゃるには、要するに「百姓はプロパンガスを使っちゃいかん、マキを使うべきだ。『近代』を拒否しなくちゃいかん」というわけです。脳性マヒの人たちが近代文明を拒否しなくちゃ生きていけないということと、マシ目を埋めて生活のできる先生の「反近代」は、どう眺めてみてもつながるはずはないと思う。

大仏 だから、うちの会員自身とぼくはつながらない面がありますよ。たとえば、一昨年、茨城県で心身障害者児の「実態調査」をやった。茨城県の「青い芝」は県南と県北に分かれていて、若干考え方が違うんです。県北の水戸の場合は、学生やボランティアの考え方がだいぶ入ってきているもんで、去年一年の闘いが学生運動になっちゃって、会の発足まもないから仕方ないと思うんだけど、うちの会がそれに乗っかっちゃってね。土浦の方からみて、「あれはダメだ」なんて言っていたんだけどね。学生は勢いが強くて、ぼくたちは遠くで眺めていた感じだった。

うちの会員一人ひとりについて言えば、この意見がよくわかるわけです。「実態調査」というのは『仁義』の問題なんだ。あいさつも何もしないで勝手に調査しちゃって、ぼくたちの意見は何も入っていない。県庁の役人や民生委員や町内会長などが、勝手に○をつけたり×をつけたりして、せいぜい

よく言って、障害者の親ですよ。障害者自身の意見はひとつも入っていないんだ。ひとつには、「実態調査」ではないじゃないかというのが、うちの会の基本的な考え方です。そうして集まったものが予算化されたり、福祉の政策に反映してくるといふのなら、全然、そんなのは、おれたちに縁もゆかりもない福祉政策だと。これがうちの会の意見なんだ。ところが、それを請け負ったのは茨大の連中なもので、学内闘争になって、それで、うちの会は水戸の場合、お客さん[〃]になっちゃった。

この間、その討論会があり、県会議員の種田六郎^{*1}さんも来てくれて、最後に、「それでは、青い芝としては、どういうふう[〃]に調査すればいいんですか」と彼が聞いた。そうしたら、うちの会員は、「調査と名のつくものはいっさい反対」と言った。「本当の調査なんか、できるわけあんめよ」と言う。それは本当なんだよな。調査表に自分で書きこんだって、書き終わった後、何かおかしいなという感じしか残らない。じゃ、自分の好きなことだけ書いてくれと言われたって、自分のモヤモヤを書けるわけじゃないんですよ。何とか表現したい、けど何も言えない、そういう感じですよ。

ぼくは、その時、「絶対反対はいいんだが、そうすると、行政側は、それみたことか、青い芝なんかと話したって何にもならない」ということで、行政はますます、手前勝手なことしかやらないぞ」と言った。この辺が、ぼく自身、「青い芝」からはじきだされる[〃]ところかも知れないけれどね。

それから、「一方的な押しつけしかないぞ。その押しつけがいやなら、ミノベ^{*2}さん式に、対話[〃]で、この調査のここを直して、こうしてくれとか、おれたちの希望をこう書いてくれというしかないんで、絶対反対と言ったら、調査することに反対でも賛成でもないということ以外にとりようがないんではないか。反対というからには、やっぱり調査表そのものを要求していく。完全なものなんかできっこないけど、試行錯誤をくりかえしながら、いいものをつくっていくのが民主主義ではないのか」なんて言ったんだ。うちの会員は全国的に反対だと思うんだ。ぼくの場合、健全者の妥協[〃]があると思うんだけどね。おこられるかも知れないが、ぼくは、そうじゃないかと思うけれど、「絶対反対」と言えば、行政側は思うつぼとは思わないかも知れないけど、「青い芝」とは話にならないと考えるだろうし、そうなれば、最

初から運動なんかやらなければいいんじゃないかということになると思うけどね。それこそ山の中にこもっていいことになっちゃうんじゃないかね。

この「実態調査」は、いちおうは、茨城県だけで自分でやっているということなんだけれども、ぼくは、これは今日のな問題だと思っている。茨城は、ある意味では、テスト・ケースじゃないかな。だいたい役人が、厚生省から言われもしないのに、独自にやるなんかないと思っている。

——茨城県の官僚福祉屋[〃]というのは、よそに比べてどうなんですか。

大仏 とくに茨城県だけじゃないですが、民生局長から始まって、三年くらいいて、今度は建設部長に変わるとか、そういう手合いじゃないの。福祉事務所のケース・ワーカーだと思ったら、次には県税務署へ廻るとか。だから、本当のことをわかつている人っていないんじゃないの。

現代「農業」の変質

——今の時代を、どういう時代だと考えていますか。

大仏 きのおう、石岡から筑波郡の方を歩いてきたんだが、筑波郡の方は芝生畑が多いんだ。石岡へ行くと、去年まで田んぼだったのが、サツキとかヤナギの苗がある。あんなのつくついでいて農業と言えるのかなと思うんです。ぼくの考えは古いのかもしれないけど、トマトなんかつくついでいれれば農業だと思っただけです。麦・米だけでなくてもね。クリとかナシまでは農業だと思っただけで、ヤナギの苗とか、はなはだしいのは芝生までつくついで、果して農業と言えるのかな。

下妻市で土地改良事業をしたんだけど、その金はほとんど農林省から出ている、市町村ではないでしょう。その土地は、最初は田んぼにする名目だったのに、全然田んぼにしないで、芝生を植えている。竹内猛^{*3}代議士に、「あれでも農業と言えんのだろうか」と話したんだが、彼が農政局長か誰かに聞いたら、「あれも農業です」と言う。これも役人的な感覚だからね。「農地法」に適合しているということだよ。マツヤスギを植えたら農地ではなく、山林になっちゃう。そういう法的解釈を披露したらしいけど、サクラの木は山林で、苗は農業らしいね。

——芝生を売ると同時に「土」をけずって売っている。

大仏 そう。あまりけずりすぎると、外から客土してね。戦後、自作農創設ということで「農地法」ができて、食糧事情と日本農業の後進性の脱却ということで農林省が始めたんだろがね。だいたい、農地は先祖代々の土地だなんて言っているけど、あれは嘘で、戦後「解放」になった土地だからね。ごく一部はあるだろうが、それだつてあやしい。明治の時のドサクサでかきこんだのが、ほとんどだからね。

西部劇にあるカウ・ボーイと農民の争いは、それまでカウ・ボーイが牛を飼っていたところへ、「これはおれの土地だ」と言つて小麦なんかつくり始めた。カウ・ボーイから見れば、農民の方がよっぽど土地ドロボウなわけだよ。

それから、きだ・みのるさんが書いていたけど、福岡県に有名な泥棒部落がある。つまり山窩の部落なわけです。彼らにとつては、近代資本主義なんてとんでもないわけだ。まして、農業そのものがけしからんわけです。山窩の生活から見れば、「この土地はおれの土地だから入っちゃいけない」と言う方がまちがっているわけだ。世の中の価値観が変わつてくると、今まで、よかったものが悪くなつてくる。遊牧民のなかへ百姓が入り、百姓が主導権を握ると、遊牧民が「悪者」になつていく。その泥棒部落だつて、おとし、いつせいに検挙されたことがある。あれだつて、彼らからすれば「正義」なわけだ。だいたい、着物なんか、この店のものだというのが、彼らの目からみればまちがっている。着るためにとつてきただけなんだ。ただそれが、誰かがかつてにつくつた「刑法」に触れるだけなんだ。

そういう感覚からすれば、「三里塚」や「むつ小川原」の連中じゃ悪いけど、百姓が「この土地はおれのもんだ」と言うのも、一種のドロボウのわけだ。だいたい土地なんて誰がつくつたんでもないんだから。仏教でも「地水火風」と言つて、地は大地、水は川とか海、火は太陽とかエネルギー、風は空気、この四つは誰のものでもなくて、皆のものであるわけで、この四つが仏だと考えるわけです。

それでも、近代文明のなかで共同して生きていくには、百姓がなければならぬというので、百姓は国の「大御宝」なんて言われて、土地の所有権が

あるということになり、戦後、「農地解放」でああいうことになった。それが、今、ツツジやサクラの苗を植えたりして、あれで、土地が農民のものであるという根拠になるかと思うんだ。文明の形態が変わつてきたということだろうが、それにしてもおかしいと思うんだ。

無自覚こそ「敵」

——大仏さんにとつての「敵」は何ですか。

大仏 この間、マルクスの『経・哲草稿』を読んでいたら、「自覚」というのがでてきた。「自覚」というのはどういふことかと思つて調べてみたら、ドイツ語には「自覚」という言葉がないんだ。英語にも、フランス語にもない。それを日本の訳者がかつてに「自覚する」なんて訳した。それは正確には「意識する」ですよ。

「意識する」「理解する」「良心」というのは語源が同じなんだ。そうすると、日本人なら、中学生くらいになると、「意識する」と「自覚する」の違いは何となくわかる。「意識する」と「自覚する」がわからないなんて、カントとかヘーゲル、マルクスが日本へ来れば中学生以下なんじゃないかな。ゾロアスターがあげた人間のやらなければならぬ徳目のなかに、ボーダ

「自覚する」ということがある。ペルシャからこちら側は、「自覚する」ということが大事なんじゃないかな。「自覚」を大切にするといふのは、それは仏教の影響でしょう。オリエントから向うへ行く時、「自覚する」が抜けおちちゃつて、それよりも「わかる」とか「理解する」とかになつてしまつたと思う。

だから、「敵」といふのは無自覚な奴らだ。「健全者」だと無自覚に思つている奴らが「敵」なわけだ。もつと言えば「業」(本質的矛盾・罪悪性)を知らない奴だ。

——「マハラバ村」を「解放区」といふかたちでやつてこられたわけですが、それが「青い芝」の母体になつたのですか。

大仏 「マハラバ村」がのりこえられたというわけだが、現在は、各地の「青い芝」になつて、「青い芝」そのものが「解放区」といふそういう考え方で「青い芝」では現代文明を拒否していく、したがつて「解放区」——「青

い芝の共同体」をつくらうという動きが各地にある。山形でも、さつそく始めようということだろうが、実際にはなかなかね。静岡でもそういう動きがあるし、奈良でもつくろうとしている。しかし、どれだけできるかはわかりません。ぼくは、「青い芝」を「解放区」と考え、それで「権力」を包囲しようと思っています。

——「青い芝の会」という名前の由来は……。

大仏 ぼくがつけたのじゃないからわからないけれども、芝はふんづけられても根が切れないという意味らしい。

ぼくは、東京都に第二種福祉事業団体の認可を申請したんですが、その時、「青い芝」だけではお粗末だから、「日本脳性マヒ者協会」(青い芝の会)としたら、後で役員会で、「相談しないで名前をつけた」とおこられてしまっただけだね。だから、今は、いちおう「日本脳性マヒ者協会」というのが名前になっている。

その時、うちの会の規約を提出したら、「これじゃ社会福祉事業団体に認可できない」と言われた。なぜかと聞くと、「社会福祉事業の概念にあてはまらない」というんだ。「テメエたちが、テメエたちで幸せになりましたよ」というのは「テメエ福祉」で、「社会福祉」というのは、「誰かが誰かのためにやるもの」だ。「青い芝の会」は、自分たちの権利を確立しようと言っているので「社会福祉」とならない。

これが社会福祉に対するお役所的な考え方でね。そのことは、今でも一貫していて、この「実態調査」なんていうのも、「社会福祉はお役所がやるものだ。青い芝の脳性マヒ者は対象者ではない」という考え方で。

仕方がないから、うちの会は「会員相互の親睦」とか「権利の拡充」とか、そのほか、「事業」とか「宣伝活動」なども加えて、何とか認可された。それはそれでいいけれども、認可されると、金をもらおう方じゃなく、出す方になっちゃう。だから、こちらが「赤い羽根をお願いします」なんてことになっちゃう。

*1 (一九二〇—二〇一五) 社会党に属し、水戸市議、茨城県議を歴任。

*2 美濃部亮吉(一九〇四—一九八四)のこと。政治学者、法政大学教授、東京教

育大学教授。一九六七年から一九七九年まで三期東京都知事を務める。社会党と共産党の支持を受けた「革新知事」の代表的存在。

*3 (一九二二—二〇〇四) 旧茨城三区選出の社会党代議士。一九七二年から一九九六年まで八期務めた。

六「法華一乗」と「悪人正機」

——これからの運動としての展望は。

大仏 うちの会にはうちの会の考え方があって、その考え方に近いものとは協力することだろう。うちの会の考え方をとらなくても、理解してくれば協力していく。だから、「被差別統一戦線」なんてのをつくっていくんです。「解放同盟」なんかはうちの会の考え方を理解してくれるんじゃないかな。

——「福祉」を看板にしている既存組織や運動体とのかかわりは。

大仏 ぼくが、「青い芝」の運動をすすめたと思ったのは、既成政党や運動体の考えを変えろというのが目的だった。個人の考えだけど、結局、うちの会も、そういう方向で動くんじゃないだろうか。今までの社会党にしても、うちの会の考え方を理解して、それを政策に反映していくことができるというふうな、そうしなきゃいけないという考え方が、ぼくにはある。共産党の場合、理論的に言って、それは不可能だと思ってる。ぼくの方で共産党は嫌われないけど、共産党の方で「青い芝の会」は賛成しないだろうと思う。

——具体的にその兆しはありますか。

大仏 もう各地であります。茨城じゃありませんがね。「全障研」^{*1}とは、全く相容れませんが、関西ではとくにはつきりしています。

——昨年、「優生保護法改悪粉砕集会」があり、その初日の分科会で、神奈川県の小山さんが「解放区」のことを話していたところに、偶然いあわせました。集会の主旨が不統一で、皆バラバラに、勝手なことを言っていたんです。それで、二日目にはデモがあり、その先頭には車イスに乗った身障者がいたんです。「弱者」を先頭に出し、「健全者」はそれに合わせましようという。それをみていまして、政治的なものが絡んできた時は、むずかしくなる

など思っただんです。今までもあつたんでしょか。

大仏 方々にありました。荒木君^{*3}なんかは、うちの会員なんだが、完全に「健全者」にとりこまれたみたいで、うちでも手をこまねいているみたいなのところもあったな。

昨年の水戸の運動でも、あれじゃ仕方ないなど、同じ県内にいながら眺めるしかなかった。教授をつるしあげているんだよ。教授をつるしあげたつて、問題の本質の解決にやならない。悪いのは県庁なんだから。でも、茨大の教授は、最後には、作業を県に返上しましたよ。ぼくたちは、それで立派な成果だと思っけど、学生たちは、「引き受けたこと自体まちがっているんだから自己批判しろ」と言っているんだ。そりゃ、そうだけど、「そればかりやっていたら、うちの会の運動にならないから」と、ぼくは言っただけ。

「非情」は成仏しない

——「優生保護法」の問題についてはどんな考えでしょう……

大仏 障害者には不良な子孫とか、障害者は生まれにくい方がいいと書いてあるのはけしからんというのがうちの会の方針です。ウーマン・リブの場合、子どもを生むのは女の権利、役所や法律が何かいするのは筋が違っているという考え方ですね。それから、もう一つは労組の婦人部、「優生保護法」改正の条文のなかに、貧困家庭はないというのがあるが、現実に貧困家庭があり、それを理由に妊娠中絶ができないのは困るといって考え方です。うちの会とはそれぞれ違う考え方です。

あれが廃案になった決定的理由は、「医師会」の二人がああ案に反対したからです。保革伯仲しているから、二人の与党議員が反対にまわっちゃったから、厚生大臣も仕方がなくておろしたんだけど、なぜ「医師会」が反対したかというところ、表面の理由は、「胎児チェックとか胎児診断は、まだ技術が完全でない。完全でないのを医師会に押しつけられても困る」というのが理由です。だけど、ぼくから言わせれば、あれが通つちゃうと産婦人科医が儲かなくなるからだと思う。誰も、そう思うでしょう。

だけど、厚生大臣はそのことは言わないで、「身体障害者の団体も反対し

ていますから」と言う。政治というのはそういうもんだらうと思う。それぞれ違う理由で反対して、最後には、与党議員もひっくりかえる。政治は、あくまでもチェック・アンド・バランスで動いていくんだと思う。うちの会あたりがわめいたから、火つけ役⁴になっただけで、それはそれで、「医師会」が反対しようが、労組の婦人部が反対しようが、それはそれでありがたいと思っただけ。不純だと言われようが、かまわない。政治とは、しょせん、そんなものだから。

ぼくの考え方の一つの基礎には、「念仏」の理論がある。「念仏」の理論で、ぼくは、よく『歎異抄』を引き合いに出すけど、それだけじゃないんだ。必ずしも親鸞主義者じゃないけれども、『歎異抄』がよくまとまっているので、よく使わせてもらっているだけのことです。

『歎異抄』に代表される「浄土教」というのは、「悪人正機」で、それは比叡山で発達した考え方です。一般には、親鸞から始まって、その先生の法然から深まったものだとされたり、法然は「念仏」をもって比叡山から独立したんだと言われて、それも嘘じゃないんだけど、法然や親鸞のような考え方が出てくるもとは、ちゃんと比叡山のなかにある。比叡山の考え方は、「法華一乗^{*4}」という考え方で、「善人も悪人も全部成仏する」ということです。つまり、「草木国土悉皆成仏」ということです。その思想を底の方で支えているのに「悪人正機」思想がちゃんとあつたんです。それは、法然の先生の先生である皇覚という人が書き残している。

「恵心流」というのがあり、円仁（慈覚大師）から始まって、恵心僧都「源信」、そして皇覚法師、さらに法然上人と連なる流れのなかに、「悪人正機」の考えがあつて、「天台本覚論^{*5}」の中枢だと言われている。このなかに、草木は成仏するが草木つまり自然は「非情^{*6}」であると説かれている、「非情」は成仏しない。

「草木国土悉皆成仏」

「法華一乗」の思想がまちがって伝えられると、全体主義的な思想になるんです。日蓮系なんかで、非常にそれに近い動きをしているのがある。日本山妙法寺なんかは典型的なだけでも、創価学会などもそうで、「国立戒

壇」をつくると言っている。「国立戒壇」というのは、一口で言えば「思想統一」ということで、思想を全部統一して、全人民が一丸となるということです。「草木国土悉皆成仏」とは、皆、一つになって仏になるという考え方だからね。当然、そういう考え方にいく。だけど、その考えを支えているのは、本当は一人ひとりが別々であるという考えが基礎にあつて、その上に成立するわけだ。その裏側が欠落しているというのははなはだ危険なわけです。

その基礎として、たとえば、「三十四箇事書」(伝患心著)のなかに、

「但草木成仏説事為破他人情故、他人意云、」 草木只草木無生界仏界徳
一向只非情不有情 故破之 一家意 雖草木非情乍非情施有情徳也 改非
情非云有情也 故成仏云人々転非情成有情思 全不尔 只乍非情而有情
也 能々可思之^{*7}

という文章があります。

つまり、「非情は非情のまままでけっこうなんだ。草木が人間のようにならな
ることができない。悪いものは悪いまままでけっこうなんだ。悪いというこ
とで、すでにいいことなんだ。とくに、いいことになるなんて思う必要がな
い」。それが、ここに述べられている。「草木国土悉皆成仏」を下手に理解す
ると、皆一つになつて、悪平等になつてしまう。だから、脳性マヒなら脳性
マヒで、それですでにいいのだという考え方なんです。脳性マヒ者が「健全
者」に近づいてよくなるなんて考える必要がないというわけです。脳性マヒ
は脳性マヒで、健全者は健全者で、それでいいわけです。別々でいて、それ
で一律なんだという考え方がないと、「草木国土悉皆成仏」がまちがつて理
解されるが、この考え方は、比叡山にちゃんとあつたんです。そして法然は
それだけをもつて独立しちやつたんです。

この考え方をたどっていくと、「唯識論」からゾロアスター教までさかの
ばれる。ゾロアスター教はマニ教やミトラ教などの分派を生んでいくんだ
が、とくに、マニ教はその考えが濃厚で、仏教の「唯識論」に決定的な影響
を与えた。これは、キリスト教で言えば、一三世紀頃までヨーロッパに残つ
ていて、一三世紀に皆殺しにあつて、組織としては解体してしまうわけだ。
その考え方は、「この世の中のもの全部悪だ」と言う。「善の世界」と「悪

の世界」にくつきり分けてしまう。あるいは、「光明の世界」と「暗黒の世界」
に分けちゃう。つまり、この世は善の階級と悪の階級の闘争の世界とみるわ
けで、人類の歴史は階級闘争の歴史だとみる。そして最期(善と悪の矛盾が
最大に達した時)には、救世主が現われて、今までしいたげられていた善の
階級が闘いに勝つて、新しい世界が生まれると考えるのです。

それで、現実の権力・世俗は全部「罪悪」だというふうに考える。それが
仏教に影響を与えて、ずっと流れて「悪人正機説」になつたんだと思う。だ
から、親鸞の時にひよっこ出てきたんではないと思つています。「唯識論」
でも、この世を俗諦と真諦にクッキリ分けてみるわけですが、さつきお話し
しました覚悟(ボーダ)でとらえる。何と言うか、観念の世界といつても、ヘ
ーゲル流の観念とは全然ちがつていて、知性でとらえる観念ではなく、覚
悟・決意でとらえた世界なわけです。

その思想の系統を追っているわけだけでも、この辺の研究は充分じゃな
いね。ペルシャ・アフガニスタン・西域付近なんかを、もっと発掘すれば資
料が出てくるんじゃないかな。

——「非暴力主義」については、どのように考えていますか。

大仏 仏教の根本には、「非暴力」「不所有」「無差別」の三つがあると思つ
ているんだ。「非暴力」と言つたら、まあ、ケンカしてもいいだろうが、う
ちの組織なんかも非暴力組織だよ。暴力をやつたらかなわないからね。「非
暴力」とは闘争しないということではない。「非暴力」の闘争をするという
ことですよ。

仏教のなかに「マディア」という考え方があつて、「中」というんです。
同じ意味の言葉で、「ケンドラ」というのがある。「マディア」というのは
A・B二点があつて成立する。「ケンドラ」の場合は、一定の長さや面積が
あつて、その中心ということですよ。「マディア」はどちらか一点が消えたら
消えてしまうが、「ケンドラ」は消えないわけです。

ネールが戦後、「第三勢力論」を出した時、誤解される恐れがあるという
ので、「非同盟」かに変わつていったんだが、創価学会で言っている「中道
政治」も、ある意味では、力関係でその空間からはみだしてしまつても、そ
れは仏教流に言えば「マディア」(中心)である。「ケンドラ」だったら、両

方の中間をとるということです。仏教の「中」は、両者のつり合いにあるんだが、よく誤解されるんだ。

うちの会では、「CP解放」のためには、少し極端なことを言ってもいいという考え方です。だから、「実態調査」にしても、「絶対反対」と言えば、行政は一方的にやるだろうと言ったけれども、うちの会では全国的に「絶対反対」にまとまるんじゃないかな。そしたら、押しつぶされてしまうだろうけど、戦術としては、そういうのもいいと思うんだ。やりすぎだというのをやってもいいんだという考え方がありますよ。それは仏教の「マディア」からきた。それは、ぼくが「マディア」の考え方も皆に教えて、その通りになったというよりも、うちの会の必然性からそうなっているんじゃないかな。たまたま、ぼくの言った「マディア」理論が都合よくつかわれているということじゃないかな。

〔一九七五年八月一五日 茨城県千代田村、閑居山願成寺において〕

*1 一九六七年に結成された共産党系の全国障害者問題研究会のこと。障害者には無限の発達可能性があるとする「発達保障論」を基軸とする。

*2 小山正義（一九三九—）。神奈川県出身。マハラバ村にも参加し、一九六二年、「青い芝の会」川崎支部を発足させる。

*3 荒木義昭（一九四二—二〇一六）。東京都出身の脳性マヒ当事者。適性検査により運転免許試験の受験を拒否され、やむなく無免許運転をしていたところを檢舉され、一九六九年六月に起訴された。運転免許試験場の措置の不当性を訴えて裁判闘争を展開する。この間の事情に関しては、深田耕一郎「荒木義昭・オーラルヒストリー——無免許運転8000キロが意味するもの」（『障害学研究』一三、二〇一八年）に詳しい。同時代の当事者の証言としては、若林克彦『脳性マヒ者の生活と労働（その4）軌跡 青い芝の会——ある脳性マヒ者運動のあゆみ』（私家版、一九八六年、七二—七九頁）がある。また荒木義昭「いろいろやってきた結果として今がある」（『全国自立生活センター協議会編『自立生活運動と障害文化——当事者からの福祉論』「現代書館、二〇〇一年」所収、二二五—二二六頁）も参照のこと。

*4 法華経に説かれた教えで、一切衆生が等しく成仏できるといふ説。

*5 中世の天台宗で展開したもので、あるがままの現象世界をそのまま仏の覚りの世界とみる、徹底した現実肯定主義の思想。「草木国土悉皆成仏」はその典型的なキャッチフレーズと目される。

*6 仏教で、山川草木等、精神作用をもたないものを言う。これに対して人間など精神作用をもつものは「有情」と呼ばれる。

*7 引用文中冒頭の「」内は、大仏の蔵書に含まれる田村芳朗ほか編『日本思想大系9 天台本覚論』（岩波書店、一九七三年、三六二頁）により補っている。該当箇所を読み下し文は次のとおりである。「ただし草木成仏と説く事は、他人の情を破さんがための故に。他人の意の云く、草木はただ草木にして、生界・仏界の徳なしと。一向ただ非情にして、有情にあらずと。故に、これを破す。一家の意は、草木非情といへども、非情ながら有情の徳を施す。非情を改めて有情と云ふにはあらず。故に成仏と云へば、人々、非情を転じて有情と成ると思ふ。全くしからず。ただ非情ながら、しかも有情なり。よくよく、これを思ふべし」（同書、一六七頁）。

ちなみに田村はこの箇所を次のように意識している。「当家で草木成仏という場合、草木は非情であって成仏しないという考えを破するためであり、また草木成仏というと、非情の草木が有情に転化して成仏すると考えがちであるが、実は、非情の草木そのまま有情ないし仏である」（同頁、頭註）。

これに関連して大仏の宗教思想については、不十分ながら山崎亮「障害者自立思想の一流流——「青い芝の会」の宗教思想をめぐって」（『島根大学法文学部紀要 社会文化学教科編 社会文化論集』一三、二〇一七年）を参照のこと。

資料1

宣言

〔大仏 空〕

われわれは同情されることを拒否いたします。人々は我々CP者に同情しあわれみをかけて呉れます。我々はこれを拒否して行かねばなりません。それには同情されなければならぬ現状をうち破って行かねばなりません。そのために青い芝の会は結成されました。

たとえ貧しくとも、愚かであろうとも学がなからうとも家柄が低からうとも器量が悪からうとも、手足が満足なだけで喜べ、そして働け！ と教えられ、それが美しい言葉として、庶民の倫理として生きてきたのです。

その引き換えに弱い者にはあわれみを、CP者には同情を与えてきたのです。

我々は長年のあゆみの中であわれみと同情が偏見・差別と全く同じものの

裏表をなすものだということを知ってきました。

それは誤解と無知にもとづくものではなく、自分より弱い者、自分より悪い者を見ることよって安堵する生物的本能を歴史的社会的に制度化し慣習化し文明とすることよって、社会と歴史に対する自己の責任を、慣習とか文明とかさらに名もない一庶民というものの中に放棄し逃避することを定着させ、CP者を弱者とし、厄介者として位置づけることよって、大部分の人々は自分が同情する側にいるのであり、同情される側にはいないという社会常識の上にあぐらをかいて生活してきました。

CP者は同情を拒否いたします！

人類に同情する階級と同情される階級の差別があつてはなりません。我々が同情を受け入れることは現代社会のこの差別文明を承認することになるのです。

自分より弱い者に同情し援助するのは正義だとされてきました。それは弱い立場にならなければならなかった、歴史的社会的メカニズムを把握・自覚せず、糾弾せず、心情的にのみ同情するものであり、そのメカニズムを是認し隠ぺいすることになるのです。それは正義ではなく罪悪なのです。

CP者が現代社会にあつて弱者であることは事実でしょう。しかしそれは社会のメカニズムによつて弱者にされたにすぎません。CPであること、障害者であること、またなんらかの条件の劣るものが、本質的に弱者とされなければならぬ、いわれはありません。

無自覚な人々が我々に同情し協力し援助して呉れるのは、虚偽に充ちたこの社会のメカニズムを固定化し弱者を作り出し、そのかくされた優越感を自己満足させているのです。

弱者を救済する、それは罪悪です。弱者を作り出さないことこそ正義でなければなりません。

我々は右の立場に立つて次の四つの誓願をかかげます。

一、我々は自らがCP者であることを自覚する。

我々は現代社会にあつて「本来あつてはならない存在」とされつつある自らの位置を認識し、そこに一切の運動の原点をおかなければならない

と信じ、且つ行動する。

一、我々は強固な自己主張を行う。

我々がCP者であることを自覚したとき、そこに起るのは自らを守ろうとする意志である。我々は強固な自己主張こそ、それをなし得る唯一の路であると信じ、且つ行動する。

一、我々は愛と正義を否定する。

我々は愛と正義のもつエゴイズムを鋭く告発し、それを否定する事によつて生じる人間凝視に伴なう相互理解こそ真の福祉であると信じ、且つ行動する。

一、我々は問題解決の路を選ばない。

我々は安易に問題の解決を図ろうとすることがいかに危険な妥協への出発であるか、身をもつて知つてきた。

我々は次々と問題提起を行うことのみ我らの行い得る運動であると信じ、且つ行動する。

この誓願を旗印として、我々CP者の結束を固め、賛同者と連帯を深め、真に人の世から差別がなくなるまで闘う者であることを宣言いたします。

人の世に光あれ

限りなく生きてあれ

CP解放戦線バンザイ！

一九七五年 八月二十四日

山形青い芝の会結成大会

資料Ⅱ

序文

大仏空

おれの地獄を見きわめない者に真実はない。なにかこの世に良いことがあるようなオシャベリは止めてくれ！所詮、人間はこの地獄に生きてゆかねばならないのだから。

科学（科学的思想）も含めて多くの宗教が、その教条や思想を信じ実践すれば、この世が幸福になる、というのならあまりに人を馬鹿にした言葉だ。ただ現実の社会では、嘘の利益にしろ選択して生きて行くしかないというだけのことであり、それが虚偽の福祉だからやっても無駄だという卑怯者は、まだまだおのれの地獄を見きわめていないということなのだ。

『多くの矛盾が存在しているが、そのうち必ず一つが主要矛盾であって、その発展によって、その他の諸矛盾の存在と発展が規定されまたは影響される』（矛盾論）と毛沢東が説いているのは、まさに地獄を見きわめた論理だと言える。

つまり多くの矛盾のうち主要矛盾と信じる一つの矛盾を選択し、他の矛盾をその主要矛盾によって規定していくことだ。多くの矛盾が同時に同列平行的に解決するなどということはあり得ないのだ、すくなくとも人間のやることは。

一つの矛盾を解決するために二つの矛盾を生み出すかも知れないが、だからといってそれをやらないのはもつと卑怯な人間だ。どのみち人間の業^カは、ことは悪なのだ。

註 業^カ＝カルマ・労働

多くの矛盾の中から、主要矛盾を選択するのはなにによるか、科学的基準などというものを人間は手にしているが、科学なるものがそのような絶対的なものだろうか？

CP解放戦線（青い芝の会）は、このことを叫ぶ。

CP（脳性小児マヒ）はなぜ存在するのか、それは人間が二本足で歩くからだ。

猿と人類との決定的差は二本足で歩くか、歩けないかにある。これはまたCPをつくるかつからないかでもある。

二本足で歩くということは脳が大きく出た基礎であり、脳の生活全体に占める比重が大きくなった結果、CPが生まれることになった。

手を使い道具を作り、声が出せたのもすべて二本足で歩く結果であり、こ

れらのことはみなCPを生む下地・構造なのだ。

人類は二本足で歩く結果、文明を持ち得た、その代償としてCPを作った、というよりCPをつくり出すことよって人間たり得た。

CPは人類が人間になるためのロスであり、損失部分・必要経費・必然誤差なのだ。

土台、二本足で歩くことは生物として無理なのだ。二本足で立つことは内臓が下に落ちないようにする働^カが生理構造に必要であり、その結果は難産になる。難産・早産がなければCPの過半は生まれぬ。

二本足で歩くことも、人間が自然の中で生きているうちはよい。自然は人間をきたえる。きたえられた人間は生物としての矛盾を相当程度、克服できた。しかし文明の異常発生といえる現代では人間は決して自然のままではない。現代文明は人間を虚弱にしデリケートにしかなかった。しかもそれが科学というものだと誤って考えられて来た。

ここに生物としての矛盾が露呈する、それがCPである。

人間はおのれの持つ矛盾・業・罪悪性に目をつむり、気づかず気づこうとせず、正義を語り愛を論ずる。

おのれの地獄を見きわめない正義ほど罪悪性のヒドいものはない。しかもトトンおのれの地獄を見きわめる能力など人間は持ち得よう筈もない。あのならずでに地獄ではない。

人は二本足で歩き、言葉をしゃべりながらCPに同情する。二本足で歩き口をきくことがその障害を作り出す根本的原因なのに、それを矛盾とも罪悪とも感じないで、同情し協力者などというかくされた優越感の自己満足を業^カっている。これを無過失責任と呼ぶべきだろうか。

公害企業の社員がその仕事を無自覚に続けながら、その公害の反対運動をやるコツケイと言うより、悪ラツなのが福祉運動であり福祉行政なのだ。

CP解放戦線はこの状況の中で闘っている。その思想的中心にマハラバ理論というのがある。《決意^カ＝CP者としての自覚、行動^カ＝CP者としての抗議・主張・糾弾、拒否^カ＝健全者の愛と正義の拒否、おのれの愛と正義の否定、

放棄し合理的・科学的といわれる妥協の放棄

自から生きるための業として「青い芝」を組織し、解放区を試みながら組織と権力を絶対的に否定し自己の存在も矛盾(無常)としてのみ肯定する理論であり、健全者社会を徹底拒否し、政治を拒否・糾弾の直接行動こそ念仏(さげび)とする思想^{*2}

それはマハラバ村と名のつた、C P者自治の共同体で三十人未満の同志がノタウチまわって獲得した理論である。

よく世間では愚僧がその指導者であり、マハラバ理論の創始者であるような誤解があるが、それはまちがいで、事実は愚僧の思いもよらぬ方向に進み、その中から愚僧も学んだのだった。

この本は、その何人かの同志のノタウチまわったドキュメンタリーである。

愚僧はこれを多くの学生、労働者そしてC P同志に読んで貰いたい。そしてさらに理論を発展させ強固にして欲しい。すでに多くの同志によってマハラバ村はのり超えられた。そして若い多くの同志が、挫折と破滅をおそれず福祉ゲリラを展開し、福祉国家という名の奴隷制を破たんに追い込むことを期待する。

その運動・C P解放戦線は人類を救うものだと信じている。なぜならC Pのような人類のロス・損失・誤差を省みない現代文明は滅亡への道を歩いていると思うからだ。

人間が生きてるといふこと自体、所詮は無駄かも知れない。しかし必死に生き抜かなかつた者に無駄だと言ふ資格はない。敗北は、生命を賭けて闘った者のみが持てる名誉である。闘わない者には敗北すらない。

C P者がおのれが無駄だと言ふのは正しい(無駄だからこそ尊い)。しかし健全者がC P者を無駄だと言ふのを許しはしない。

C P者が健全者を差別し糾弾するのは正しい。しかし健全者がC P者を差別するのは許されはしない。

そのことはまさに、多くの矛盾に主要矛盾と一般矛盾があつて、C P解放戦線にとっての主要矛盾を選択し、妥協はあり得ない。他の矛盾はそれによって規定されて発展するのだ。選択すること、つまり極悪人の立場を選択す

ることが真実を獲得させる。

マハラバ村七年間の足あとには累々と、しかばねが横たわっている。文中の矢田龍司をなぐつて重傷を負わせた、ということと愚僧は懲役一年の刑を受けた。それが愚僧にとって最大の収穫だった。蛇足だが彼が現在でも愚僧にとって最愛の存在の一人であることに変わりはない。

司法とはなにか、を考える。

火宅無常の世界はよるずのこと、みなもてそらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにしておわします^{*3}——歎異抄——

「あわせて『母よ！殺すな』横塚晃一(すずさわ書店)も読んでいただきたい。

一九七五・四・二二

閑居山マハラバ村塾にて^{*4}
(横田弘著『軛草』序文より)

*1大仏の蔵書に含まれ、彼が参照した松村一人／竹内実訳『実践論・矛盾論』(岩波文庫、一九五七年、六一頁)では、「……そのうち、かならず一つが主要な矛盾であつて、その存在と発展によつて、その他の諸矛盾の存在と発展が規定され、……」となつている。

*2『ころび草』に収録された序文では、この箇所は以下のようになつていた。

「一、我らは自らがC P者であることを自覚する。

一、我らは強固な自己主張を行う。

一、我らは愛と正義を否定する。

一、われらは問題解決の道を選らばない。

自ら生きる業として青い芝の会を組織し、解放区を試みながら、組織と権力を絶対否定し、自己自身も罪悪(矛盾)としてのみ肯定する理論であり、健全者社会を徹底拒否し、政治を否定し糾弾の直接行動こそ念仏とする思想である」(横田弘『ころび草』——脳性麻痺者のある共同生活の生成と崩壊』(自立社、一九七五年、六頁)。

*3大仏の蔵書に含まれ、彼が参照した金子大栄校注『歎異抄』(岩波文庫、一九五八年再版)では「火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに、たゞ念仏のみぞまことにておはします」(同書、七五頁「現行版では八八頁」とある。

*4「」内は、『ころび草』に実際に収録された序文にあった文言であるが、この付録資料では削除されている。ちなみに本文もかなりの推敲を重ね、あるいは補足が加えられている。

資料Ⅲ

敗軍の兵

横塚晃一

敗軍の将兵を語らずという言葉がある。私は勿論将ではない。しかし一脳性マヒ者としてコロナー運動に加わった一人ではある。いったい自らの青春を賭けたマハラバ村の生活とは、私にとってどんな意味を持つのであろうか。又重度障害者の生き方の方向として、更に身障者福祉問題の上はどう位置づけられるべきものなのだろうか。ここに少しばかり私の考えを述べ、障害者の皆さん自らの問題として共に考えていただきたいと思いいペンをとった次第です。

第一にマハラバ村にはコロナー理論（アウトサイダー理論）というものがあって、それはマハラバ村の提供者であり指導者であった大仏師の理論であった。このコロナー理論に賛同した者が一年の準備期間を置いて二、三人で始め、後から来た者はこの理論を生活の中から学習していった。私に加わったのはコロナーが始まって半年ほど経てからである。

マハラバ村設立の当初、我々は自らを千早城(チヤウ)に例えた。そこでの四年間の生活は言語に絶する人間ドラマの連続であったが、それはさておき、現代風に言うならば、県立川崎高校における《心のバリエード》であり、《入って来させる為のバリエード》なのであった。我々重度障害者が社会（親・兄弟を含めて）と接する時、そこには差別か断絶があるのみである。私達が個人として世の人の理解を求めようとすれば「可哀そうにねえ」という言葉が返ってくる。「そうじゃないんだ」とさんざん説明したあげくに得られるものは「解りました。障害者の為にやってやらなければねえ」ということなのであって、あくまでも強者が弱者を見下す態度を捨てない。親に至っては「この子は一生私が面倒見なければ」と言いながら、ろくろく躰もせず、世

の中に送り出す用意を怠り、あげくの果てに手におえなくなれば命まで奪いかねないという、つまり人間としての人格までも無視するのである。一方「可哀そうに」「気の毒に」「やってやるよ」という言葉を我々が拒否した場合、そこにあるのは断絶のみである。マハラバ村の入口には「役人と犬入るべからず」と大書してあった。又別の所には「マハラバ村には鍵はありません」と書いてあった。これが所謂心のバリエードであり、入って来させるバリエードなのである。つまり社会と一線を画し、社会に背を向けることによつてのみ、逆に正しい姿勢で社会に参加することができ、そこにこそ正しい意味の相互理解が生れてくるのだ。故に我々の運動は物質オンリーの世の中、生産に携わらない者は人に非ずという社会に対するアンチテーゼであり、反体制運動であった。従つてコロナー運動に参加したものはこの世の物質的栄光を捨てることを必然的に要求された。これが所謂コロナー理論の骨子である。

始まってから三年、四組の夫妻がマハラバ村にでき上った。そしてその二ユースを聞いて集ったCP者達も合せてマハラバ村の人口はいっぺんにふくれ上り二十数名となった。勿論それまでも人の交代を伴いつつ徐々に増えてはいたのである。

このマハラバ村が何故崩壊したのであろうか。人により立場により種々の見方があるう、又それぞれの言い分もあるう。だからこれはあくまで私個人の意見として読んでいただきたい。

マハラバ村崩壊の根本的原因はCPの社会性の欠如、人間不信であり、自分自身が生きていることに対する恨みを仲間や指導者に向けたことである。更に細かく述べるならば、マハラバ村は基本的に障害者自身の決心で参加すべき組織なのに、マスコミで取り上げられたことにより親がやり場のない子を置いていくようになり、従つて置いていかれた人々は自分からコロナーをつくり上げるという自覚に乏しかった。又コロナーでは否定されなければならぬ一般社会での常識を克服できなかつた。例えば重度者より軽度者の方がえらいとか、働く者が偉いとかいう考えを内部に持ち込んだため内ゲバとなり、その人達はコロナーの中にバリエードを作り、外部に対して手をさしのべてしまった。地域社会の人々やボランティアに対して内部の悪口を言

い、殊更に同情を乞うような態度に出たこともその一例にすぎない。これらのことは私をも含めて中心となった人々にコロナー理論が完全に身に付かず、従って新たに入って来た人にもこの理論を植え付けることができなかつた証左なのである。

又一方、我々は一般社会からはじき出された存在なのであるが、それだけに逆に一般社会に対するあこがれは執拗なまでに根強いものがある。このあこがれが我々の組織を破壊の方向に向けていった。結婚の必然的結果として三人の子供がコロナーに誕生したのだが、今から思うとこれが決定的なコロナー解体の要因であつたように思う。つまり自分は重度障害者でも子供は健常者なのである。健常者は健常者の中で育てなければという意識が生れ、次々とコロナーから去っていった。「俺のためではない、この子のためだ」ということなのだが、このことは本人自身気付かないかもしれないが、大変なごまかしであり、よく言つて錯覚であると思う。子供は自分の命の延長であり、その子供を通して自分自身が社会に復帰したいということなのである。私は何もここで誰かを責めているのではない。前にも言つたとおり重度障害者、ひいては人間としての生き方を問題としてしているのである。

それにしても己れの生命の永続性に対する執着と自分をはじき出した社会へあこがれるエネルギーには我ながら驚くばかりだ。これを克服できるのは宗教の他に道はないであろう。大仏師は宗教家であつた。そしてその立場からコロナー理論(アウトサイダー理論)を打ち立て実際に試みたわけであるが、それに応える力が我々C Pの側になかつたのである。その結果自らの師を十字架ならぬ法廷の座に着けてしまった。同窓会関係の人々の間などでは矢田君の事件がコロナーを崩壊させたと単純に思いこんでいる人も多いようだが、決してそうではなく事実上コロナーは事件が起る前すでに崩壊していたのである。矢田君の傷害事件はさまざま人間ドラマの一つにすぎず、《無抵抗な障害者が虐待された》などというものではさらさらしない。言つてみれば愛憎の交錯した兄弟ゲンカ、或いは親子ゲンカがほんのほずみで大事になつたにすぎない。

これまでごたごた述べてきたことは《あるひとつのもの》へのプロセスである。我々はこれから如何に生きるべきなのか。《あるひとつのもの》それ

は既に言葉ではない。

(整肢療護園同窓会『同窓会会報』第三三号)

*原文を参照して、若干の訂正を加えている。

解題

9 「社会福祉は治安維持の道具か」は、『朝日ジャーナル』一九七一年二月一九日号の特集・手記「私にとつての国家 2 檻のなかの差別」のなかに掲載されたもの。大仏以外にも、在日朝鮮人など、それぞれ反体制的な運動に取り組んだ当事者たちの手記が並ぶ。内容としては、障害者はいわば現代の「持衰」、すなわち国家権力によるスケープゴートとして、中流意識の創出に利用されているだけであり、権力を支える「合理的精神」に抗して障害者は「非合理的な存在」として対峙していかねばならないとする。このような大仏の立論は、横塚や横田の主張にも重なる。「真の福祉は、みずからの手で闘い取り、築き上げる他にない」という言葉は、まさにマハラバ村での実践から導き出されたものであろう。

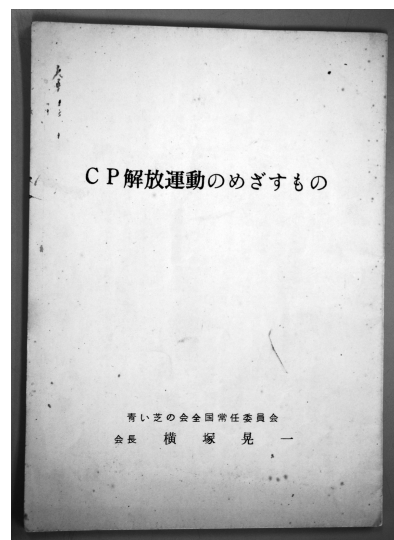
10 から12 まではいずれもパンフレットの形で印刷され、大仏の障害者解放思想を端的に示す論考であるが、その成立は、相互に関連しながら複雑な様相を呈している。まずはその諸相を確認するところから始めよう。

この間の、関連するパンフレットを列挙すると以下のようになる。

- (a) 『CP 解放運動のめざすもの』（発行年月日不記載、青い芝の会・青い芝の会大阪支部）
- (b) 『解放理論研究会テキスト』（一九七九年四月二〇日、発行 茨城青い芝の会）
- (c) 『解放理論研究会テキスト No.2』（一九七九年二月二四日、発行者 解放理論研究会）
- (d) 『CP 解放運動のめざすもの（他二編）』（一九七九年二月二四日、発行者 解放理論研究会 横塚りゑ方）

(a) 『CP 解放運動のめざすもの』は、横浜市の障害者活動センター「きょうの会」に寄贈されている横田弘の蔵書を二〇二〇年九月に調査した際発見したもので、表紙には「CP 解放運動のめざすもの」とタイトルが横書きされ、「青い芝の会全国常任委員会会長横塚晃一」の記名がある。

奥付には発行年月日の記載がないが、発行元として「青い芝の会」（寺田

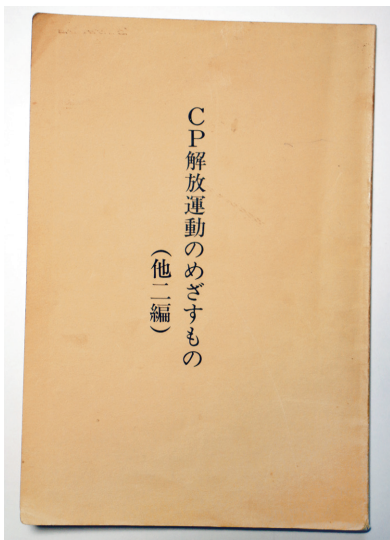
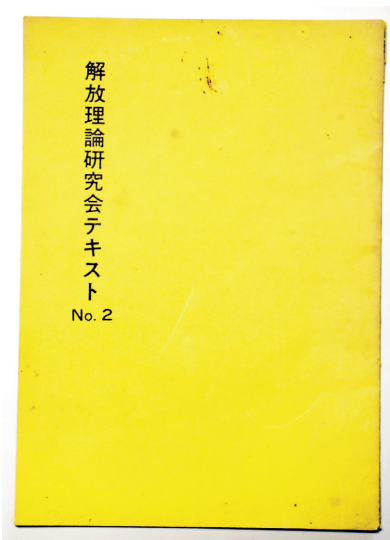
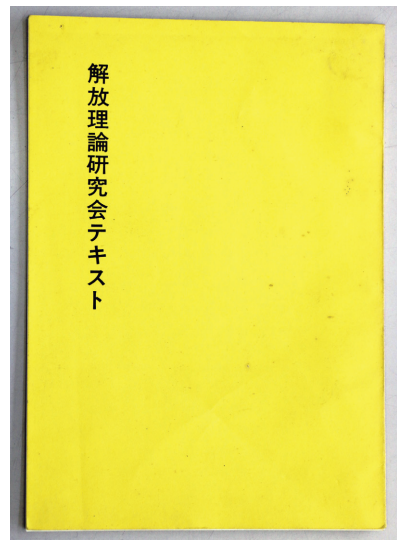


方の都営アパートの住所と電話番号番号）と「青い芝の会大阪支部」（大阪のリボン社の住所と電話番号）が記されている。

内容としては、『ジュリスト』に掲載され『母よ！殺すな』に再録された横塚の「ある障害者運動の目指すもの」のタイトルを変更し、その「一 殺される立場から」を、「一 殺される立場から」「二 行動を通して」「三 それでも施設が欲しいのか」に分節化して合計五節構成にしたものである。それ以外の変更はほぼないが、本文中に引用される大仏の発言のなかの二ヶ所に註が付され、記名はないが大仏自身がこれを解説している。

三節構成の「ある障害者運動の目指すもの」を含む『母よ！殺すな』が出版されたのが一九七五年二月、また「はじめに」でも触れたように、寺田が「青い芝の会」の執行部を退くのが同年の一月であるから、その間に印刷されたものであろう。もとより横塚の存命中であり、タイトルと節構成の変更、さらには大仏による註記を付して全国「青い芝の会」のパンフレットとして印刷することも、当然横塚の意志によるものだったと思われる。

おそらくこの一九七五年に、横塚の代表作「ある障害者運動の目指すもの」を単独で印刷してテキスト化する動きが全国「青い芝の会」のなかで生じ、その意図を明確にするべく、タイトルと節構成が変えられ、大仏による註記の解説が加えられたのであろう。もともと、実際にどの程度テキストとして利用されたのかは不明であるが、一方で大仏にとつてみれば、横塚による大仏の思想の総括ともいえるべき「五 崩壊からの出発」の記述は、みずからの思想を再検討する契機になったと見てさしつかえないだろう。同時期の「インタビュー構成 おのれの地獄を見きわめよ」でも、「ある障害者運動の目指すもの」の「三 崩壊からの出発」の一部を読み上げた上で、ここで付した註2の箇所をことさらに強調している（本稿、「Ⅲみずからを語る」、五九



頁)のは、その証左と言えよう。

この再検討作業の成果の一端は、横塚の早すぎる死の翌年、一九七九年に、パンフレットとして矢継ぎ早に発表されることになる。それは「マハラバ理論」を大仏がみずから乗り越えようとする試みであると同時に、横塚へ捧げるオマージュでもあったにちがいない。

(b)『解放理論研究会テキスト』は一九七九年四月二〇日、茨城青い芝の会の発行となっている。古代インドの唯識論から始まって、中国南北朝時代の天台智顛、日本中世の天台本覚思想、さらには現代の毛沢東の矛盾論へと、大仏独自の論理展開で東洋的な弁証法の系譜を辿るかなり晦渋な議論だが、最後に日本の「寂」に言及するところからも分るように、これは、「大仏空著作集(一)」所収の6「寂(サビ)とは?」(一九六四年)の議論を、東洋思想全体の脈絡のなかに位置づけなおす試みと見るこ

もできるだろう。

(c)『解放理論研究会テキストNo2』は、一九七九年一月二四日、解放理論研究会による発行である。「解放理論研究会」なるものの実態は今一つ判明ではないが、すでに(b)のタイトルにも含まれていたように、おそらく一九七九年四月以前に、茨城青い芝の会において大仏の独自の理論を教授する場として立ち上げられたものである。内容的にはこれまで晦渋な議論という外はないが、世襲財産制を否定するためにロックが持ち込んだ労働価値説がマルクスにまで継承され、労働能力をもたない脳性マヒ者を疎外する結果を招いたこと、また弁証法が、西欧ではヘーゲルの正反合に典型的に現われるように絶対化の論理を帰結し、これに対して毛沢東の弁証法は東洋的な伝統のもと、固定化・絶対化を排して自己批判を志向するに至ったことなどが主張される。その上で、二足歩行による人類の出産の困難化が必然的にCPを生み出したのであり、CPはいわば「人類の十字架を背負」う存在であると大仏の認識——同様の発想は『ころび草』序文にも見える(本稿、七五頁)——が示される。

(d)『CP 解放運動のめざすもの(他二編)』は、(c)と同じ一九七九年二月二四日に発行されているが、発行者は「解放理論研究会 横塚りゑ方」となっている。印刷所は(c)と同じ、茨城県の「総合プリント」である。内容的には、無記名ながらおそらく大仏による「序文(人は我々をアナーキストだと云う)」、五節構成の(a)『CP 解放運動のめざすもの』(大仏による「解説」を除く)、これも無記名ながら文体と内容から見て横塚の遺稿と目される「社会科学としての労働」——マルクスの「抽象的労働」の議論を援用して近代的な労働概念の矛盾を衝く——、さらに「解説(解放理論研究「会」テキストト)」として(c)の全文が、若干の修正を加えて再録される。

おそらくは、横塚の(a)『CP 解放運動のめざすもの』を障害者解放に向けて不可欠の論考と考えた大仏が、横塚の未発表の労働論とみずからによる「解放理論」として(c)も併せ、さらには権力批判を展開する短い序文を付して新版として印刷したものである。 (c)と同じ発行年月日である理由は判明ではないが、注目すべきは、解放理論研究会の連絡先として、横塚の未亡人りゑの名が上っている点である。横塚による(a)『CP 解放運動のめざす

もの』と遺稿の「社会科学としての労働」を収録する上で、大仏はりゑの公認を必要としたのではないだろうか。

もう一点注目すべきこととして、(a)において大仏が註を付していた「そして念仏を叫ばなければならなくなった時、必ず阿弥陀様が救って下さる」(本稿、三九頁)の箇所が、(d)では「そして念仏を叫ぼうと思いたつ心のある時、仏はつかんで離さないというのだ」の文言に改められている(本稿、四一頁*2も参照のこと)。(a)における大仏の註記をさらに展開させたものと言えるだろう。いずれにせよ、(d)『CP解放運動のめざすもの(他二編)』は、横塚の「ある障害者運動の目指すもの」に触発された大仏による障害者解放理論の、この時点での集大成だったと見ることが出来る。

以上の状況をふまえて本稿では、(a)『CP解放運動のめざすもの』と(b)『解放理論研究会テキスト』の全文をそれぞれ10と11として、(d)『CP解放運動のめざすもの(他二編)』(そのうちに含まれる(a)を除く)を12として掲載することにした。(c)は修正の上、(d)に再録されているからである。改めてまとめなおすと次のようになるだろう。

- (a) 『CP解放運動のめざすもの』(一九七五年?青い芝の会。著述目録の10) ↓横塚「ある障害者運動の目指すもの」を改名、五節構成にしたものに大仏による「解説」(註記)を付す。
- (b) 『解放理論研究会テキスト』(一九七九年四月二〇日、茨城青い芝の会。著述目録の11) ↓大仏の執筆。
- (c) 『解放理論研究会テキストNo.2』(一九七九年二月二四日、解放理論研究会) ↓風乱軒主人(大仏)の執筆。
- (d) 『CP解放運動のめざすもの(他二編)』(一九七九年二月二四日、解放理論研究会 横塚りゑ方。著述目録の12) ↓大仏「序文(人は我々をアナキストだと云う)」、横塚(a)『CP解放運動のめざすもの』(大仏による「解説」を除く。本稿では割愛した)、横塚「社会科学としての労働」、風乱軒主人(大仏)「解説(解放理論研究「会」テキストト)」(内容は(c)にほぼ同じ)

「皿みずから語る」の13「インタビュー構成 おのれの地獄を見きわめよ——CP(脳性マヒ)者とともに生きて」は、すでに何度か言及してきたように、一九七五年八月一日に収録されたインタビュー記事であり、茨城の地方誌『月刊東風』四三(一九七五年一〇月)に掲載されたものを、付属の資料も含めて再録している。大仏の家族や身近のことから、六〇年安保、社会主義や農民運動への関わり、「青い芝の会」と大仏との関係、マハラバ村の裏事情や殴打事件の真相、「悪人正機」の理解等々、一九七五年当時の、大仏自身、さらには彼を取り巻く状況を再現したものとして、きわめて貴重な資料であると考える。ここからは彼の人となりや思想をリアルに読み取ることが出来る。そのなかでとりわけ印象的なのは、左翼運動の党派性からある程度自由になって、一貫して「差別」対「被差別」の構図を基軸とする、大仏の柔軟な発想である。また、「青い芝の会」の告発路線をいわば理論づけながらも、運動の主体は常に脳性マヒ当事者であって、大仏自身はあくまで「協力者」で「スターター」でしかありえないとする自己認識も興味深い。

資料Ⅱの『ころび草』の序文は、実際に公刊されたものに大幅な推敲が加えられている。大仏としては、『ころび草』所収の文章に納得がいかなかったであろう、こちらの方が完成形に近いものと見ることが出来る。また、資料Ⅲの横塚による「敗軍の兵」も、彼にとつての「マハラバ村」の意味を物語っていて意義深い。

註

- (1) このパンフレットには茨城青い芝の会による第四版(二〇〇一年九月)があるが、タイトルが『脳性マヒ者(CP)解放運動のめざすもの』に改められている以外、内容は同じである。
- (2) この調査に際しては、「きょうの会」の渋谷治巳さんと原沢昌道さんにお世話になった。また、社会福祉法人青丘社の武居光さんには渋谷さんを紹介していただいた。記してお三方にお礼申し上げたい。
- (3) 大仏による「悪人正機」理解に関しては、横田弘『ころび草——脳性麻痺者のある共同生活の生成と崩壊』(自立社、一九七五年)中の「異端の系譜」の章(同書、一三三〜一六四頁)が、公表されたものなかでは最も詳細に触れている。もとより本書の著者は横田であるが、この章の硬質の文体と晦渋な論旨はま

うかたなく大仏のものである。ただし論理的な飛躍も含むその晦渋さと相俟つて、誤植・誤記も数多く見られ、その修正・復元には完全を期しがたい。本著作集への再録を見合わせた所以である。